

## 第IV部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要 1



## 「瓦積みの穴蔵」について

大成可乃

### 1. はじめに

大都市東京の地下には、江戸時代の巨大な土坑が数多く存在している。また江戸とよく比較対象される大坂（註1）においても類似する巨大な土坑は存在しており、それが江戸の地独特のものではなかったことが窺える。ただし大阪においては、その名称は文献史料に見られる「穴蔵」にほぼ統一され、東京のような名称の混乱（註2）は認められない。その理由の一つとして、大阪で発見される穴蔵の形態に東京ほどのバリエーションがないということ指摘できるであろう（註3）。

このような状況の中、東京・大阪の両地から4方向の壁面全てに瓦が積まれた穴蔵が初めて検出された。そこで今回、両遺構の紹介と穴蔵の研究でしばしば引用される『守貞漫稿』の「穴蔵」の記述も参考にしながら、瓦積みの穴蔵に期待された機能や、それを構築した工人について若干の考察を試みてみたい。

### 2. 東京大学本郷構内で発見された SX210

SX210が検出された東京大学本郷構内の遺跡医学部教育研究棟地点（仮称）は、本郷台地上のほぼ中央から東側、不忍池へと続く緩斜面上に位置する。また元和元（1615）年以降加賀前田家に拝領され、幕末まで屋敷が営まれている、いわゆる御殿空間と呼ばれる場所に位置する穴蔵である。

SX210の確認面での規模は、長辺約3m、短辺約2m、深さ約2m。平面形は北側がやや突出するが、ほぼ長方形であり、断面形は底辺が短い逆台形を呈する（図1、PL.1上）。壁面には、完形の瓦の間に平瓦の尾根で両断したものを、切断面を掘り形の中に隠すように二段重ね合わせ、計3段を一組にして、裏込めが入れられ少なくとも40段以上の平瓦が積まれていた（図2、PL.1左下）。

SX210において特筆すべきことは、その床面の下部構造である（図3、PL.1下右）。約60cm間隔に柱穴が検出され、その外側に板状のものが設けられていた痕跡が認められた。そして瓦が積まれていた面は、その上に約20cm前後の盛土（図2、7層）をして造られた面であることが確認された。

出土遺物はほとんど未整理の状態であり詳細を記すことはできないが、その大部分は多量の焼土や焼けた壁土・瓦・陶磁器類が占める。遺物の年代観については、調査を担当した堀内秀樹氏は「見込みに型押しした瀬戸・美濃の磁器皿や、紐状把手がついた山水土瓶などの幕末の物が出土している」と述べている（註4）。

### 3. 大阪で発見された穴蔵

瓦積みの穴蔵が発見された大坂城跡発掘調査地点（OS91-32）は南から北へ延びる上町台地の西側、標高15mほどの地である。大坂城の惣構内であり、江戸時代には町屋であった所である。

確認面での規模は、一辺2.8m、深さ1.5m。平面形は北側がやや突出するが、ほぼ正方形である。また突出部には2段分の階段が確認された（図4，PL. 2上）。断面形はSX210と同じく底辺が短い逆台形を呈する。壁面には裏込めが入られず、40段以上の平瓦が土壁に直に食い込むように積まれていた（図4）。ただし写真や図版に見られるように、東壁の上半分は土壁が露出し、下半分には切石が2段積まれていた（註5）。なお4隅の瓦は、模式図（図4）のように互い違いになるよう積まれていた。

また底には、4隅にごく浅いピットが検出されたが、柱痕は確認されなかった。中央部分には、水抜き穴と考えられる石組みのピットが検出された。

出土遺物は個々のものについて詳細な観察をするには至っていないが、出土量はコンテナ8箱にもおよび非常に多い。主要なものとして瓦、陶磁器、土器類（皿、火入れ、瓦燈、焙烙、施釉皿、人形など）があり、その大半は焼けていた。遺物の年代観は18世紀後半から19世紀代のものである。

### 4. 相違点と共通点

この章では、SX210と大阪の穴蔵の相違点と共通点を明確にしながら、瓦積みの穴蔵の構築方法を明らかにするとともに、造られた背景についても若干触れてみたい。

#### (1) 相違点

以下の4点を挙げることができる。

- ① 入口部分の設置。
- ② 壁面の構築方法。
- ③ 床面の下部構造。



④ 水抜き穴の設置。

①については、両遺構とも使用面が削平されていたためにその有無を確認することは困難である。ただし大阪の穴蔵には、北側の突出部に2段分の階段がある。この階段は、穴蔵とほぼ同時期に埋まったものであることが調査時に確認されている。従ってこの階段が穴蔵と同時に存在していた時期があり、この部分を入口として利用していたとも考えられる。しかし、この部分から穴蔵の底までは1m以上の高低差があるため、昇降の際には、さらに梯子のようなものが必要だったのではないだろうか。仮に両遺構とも昇降時に梯子のようなものを利用していても、坑底には梯子の足を置いたような痕跡は認められなかったことから、その梯子は常設のものではなく昇降時にのみ降ろされるような簡易なものであったことが推測される。

②については、4隅の瓦の積み方などから、SX210はまず南壁、つぎに西・東壁（註6）、最後に北壁というように1壁面ずつ構築したことが推測できる。西・東壁の隅の瓦には短くしたものを使用していたことも、南壁を積み上げた後、その長さに合わせて調整したことに起因するものであり、その壁面の構築方法を裏付けるものではないだろうか。

それに対して大阪の穴蔵は、4隅の瓦が互い違いに積まれていたことから、4壁を同時に積み上げる方法がとられたことが推測できる。壁面に積まれた瓦の大きさが不揃いであることなどは、このように4壁同時に積み上げていく中で、部分部分を調整したことに起因するのではないだろうか。

また瓦を積み上げる際に、SX210は裏込めを入れてしっかりと固定しているのに対し、大阪の穴蔵は裏込めを入れていない。このことは大阪の穴蔵の東壁が崩落したことや、壁面の瓦が水平に積まれなかったことなどの要因となったと考えられる。

③については、下部構造はSX210にのみ見られるものである。一体このような下部構造は何のために造られたものなのであろうか。類例がない今日においては、以下の2通りの理由を推測するにとどまる。第1に、壁面の瓦の荷重を支える、床面の強化を目的としたものである。第2に、この地下室が造られる以前の別遺構である。

第1の推測の根拠として、以下のようなことが考えられる。調査の際に瓦が積まれた床面では柱痕を確認できなかったことから、この柱がその面から突き出した形で使用されたとは考えられない。従って坑底部において何らかの機能を果たしていたもの、すなわち瓦が積まれることで大きな荷重のかかる床面を支える、基礎の役割を果たしたようなものが考えられるのである。しかしこの推測には以下のような疑問が生じる。(1)瓦が積まれる床

面の強化を目的としたものであるならば、柱で部分部分を支えるよりも壁際全体に梁を張るような方法を採用した方が効果的ではないか。(2)壁面を瓦積みにすることを意識して造られたものならば、なぜ西側と東側で瓦を積み始めた高さが異なるのか。(3)柱穴の外側の板材をどのように理解するのか。(4)完掘後の平面図で見ると、北東隅付近の3つの柱穴は瓦が積まれた壁のラインよりも内側に位置しており、壁を支えているとは言い難い。

以上のような疑問がある現時点においては、第1の推測が成立する可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

次に第2の理由の根拠として以下のようなことが考えられる。断面図を見ると、盛土がされる面から、西側の遺構の立ち上がりが極端に西側へ広がってから垂直に立ち上がっている。これはSX210以前に存在していた遺構を、西側へ掘り広げたような掘り方である。また前述した(4)の疑問などは、まさにSX210以前に存在していたL字形の遺構を北側へ掘り広げ、壁のラインを整えて構築したと考えれば理解が容易なのではないだろうか。

以上のことから、現段階ではこの下部構造はSX210が構築される以前にあった別遺構と考えた方がよいと思われる。

④については、穴蔵の規模や構造上の相違、そして立地条件などが反映していることは容易に想像がつくが、その穴蔵が有した機能が如何なるものだったのかということも関係しているのではないだろうか。すなわち水抜き穴を設けた大阪の穴蔵は、室内にモノを長期間入れるための機能を想定して造られたと考えられ、それに対して水抜き穴のないSX210は、室内にモノを短期間ないしは臨時に入れる機能を想定して造られたとも言えるのではないだろうか。ただし、壁の強度という点を考慮すると、裏込めを入れていない大阪の穴蔵は壁が弱いため、長期間の利用には不向きと言える。

## (2) 共通点

以下の4点を挙げることができる。

- ① 壁面の構築材料として割れた平瓦を使用。
- ② 台地上に構築。
- ③ 多量の焼土や焼けた壁土・瓦・陶磁器などが廃棄されている。
- ④ 廃棄年代は幕末。

①については、材料の調達という点を考えると、両遺構で使用していた瓦の大部分は割れ瓦であることから使用済みの瓦をリサイクルし使用した可能性を考えることができる。この仮説からは、ある程度の費用と、「壁面に瓦を積む」という技術を持つ人と、「割れ瓦」

を集めることが出来れば（註7）瓦積みの穴蔵を造ることは可能だったのではないかという推測がされる。

②については、台地上に構築していることから、両遺構とも地下水の心配はほとんどなかったと思われる。従って瓦積みという形態が、地下水の浸水を防ぐことだけを目的として造られたとは考え難い。例えば大阪の穴蔵に水抜き穴のようなものが設けられていたのも壁面に瓦を積んでも地下水の浸水は防げなかったことを示すものであり、瓦積みという形態が地下水の浸水対策として考えられただけのものではないという根拠の一つになるのではないだろうか。

③については、穴蔵の機能を考える上で重要な事柄であると思われる。しかし、両遺構とも遺物量は多いが、その大半は前述のように被災し捨てられた日用品である。すなわち穴蔵として機能していた時に収納されていたものとは考えにくく、ごみ穴として2次利用された時に混入したものである可能性が高い。このことは両遺構ともに、大半の遺物が穴蔵の底部からではなく埋土から出土したものであることから裏付けられる。従ってこの③から穴蔵の機能を考えることは現時点においては困難であり、今後、このような瓦積みの穴蔵が使用時の痕跡をとどめて発見されることを期待したい。

④については江戸・大坂という離れた場所において、しかも江戸では武家屋敷、大坂では町屋にと立地する環境の全く異なるところで、ほぼ時期を同じくして大変類似した形態の穴蔵が存在し、廃棄されたというのは大変に興味深い事柄である。このことが一体如何なることに起因しているのかは類例の少ない現時点においては断定できないが、その要因の一つとして①のような「容易さ」があったことは少なくとも指摘できるのではないだろうか。

## 5. まとめにかえて

1から4章にわたってSX210と大阪の穴蔵について比較してきたが、ここでは『守貞漫稿』（朝倉ほか1992）の「穴蔵」の記述も参考にして穴蔵の一形態である瓦積みの穴蔵が果たした機能や、それを造った職人について、若干の考察を加えてまとめにかえたい。

まず、『守貞漫稿』に見られる「穴蔵」と「穴蔵工」の記載部分を少し長くなるが引用してみたい。

「窖 俗ニ穴蔵ト云。或書曰、昔ハ窖ヲ用ヒズ。明曆二年ノ江戸本町二丁目ノ和泉屋九左エ門ト云、呉服賈ノ宅ニ始テ造之。世人、其火災ニ要アルコトヲ疑フテ、未用之。同三年

火アリ。此窖無恙ケリ。世人始テ窖ノ理アルヲ語り、諸戸ニ用之ト也。

今世、京坂ニハ富民金銀ヲ蓄納ム為ニ設之。故ニ、巨戸ニ非レバ不造之。兌舗ハ中小戸トモニ造之。

江戸モ、巨戸専ラ造之。或ハ、宅裡ニ造之。或ハ、土蔵裡ニ造之。専ラ金銀ヲ納ムノ料也。又、中以下金銭為ニ造ラズ。土蔵ヲ造ラザル者窖ヲ造リ、火災ノ時諸物ヲ是ニ納ム。是土蔵ハ、其費容易ナラズ。窖ハ易キヲ以テ也。或ハ、土蔵ノ費アレドモ、地ナキモノ等々亦造之。

京坂ニハ、定レル窖工無之。江戸ニハ、靈巖島川口町等数戸アリ。其他、諸所ニ在之。京坂多クハ、切石ヲ積之窖トス。江戸ハ、ヒバ材ヲ以テ造之ヲ専トス。京坂、地水深キ故ニ窖ニ水出ズ。江戸ハ、地水近キヲ以テ窖ニ入水アリ。毎時汲之云云。故ニ、木製ニ非レバ水ヲ防ギ難シ。木製ニテハ、更ニ水ノ入ラザル者甚ダ稀也。」(第1巻 60頁)

「窖工 俗ニ穴蔵屋ト云。靈巖島川口町ニ、此工多シ、又他坊ニモ往々在之。

古ハ窖ヲ用ヒズ。明暦二年江戸本町二丁目和泉屋九左エ門ト云呉服賣ニテ、始テ製之。世人火災ニ難アランコトヲ疑惑シ、他家未ダ不用之。同三年大火アリ。和泉ヤノ家宅ハ類焼スレドモ、窖ハ更ニ恙ナシ。茲ニ至テ、世人始テ其理アルコトヲ知り、世上専ラ造之。土蔵アル人モ、金銭ノ類ハ必ラズ窖ニ納ム。又小戸ノ者ハ、土蔵ヨリ費ノ易キ以テ造之。火事雑物ヲ納ムノ備トス。極粗製ニハ無底モアリ、号テヤツコ穴蔵ト云。精粗トモニ水洩リテ、平日ノ用ニハ良ナラズ。

京坂ニハ、蓄金ノ用ノミニ造之ニ石ヲ以テス。水洩ズ。或ハ、解船材ヲ以テス、別ニ窖工無之。江戸ハ木製也。」(第1巻 123頁)

この2つの文章を要約すると以下のようになる。(1)穴蔵の初見は明暦2(1656)年、江戸の呉服店においてである。そして翌3(1657)年の火災でその有効性が認められ、世間に普及した。(2)『守貞漫稿』が書かれた当時、すなわち幕末のころは、江戸・京坂ともに巨戸は金銀を蓄納するために造った。(3)穴蔵を造る場所は、宅裏か土蔵裏であった。(4)身分が中以下のものは金銭蓄納のために造るのではなく、火災の際の諸物を納めるために造った。すなわち、土蔵を造る費用がない者や、あるいは費用はあるが土蔵を造る土地のない者が造った。(5)江戸には靈巖島川口町をはじめ穴蔵工が所々にいるが、京坂には専門の穴蔵工はいない。(6)江戸の穴蔵はひば材を使用して造るが、京坂の穴蔵の多くは切石を

積んで造る。これは江戸では地下水位が高く浸水の心配があるためであり、京坂では地下水位が低いので浸水の心配がないためである。(7)江戸の穴蔵は精粗ともに、水が溜まるので平素ものを入れておくには適さない。

以上のように『守貞漫稿』には、穴蔵の機能が身分によって異なっていたことが書かれている。しかし、その機能と形態の関係について、すなわち機能に応じて形態のバリエーションがあったのか否か、あったとすればどのようなものであったのかは書かれていない。ただし、実際に発掘調査をして発見される穴蔵は、『守貞漫稿』に書かれている以上にバリエーション(註8)があることから、それ以上に機能に応じて様々な形態の穴蔵が造られていた可能性も指摘できるのではないだろうか。仮に機能に応じた形態の違いがあったのだとすれば、瓦積みの穴蔵はいかなる機能に応じて造られた穴蔵なのであろうか。『守貞漫稿』の記述を当てはめると、SX210と大阪の穴蔵は身分の異なる者により造られたものであるから、同じ瓦積みの穴蔵であってもその機能は異なるものであったことになる。すなわちSX210は巨戸(武家屋敷)にある穴蔵に相当するものであるから、金銀の蓄納を目的として造られたもの。大阪の穴蔵は中以下の身分(町屋)にある穴蔵に相当するものであるから、火事の際の非常用倉庫的な機能を期待されて造られたものということになる。しかし両遺構とも、上述したような機能を有していたのか否かを考古学的に検証するには至らなかった。

次に穴蔵を造った職人について考えてみたい。両遺構の形態や構造を観察してきたが、いずれも素人の手によるとは考えにくい。特にSX210の整然とした瓦の積み方などは、素人の手では極めて困難ではないだろうか。『守貞漫稿』には(5)のように、江戸のみに穴蔵工が存在したと書かれている。同じ瓦積みであっても、大坂の穴蔵の構造が江戸におけるSX210の構造より稚拙であったことも『守貞漫稿』の記述を裏付けるものではないだろうか。ただし、このような違いが生じる要因の一つに、武家屋敷と町屋という環境の相違があったことは言うまでもないだろう。

以上のように、江戸・大坂という限られた場所で、現時点では2例しか発見されていない瓦積みの穴蔵について考察してきた。しかし、この2例だけでは分析材料が少なく、その機能や穴蔵工人についていくつかの仮説を提示するにとどまり、深く言及することができなかった。今後、このような形態の穴蔵が数多く発見されることを期待し、それらの類例を考慮した上で本文で提示した仮説の検証をし、穴蔵が有した機能についても明らかにしていきたい。

SX210については堀内氏が「1840～1845年に作られたと推定される「江戸屋敷総図」には、長軸を同じくして該所に「穴蔵」の記載があり、おそらくこれにあたるであろう。おそらく上屋があったであろうと思われるが、当時このような形態のものを穴蔵として認識されていたことを窺わせる」と述べている(註9)。堀内氏が言うように、その当時の人々がSX210のような形態のものを穴蔵の範疇として捉えていたのだとすれば、文献史料に見られる穴蔵と、実際に発見される穴蔵との間に一つの接点を提示し、更にその具体的構造や構築方法の一端を明らかにすることができたことは今回の成果の一つであり、今後の穴蔵の研究に新たな一石を投じることになれば幸いである。

最後に、筆者がこの文章を書くにあたり、多くの図版、写真などを提供していただいた財団法人大阪市文化財協会の佐治敬三理事長、永島暉臣慎課長、伊藤 純氏にお礼を申し上げるとともに、実際にSX210の調査を担当された鮫島和大氏(現静岡大学講師)や、助言をいただいた成瀬晃司氏に感謝を表す。

## 註

- (1) 「大坂」と「大阪」の使い分けについては、明治維新以前を「大坂」、以後を「大阪」としている大阪市文化財協会の表記にならった。また「江戸」と対比する場合の表記も「大坂」とし、単に地名や場所を示す場合は「大阪」を用いた。
- (2) この名称の混乱を東京大学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司氏は、「江戸藩邸の地下空間—東京大学構内の遺跡を例に」『武家屋敷』の中で、「江戸時代の地下室は研究者によって、地下式坑、地下式土坑、穴蔵、地下室、地下室とさまざまな名称で呼ばれているが、それらの文字の持つ意味から推測される機能によって厳密に分類されたものではなく、研究者個人の選択で総称として用いられる場合がほとんどである。(略)地下室の形態には多数のバリエーションがあり、またそれ自体には機能を推測するための情報がほとんど含まれていないためである」と指摘されている。
- (3) しかし最大の理由は、穴蔵が江戸ほど注目されていないということにあると思われる。
- (4) 堀内秀樹1995「東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点(仮称)の調査」『江戸遺跡研究会会報』NO.54
- (5) 土壁が露出している部分には、若干ではあるが板材の痕跡が認められた。従って、上半分には板壁のようなものが貼られていた可能性がある。またこの壁は、構築当初より幾分か東側へ掘り広げられことが確認されているので、何らかの理由で壁面の瓦が崩落したのち上半分を板壁に、下半分に切石を積んで新たな壁面としたことが推測される。
- (6) この西・東壁についてはどちらが先行して構築されたかは判断できなかった。
- (7) おそらく瓦を入手し、積むことが可能であったのは「瓦工」であり、この職人の手伝いをなくしては瓦積み穴蔵の構築は困難だったのではないだろうか。

## 「瓦積みの穴蔵」について

(8) 東京都の小泉弘氏は『江戸の穴』の中で、両遺構のように江戸で発見される地中に部屋をもつ遺構を「地下室」と呼び、大きく5群に分類している。

1群—平面観、つまり上から見た輪郭が方形を呈し、室の幅と奥行き比率が比較的小さい。出入口が直接主体部に取り付く場合が多い。

2群—平面観が羽子板状ないし長方形を呈し、主体部の幅と奥行き比率が大きい。天井の横断面は穹窿状に湾曲する例が多い。出入口と主体部との間に、狭い通路が介在する。しばしば一つの出入口から、複数の主体部が派生する。

3群—垂直に掘られた縦坑から、長い水平坑道が穿たれる。水平坑道は数方向に派生し、枝分かれもする。いわゆる「地下坑」であり、地下室の範疇に入れるべきか否か、今後の検討が待たれる。

4群—開放性の掘り方の中に木製の枡形の部屋を設置した地下室である。

5群—開放性の掘り方の中に石組の枡形の部屋を設置した地下室である。

そして機能について1・4・5群は穴蔵を、2群は麴室を想定されている。また、穴蔵の機能として火災の際の緊急の保管施設と述べられた上で、穴蔵と土蔵が並列して設置されていることがあることから、土蔵の代用としてばかりではなく、やや異なった機能を評価されて設けられたものであるとも指摘されている。

(9) (4)に同じ

## 引用・参考文献

植木 久・伊藤 純・大成可乃「(懶大和銀行による建設工事に伴う大坂城跡発掘調査」

OS91-32略報(大阪市文化財協会)

大成可乃 1992「穴蔵について」『葦火』36号(大阪市文化財協会)

金丸義一 1985「遺構から見た江戸建築の一例」

『都心部の遺跡—貝塚・古墳・江戸』東京都教育委員会

喜田川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1992『守貞漫稿』東京堂出版

古泉 弘 1983『江戸を掘る』柏書房

古泉 弘 1987『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社

古泉 弘 1989「江戸の町屋とその遺構」『江戸の住空間とその周辺』

江戸遺跡研究会第2回大会報告要旨

古泉 弘 1990『江戸の穴』柏書房

小林 克 1986「地下室考」『物質文化』47

菅谷通保 1990「[地下式坑]の系列と変遷」

『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地点遺跡』

東京大学遺跡調査室

玉井哲雄 1986『江戸—失われた都市空間を読む』平凡社

藤本 強 1990『埋もれた江戸』平凡社

細川 義 1989「文献史料から見た理学部7号館地点」

第IV部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要1

- 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学理学部遺跡調査室  
堀内秀樹 1985「東京大学本郷構内の遺跡 医学部教育研究棟地点（仮称）の調査」  
『江戸遺跡研究会会報』NO.54  
宮崎勝美・吉田伸之編 1994『武家屋敷—空間と社会—』山川出版社  
山口剛志 1989「地下式土坑」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』  
東京大学理学部遺跡調査室



「瓦積みの穴蔵」について

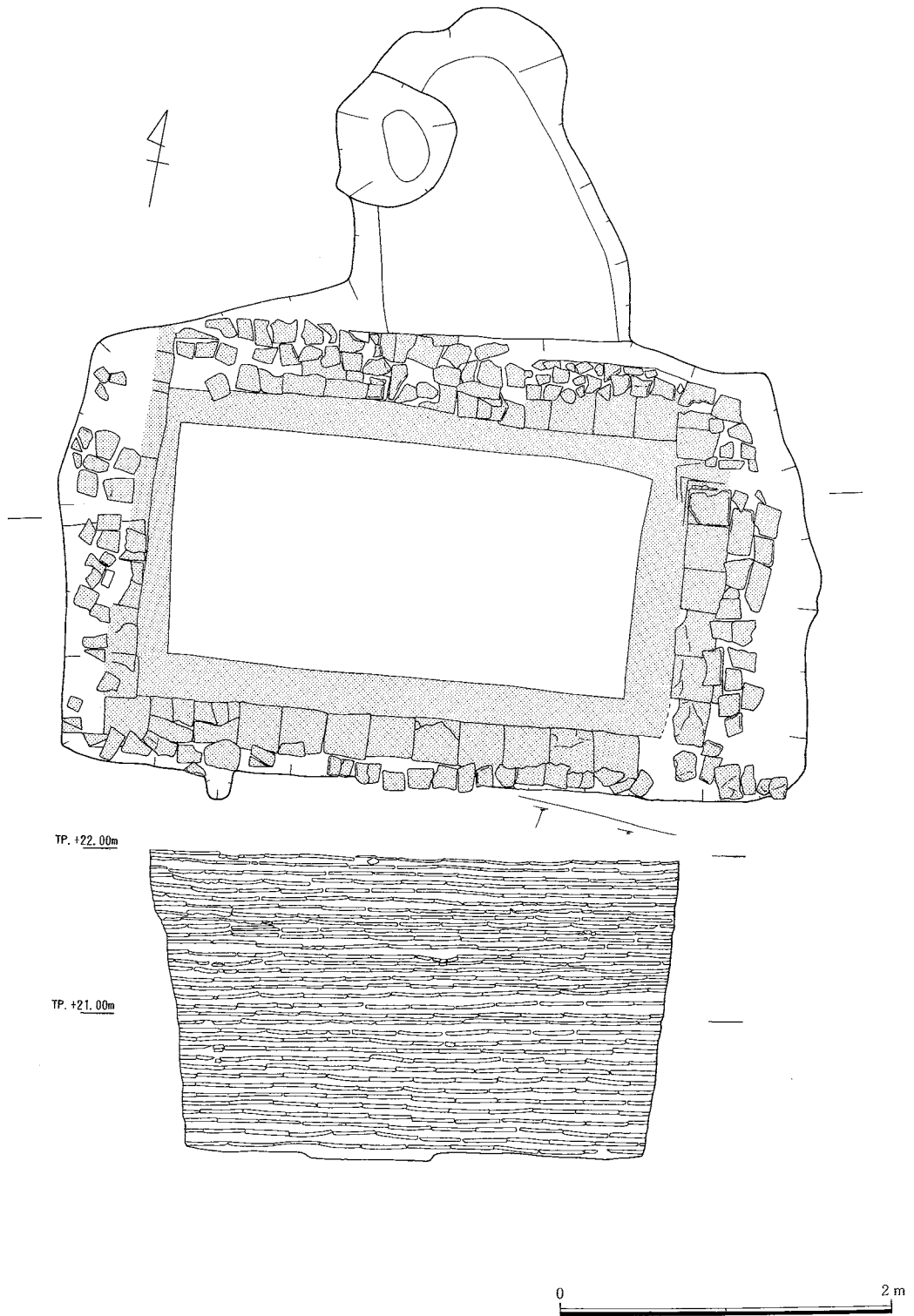
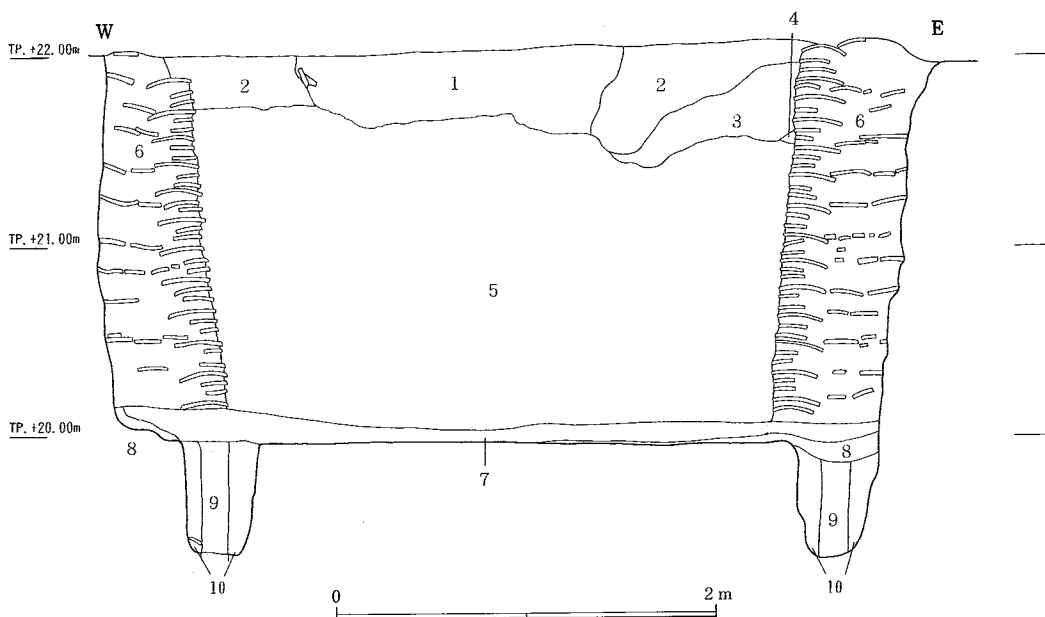


図1 (上) 瓦積み室内完掘状況 (下) 瓦積み室内南壁実測図



- 第1層：暗茶褐色土（しまりやや欠、粘性やや欠、粒やや粗、5～10mm程のロームブロック、焼土粒、礫多い、焼瓦含む）
- 第2層：暗褐色土（しまりやや有、粘性やや有、粒やや粗、5～30mmロームブロック多い、焼土若干、礫やや多い、焼瓦少量含む）
- 第3層：暗黄褐色土（しまりやや有、粘性やや欠、粒粗、3～5mm程のロームブロック多量、礫多い、焼土若干含む）
- 第4層：暗褐色土（しまりやや欠、粘性やや欠、粒やや粗、暗褐色土主体、細かいローム粒多い）
- 第5層：焼瓦層（焼瓦主体、間に粘土を多く含む暗褐色土を挟む）
- 第6層：暗黄灰褐色土（しまり強、粘性有、粒やや粗、ローム土、暗褐色土を主体とした粘質土でよくしまる。ロームブロック、礫、焼土を若干含む）
- 第7層：暗黄褐色土（しまり有、粘性強、粒やや粗、ローム土及び暗褐色土が縞状に重なる。焼土、砂利を若干含む）
- 第8層：暗灰黄褐色土（しまり有、粘性強、粒やや粗、粘性のある暗褐色土中ローム粒多い、ロームブロックやや多い、焼土、炭少量含む）
- 第9層：黒褐色土（しまり欠、粘性やや欠、粒やや細、暗褐色土主体、ローム粒多い、空洞となる部分多い、柱痕）
- 第10層：黄褐色土（しまり有、粘性やや有、粒粗、粘性のある暗褐色土中、ロームブロック・粒を多量、炭、焼土粒を少量含む）

図2 SX210 セクション図

「瓦積みの穴蔵」について

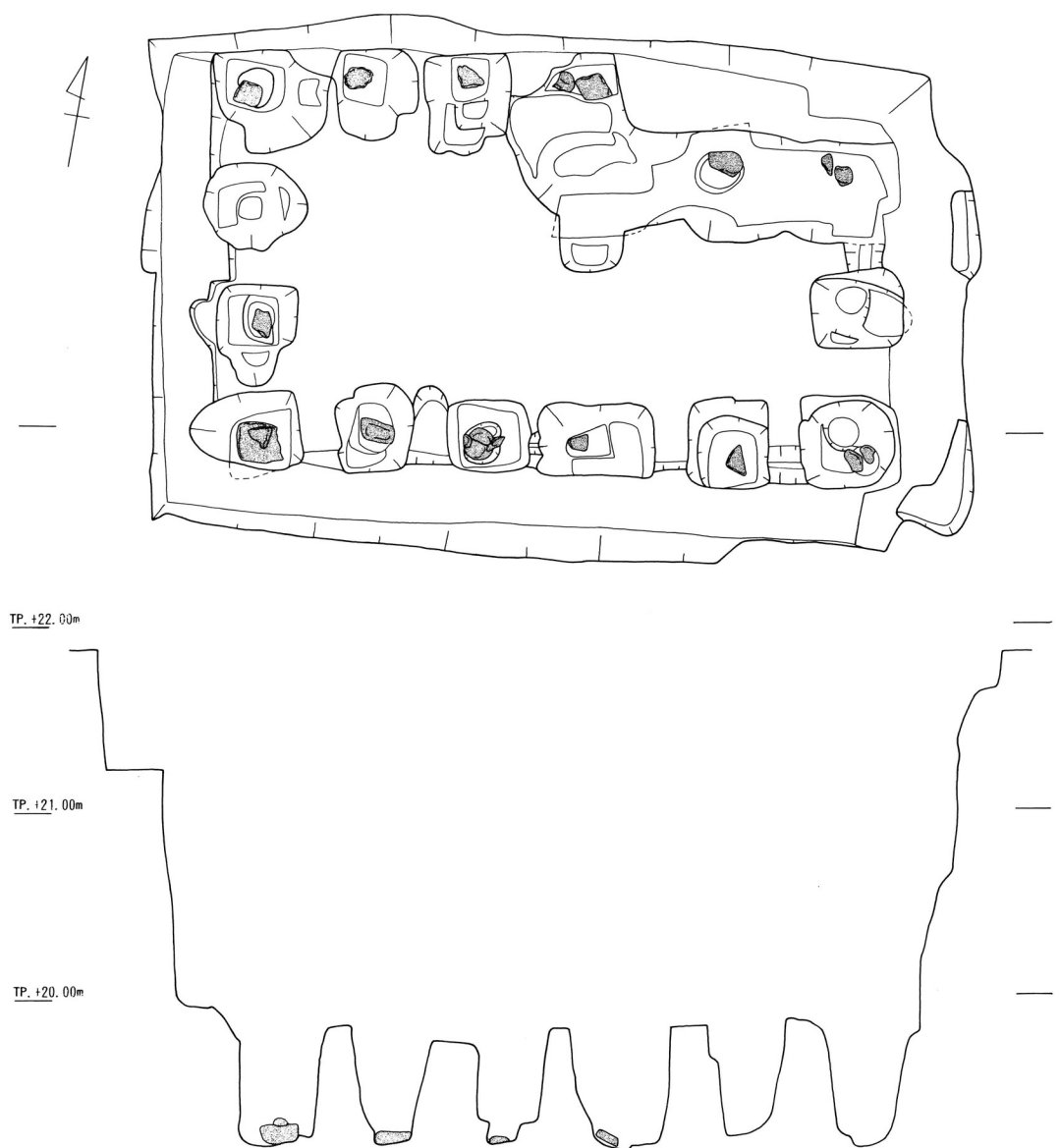


図3 S×210 (上) 床面下柱列検出状況 (下) エレベーション図

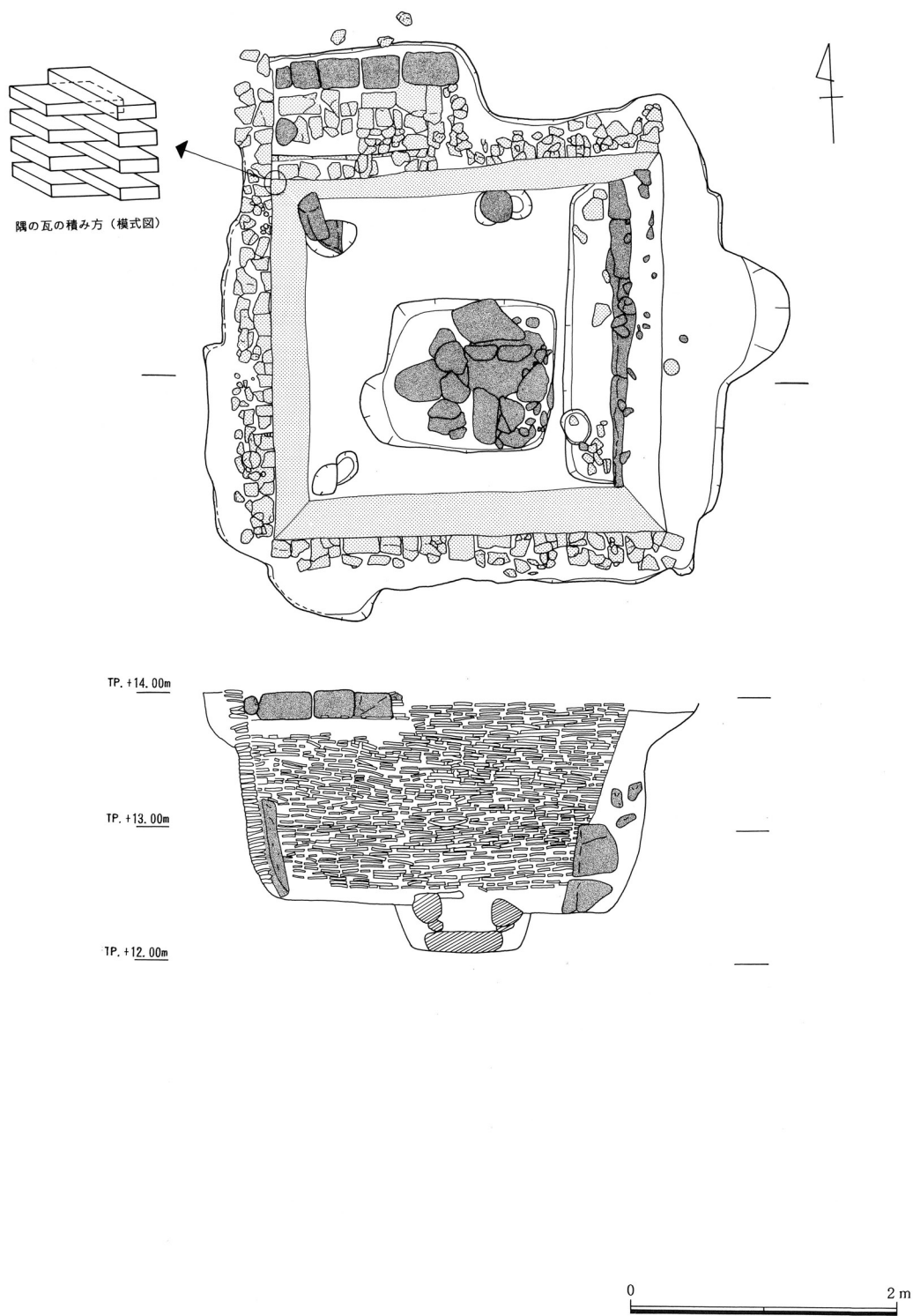
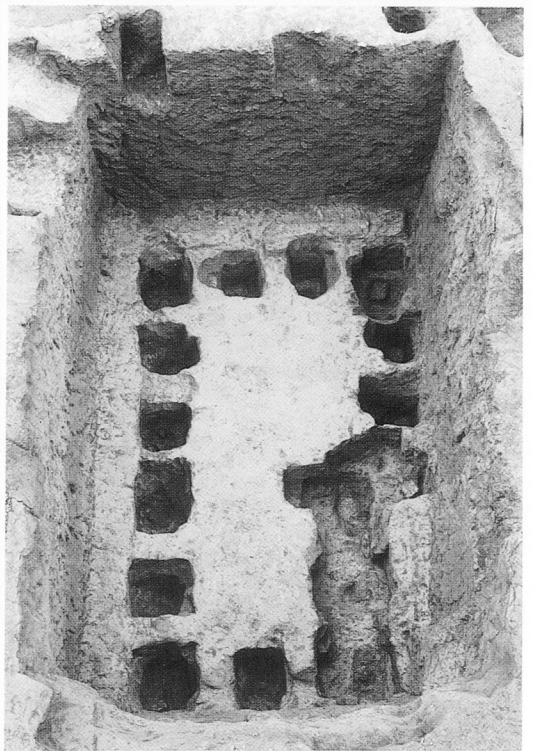
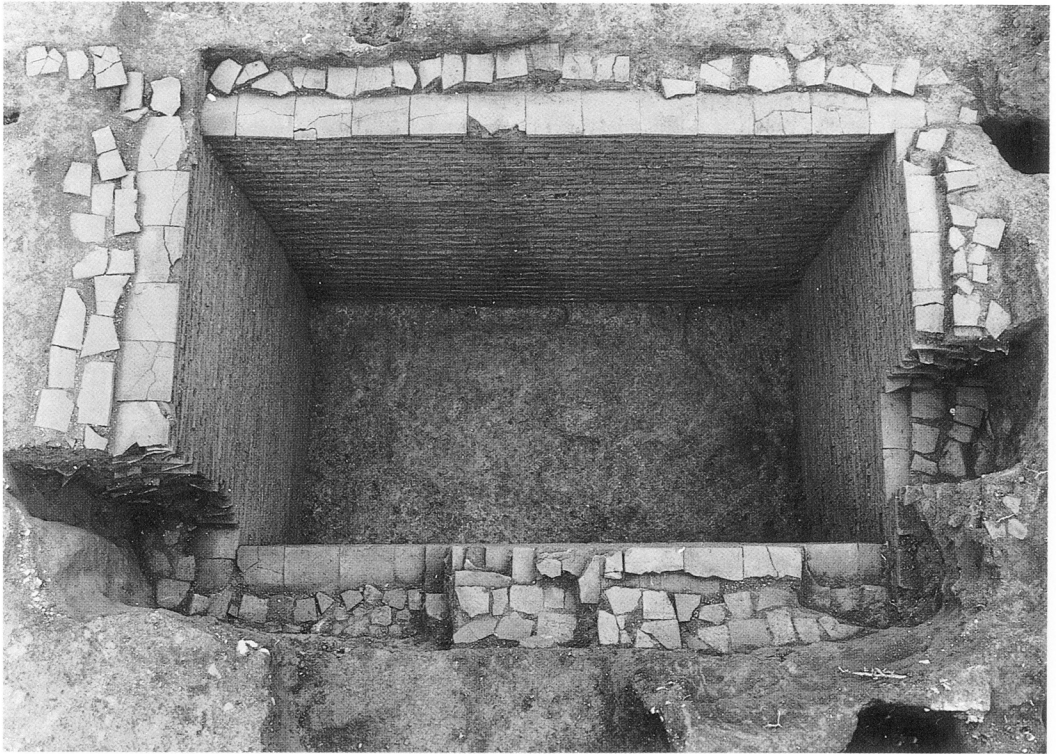
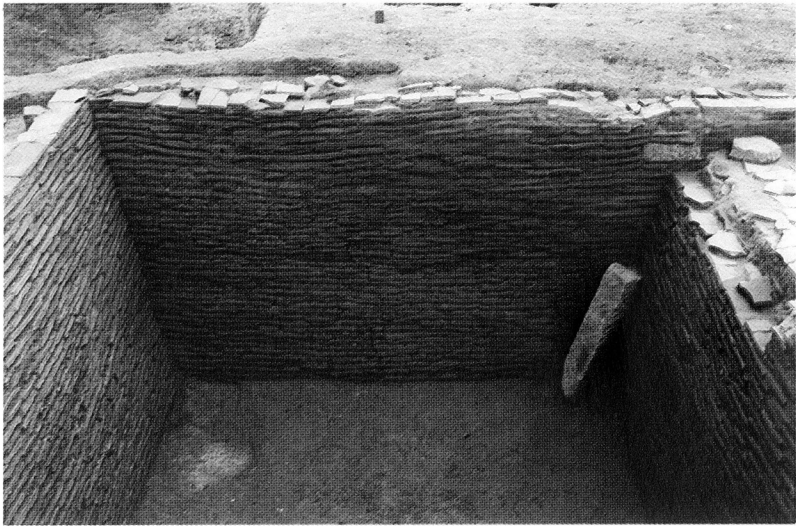


図4 大阪の穴蔵 (上) 瓦積み室内完掘状況 (下) セクション図



PL.1 (上) 瓦積み室内検出状況 (北から)  
(下左) 瓦の積み方 (下右) 完掘状況 (東から)





PL.2 大阪の穴蔵 (上) 瓦積み室内検出状況 (南から)  
(下) 瓦積み室内東壁面 (西から)





## 東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点 SE67出土遺物の年代的考察

佐藤 律子・遠藤 香・堀内 秀樹

### はじめに

東京大学本郷構内は周知のように江戸時代を通じて加賀前田藩をはじめ、加賀の支藩である大聖寺藩、富山藩、水戸藩、越後高田藩などの大名屋敷が経営されていた場所に位置する。筆者らは以前より遺構内出土一括陶磁器群の分析より構内の段階設定の提示、有効性を確認してきたが（成瀬・堀内1990、堀内1992）、江戸時代初期一特に17世紀前半段階は東大構内のみならず江戸遺跡を俯瞰してみても良好な資料が確認されていなかった。こうした中、近年丸の内三丁目遺跡、汐留遺跡などの発掘調査から該期の良好な一括資料が確認、報告され、出土陶磁器群の様相も検討できる段階になってきつつあると感じている。ここでは断片的な資料ではあるが該期の資料が出土した薬学部新館地点 SE67出土遺物群について江戸遺跡、大坂城、小田原城などの調査結果と比較検討して年代的な考察を行いたい。

（堀内）

### 1. 薬学部新館地点および SE67の概要（図1）

薬学部新館地点は、東京大学本郷構内の遺跡の南側台地上から不忍池に落ちる緩斜面に位置する。調査面積は約1300m<sup>2</sup>、調査期間は1992年10月21日から12月18日である。遺跡の遺存度は近代以降の削平によって総じて悪く、特に調査区北半は深く掘られていたため、遺構の坑底および井戸しか認められなかった。

ここで紹介する SE67は調査区北西側に位置している素掘りの井戸である。確認面での径は約120cm、壁面には相対して足掛けと考えられる小孔が横方向に掘られていた。覆土は粒子の細かいさらさらの黒褐色を呈していた。このほか江戸時代に比定される井戸は十数基確認されているが、1基を除き、すべて SE67と同様の特徴を有していた。これらは東京大学本郷構内の遺跡では17世紀中葉以前に廃絶された井戸に共通する特徴である。（堀内）

### 2. SE67の出土遺物（図2・3）

1～13は陶器、1～12は瀬戸・美濃で、13は丹波である。

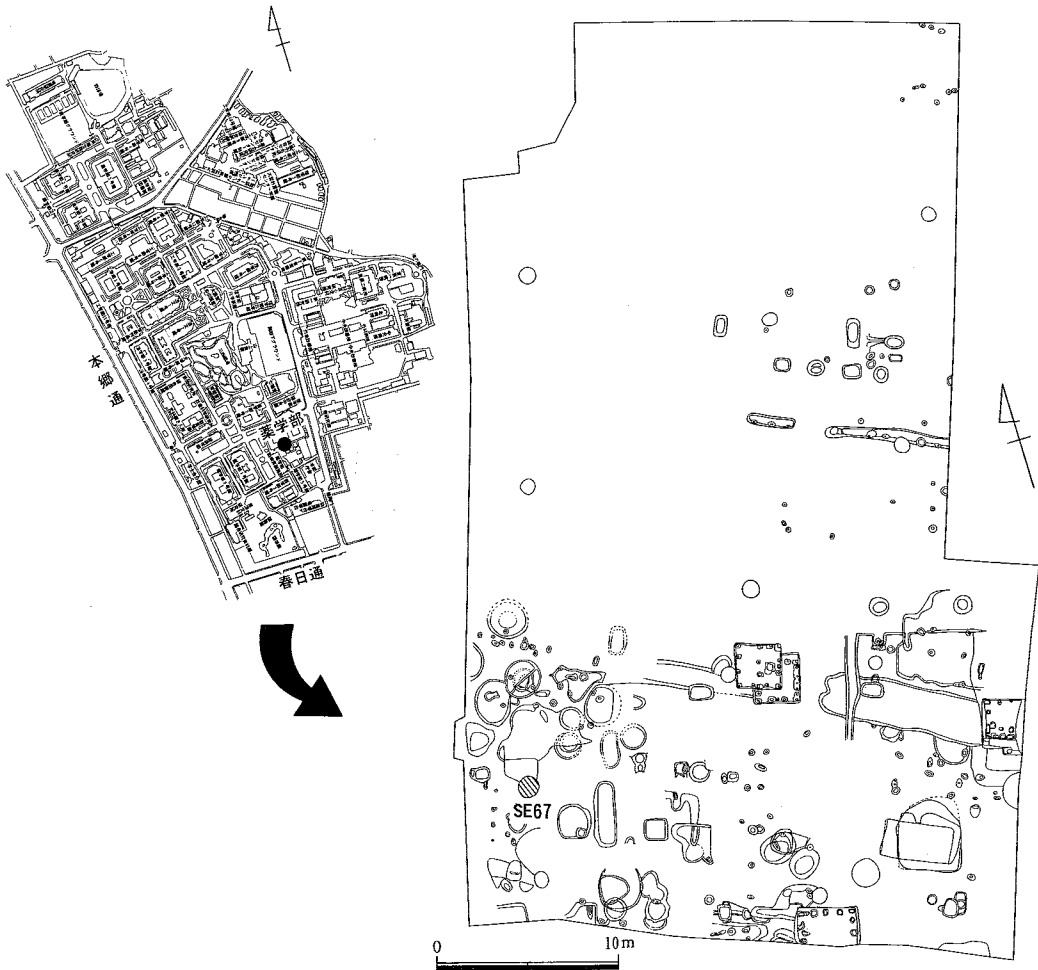


図1 薬学部新館地点遺跡遺構配置図

1・2は碗である。1は内湾して立ち上がり、腰部に横方向の回転ヘラ削り痕が認められる。高台周辺を除き鉄釉を施し、その上から灰釉が流し掛けされている。2は残存部全体に長石釉が施されている。

3～9は皿である。3～5は志野で、3は内面体部に草文が、4は見込みに蘭竹文がそれぞれ鉄絵具で描かれている。4は口縁が鐔状を呈している。5は無文。6と7は総織部で、6は高台から開きながら立ち上がり鐔皿状を呈している。7は口縁部が欠損しているが6と同様の形態と推測される。両方とも高台周辺を除き織部釉が施されている。8は鐔皿状を呈するが、全体に形がゆがんでいる。高台を除き灰釉が施されている。9は高台を除き長石釉が施されていて、底部にススが認められる。

10は志野の徳利で、碁筒底風の高台から内湾して立ち上り、上半は欠損している。胴部中位にややラフなタッチで鉄絵が描かれている。

11は笠原鉢である。残存部全体に灰釉が施され、口縁内面には緑釉が流し掛けされている。見込みには鉄絵具で文様が描かれているが、破片のみなので全体の様子は窺うことができない。

12と13は播鉢である。12の播目は1単位14条の櫛引きで、単位間には隙間が見られる。見込みの播目は渦巻き状である。全体に鉄釉が施されている。13は焼締陶器で、口縁は外ソギ状に箱形を呈する。播目は1単位5条の櫛引きで隙間なく施されている。体部内面下位に重ね積みのための窯道具として使われたと思われる陶片痕が認められる。(佐藤)

14～27は土器である。

14～24はかわらけで、口径の最大は、12.3cm、最小は8.1cmである。14～16・19・20は底部より直線的に立ち上がり、17・18は外反しながら立ち上がる。14～23はロクロ成形で、24は手づくね成形である。24以外は、底部に回転の糸切り離し痕が認められる。14・16・17・20・21・23の回転方向は右回転であるが、それ以外は判別不可能である。14・20・22・23には口唇部周辺にススの付着が認められる。

25は焼塩壺である。ロクロ成形で底部が厚く、器面中位上の一重枠の中に「三たと久左衛門」の刻印がある。

26・27は火鉢である。26の口径は13.0cm、27は46.0cm(推定)である。両方とも口縁内側にススの付着が認められる。

28は軒丸瓦の瓦当部の一部で、文様は梅鉢文である。

29・30は煙管の雁首と吸口で、吸口部は欠損している。火皿と首部の接合部には幅3mmの補強帯を有する。

31は砥石である。色調は淡褐色を呈する。直方体を基本とする形態である。(遠藤)

### 3. 江戸遺跡(図4 註1)

江戸遺跡の中でSE67の出土遺物群と様相が近いのは千代田区丸の内三丁目遺跡52号土坑(以下「52号」と略す)があげられる。52号は丸の内三丁目遺跡の最下層で確認された土坑のうち、最も規模が大きく、遺物の量が多かった遺構である。

出土遺物の産地組成については、陶器は、瀬戸・美濃が中心で、肥前、志戸呂、備前等が混じる程度である。磁器は中国青花が主だが、肥前磁器も少量出土している。

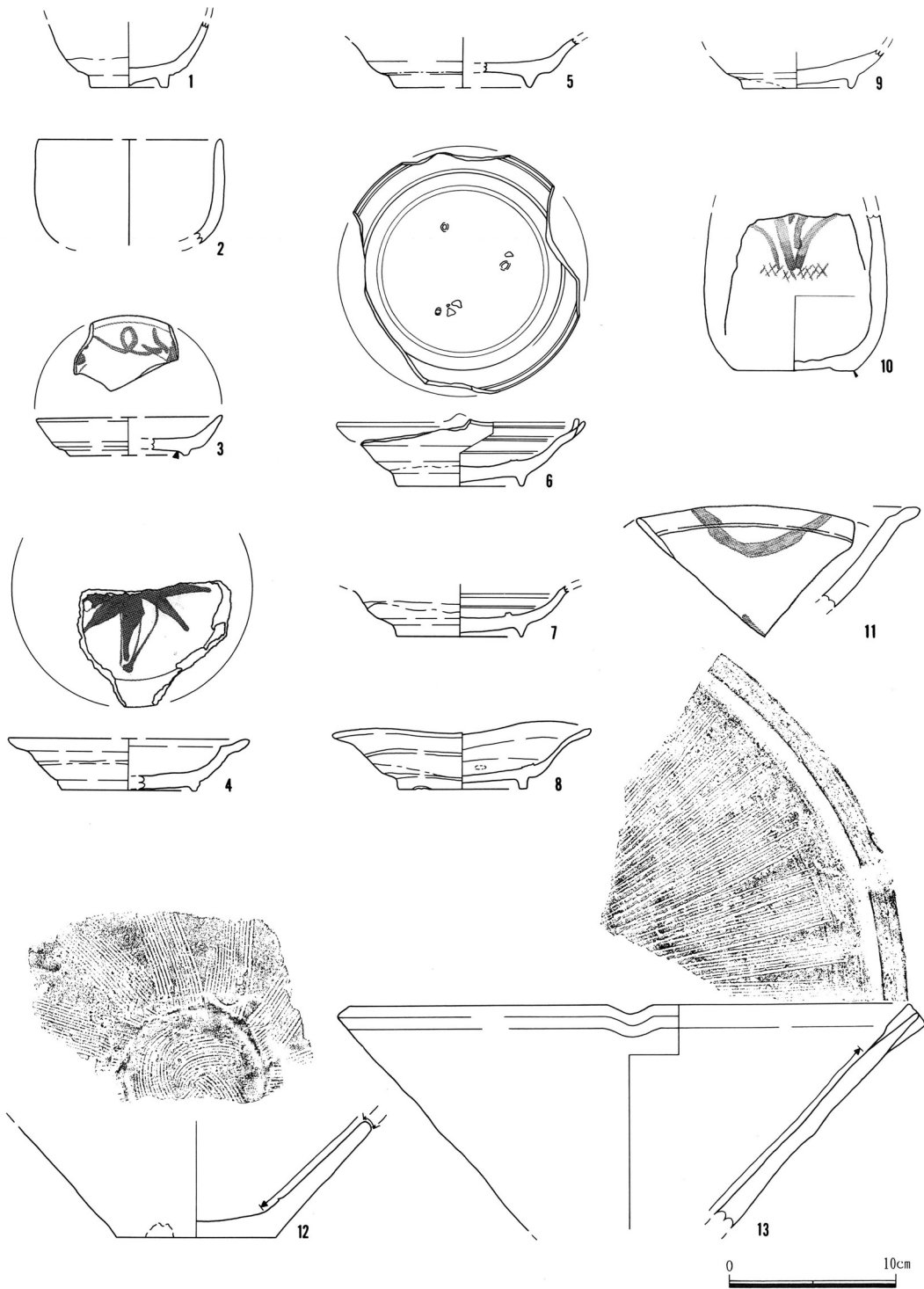


图2 薬学部新館地点 SE67出土遺物(1)

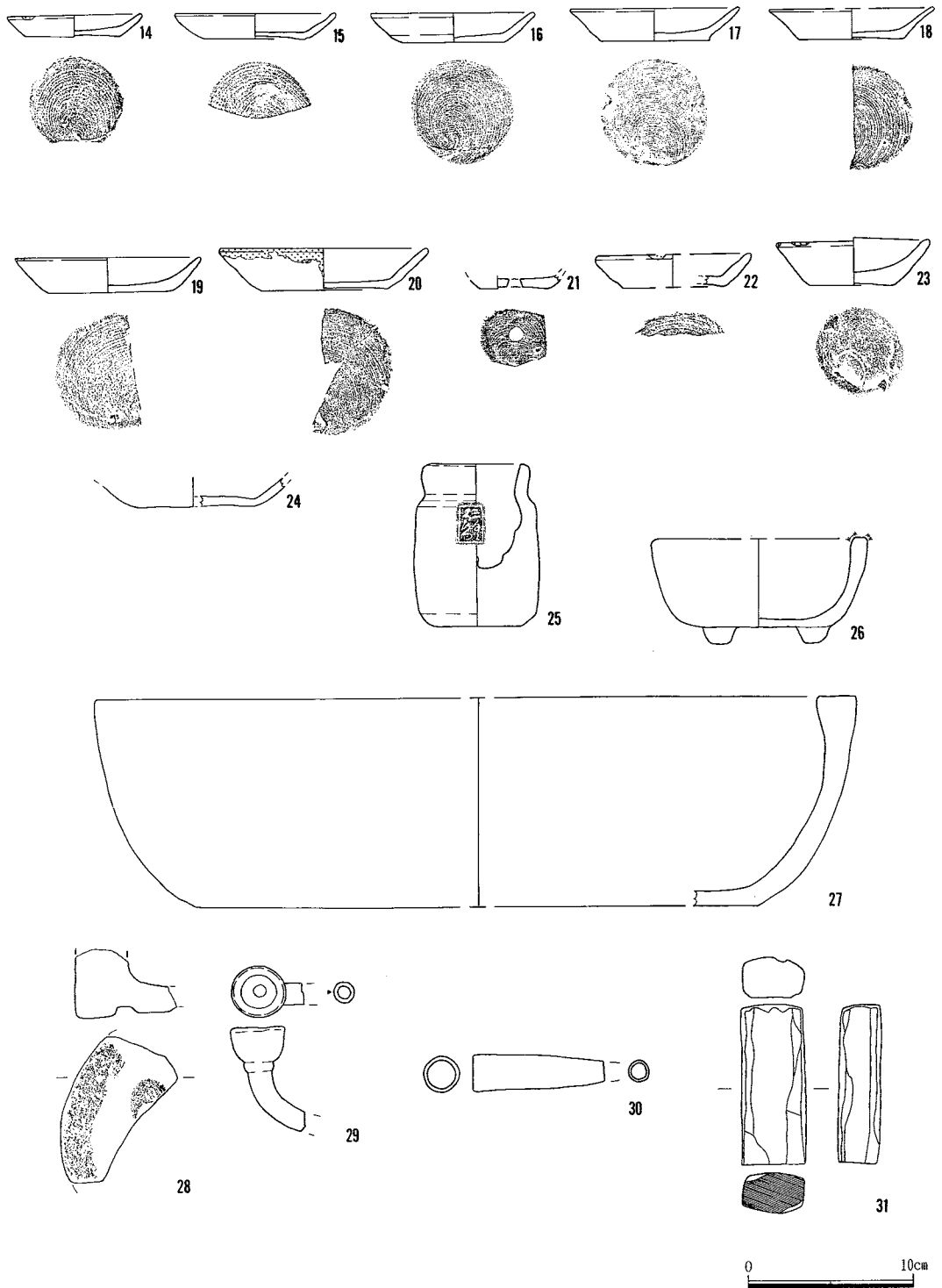


図3 薬学部新館地点 SE67出土遺物(2)

陶器で割合の高い器種として天目茶碗があげられている。天目茶碗は瀬戸・美濃が主だが、肥前のものも少量出土している。その他、碗では丸碗やいわゆる黒織部の沓茶碗が出土している。皿で特筆すべきことは、志野や織部が出土していることである。志野には鉄絵具で体部内面に草花文が描かれたものや、見込みに蘭竹文が描かれたものがある。織部には灰釉で散らしたようにわずかに緑釉の施されたものや、鉄絵具で見込みに蘭竹文を描き、灰釉と緑釉を掛け分けしたもの等がある。鉢には、瀬戸・美濃の笠原鉢等がある。播鉢は瀬戸・美濃、丹波、備前が出土している。瀬戸・美濃の播鉢は鉄釉が施されており、播目は櫛引きで単位間に隙間が見られる。丹波は焼締陶器で、1本引きのものと、櫛引きのものがあり、口縁部は共に箱形を呈する。備前は焼締陶器で播目は櫛引きである。

磁器は中国青花が主であるが、肥前磁器の中にはいわゆる初期伊万里の吹き墨の丸皿が1点出土している。

土器はかわらけが主で、他に羽釜や焙烙、焼塩壺等が出土している。かわらけの形態は様々で、厚手や薄手、ロクロ成形や手づくね成形がある。焼塩壺は、輪積み成形と手づくね成形で、刻印の無い小型のものが出土している。(佐藤)

#### 4. 大坂城・城下 (図5)

大坂では、石山本願寺期から徳川期にかけて、執政者の交代等による城下の整備・兵火等、年代的定点となる資料が確認されている。それらは調査を担当された諸氏によって以下のように段階設定がなされている。

石山本願寺期は、蓮如がこの地に隠居所を建立した明応五(1496)年から、石山合戦(天正八(1580)年)のためこの地が焼亡するまでをいう。

豊臣大坂城期は、石山合戦以後大坂夏の陣(慶長二十(1615)年)までの豊臣氏が大坂を支配していた時期をいい、さらにこの間を慶長三(1598)年の大坂城三ノ丸工事や城下町建設を境に「前期」「後期」に二分する(以下「豊臣前期」「豊臣後期」と略す)。

徳川大坂城初期は、大坂が江戸幕府の直轄地となった夏の陣以降17世紀中頃までをいう。この間を肥前磁器が出現する前までを「徳川初期①」とし、それ以後を「徳川初期②」とする。徳川初期②の年代を明らかにする資料はないが、1622年より新しく1650年以前と考えられている(森1995a)。

以下それぞれの時期の出土遺物を概観する。

石山本願寺期の陶器には唐津(肥前陶器)はまだ無く、瀬戸・美濃が中心である。鉄釉

の天目茶碗や灰釉の皿が多く、黄瀬戸や志野は出現していない。磁器は国産のものはまだなく、中国の青花、白磁が中心である。

豊臣前期の陶器は、唐津が出現するようになるが、瀬戸・美濃が中心で、鉄釉の天目茶碗が多い。黄瀬戸は出現するが、志野はまだ無い。磁器は中国青花が中心である。

豊臣後期（図5上段）の特徴は唐津が急増し、瀬戸・美濃を上回ることである。瀬戸・美濃ではそれまで主流となっていた天目茶碗が減少し、新たに志野と織部の茶陶が出現する。黄瀬戸は豊臣前期にも少量存在するが、出土量が多いのはこの時期である。磁器は国産のものはまだ無く、中国の青花が中心である。

徳川初期①は船場の魚市場遺跡（AZ87-5）のSX201出土の遺物を指標としている（図5中段）。SX201は大坂冬の陣（慶長十九（1614）年）の焼土層より新しく（註2）、元和六・七（1620・1621）年銘の木筒が出土している。また、文献から元和八（1622）年までこの地にあったことが明らかな魚市場に伴う廃棄穴と考えられており、年代は1614年から22年までと考えられている。陶器は唐津が中心で、瀬戸・美濃では志野・織部の菊皿、蘭竹文の皿等雑器類が見られる。播鉢は丹波が7割を占めている。国産磁器はまだ出現していない。

徳川初期②（図5下段）は肥前磁器の出現をメルクマールとする。（佐藤）

## 5. 小田原城・城下（図6 註3）

小田原城は、その始まりを15世紀初頭頃とし、以後明治の初めに廃城となるまで約500年間、存続してきた城である。その間、統治者の交代などに伴い城郭や城下の整備・改変が行われた。

そういった城郭・城下の変遷と出土遺物の様相から、当該遺跡の発掘調査を担当している小田原市教育委員会によって、独自の小田原編年（Ⅰ～Ⅶ期）が組まれている。図6は、その編年のⅢ～Ⅳ期の出土遺物群より抜粋したものである。

Ⅲ期（1590～1632）は、大久保忠世・忠隣が城主を務めたⅢa期 前期大久保氏時代（1590～1614）と、改易後城代が置かれたⅢb期 番城時代（1614～1632）に分かれている。

Ⅳ期 稲葉氏時代（1632～1686）は、稲葉氏が城主を務めていた時代であり、肥前磁器の出現が指標となっている。

Ⅲ期は、志野、織部、唐津、丹波と瀬戸・美濃の播鉢（播目は共に櫛引き）、常滑の甕、

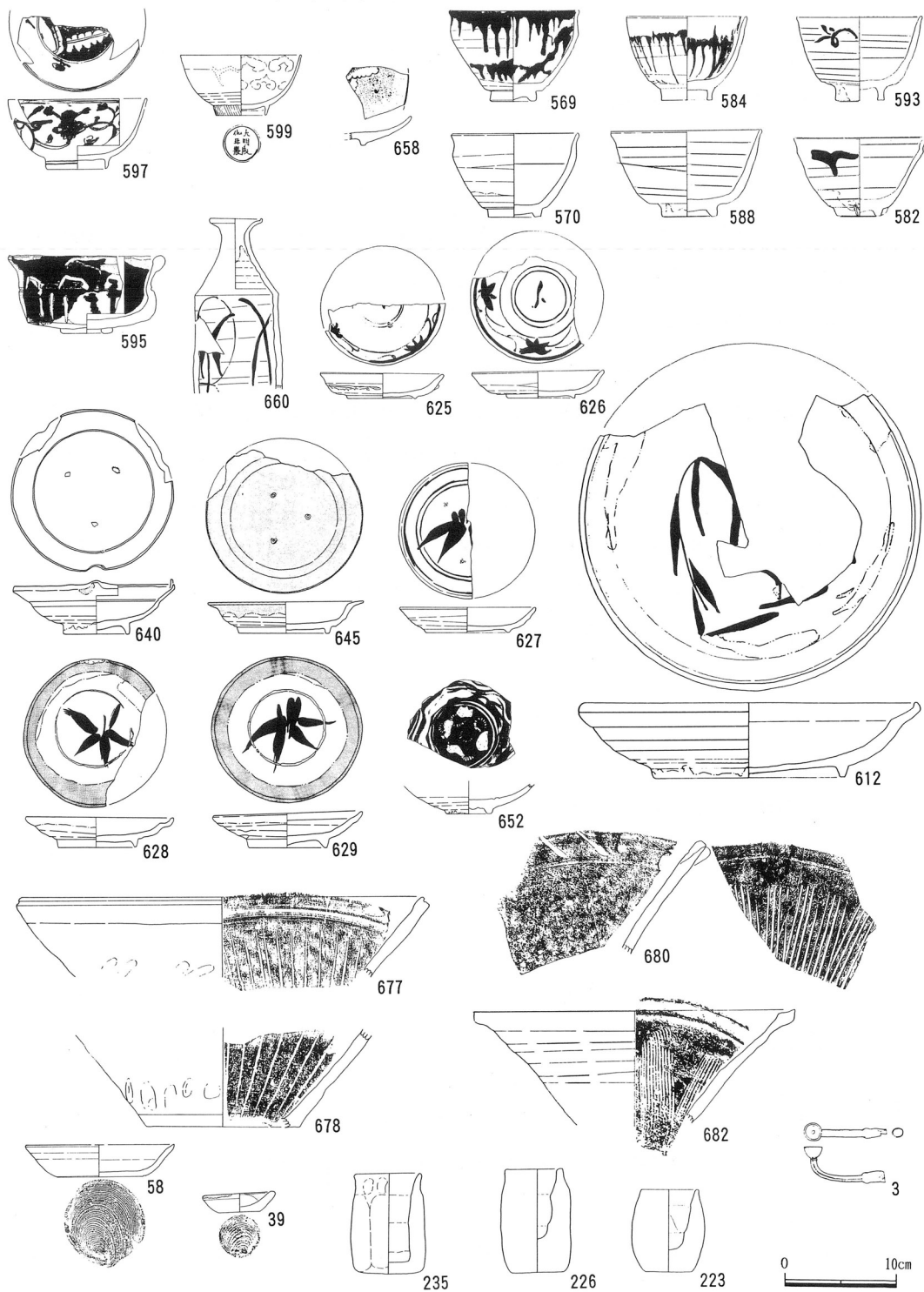
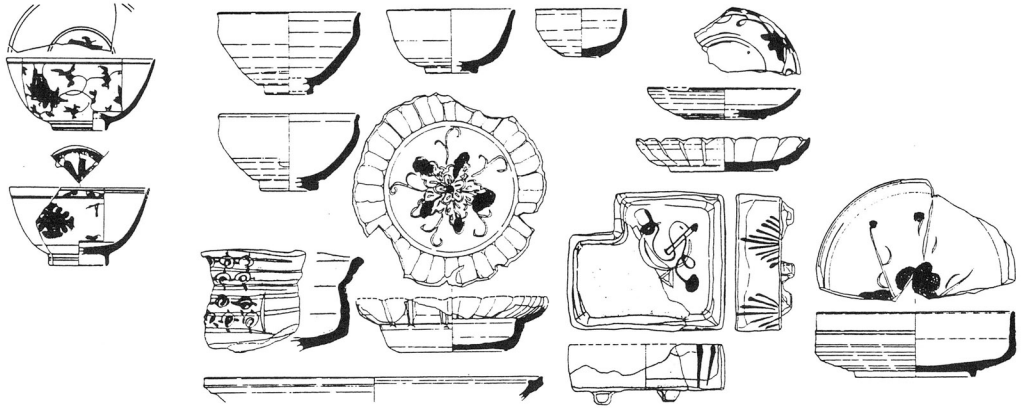


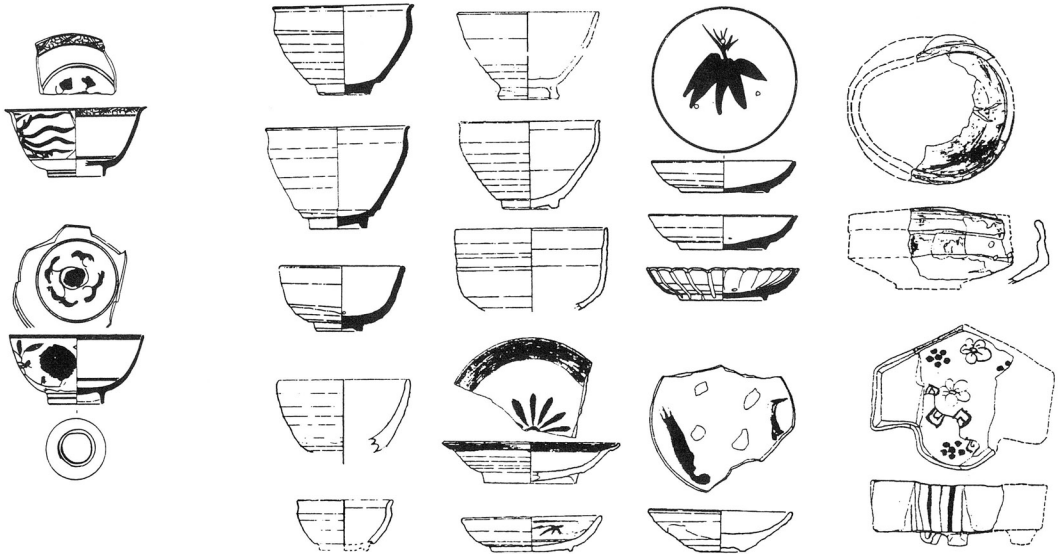
図4 丸の内三丁目遺跡 52号土坑出土遺物



豊臣後期



徳川初期① (AZ87-5・SX201)



徳川初期②

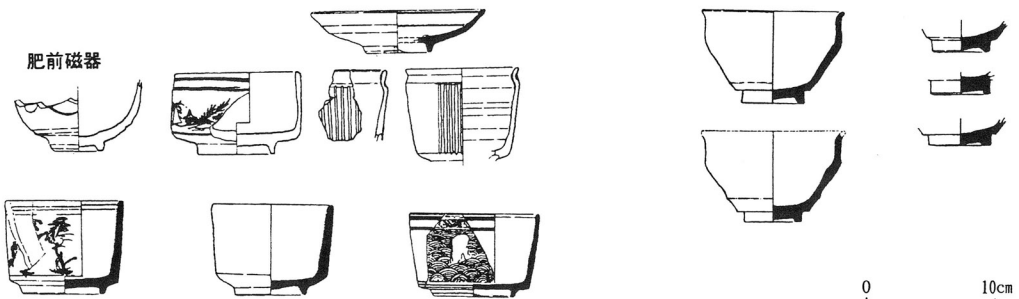
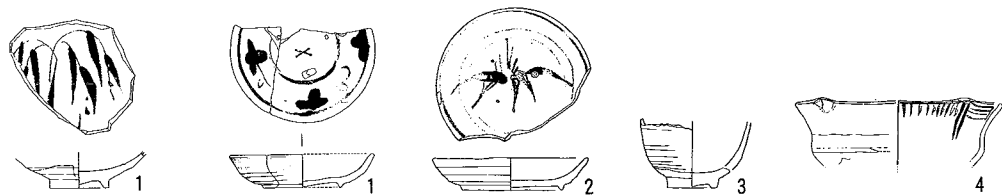
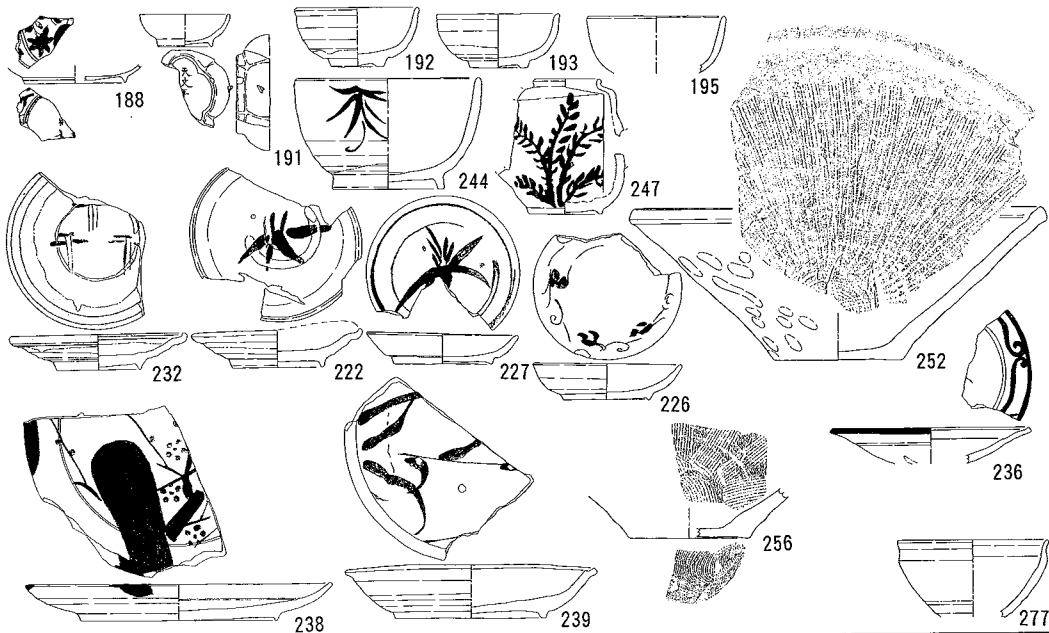


図5 大坂城・城下出土遺物 (一部加筆)

小田原編年Ⅲ a 期(左端1は二の丸中堀 I 60-1・2箱堀, 他は同Ⅱ障子堀B2)



小田原編年Ⅲ b 期(欄干橋町遺跡34号土坑, 右下277のみ同36号土坑)



小田原編年Ⅳ期(左側は欄干橋町遺跡1号土坑, 右側は同3号土坑)

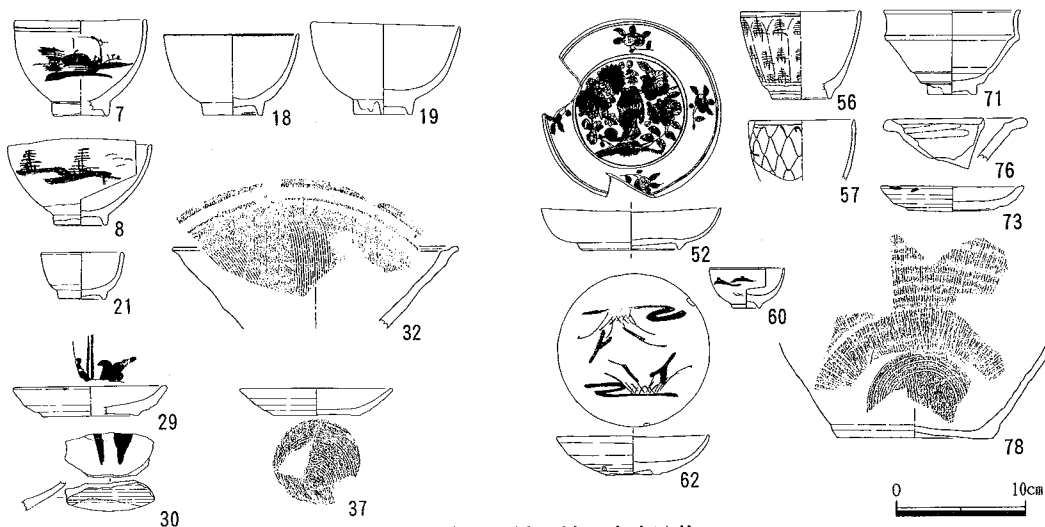


図6 小田原城・城下出土遺物

中国青花（明）等が出土しているが、ここで注目したいのは志野、織部、唐津である。III a 期からは、志野の碗や鉄絵皿（図 6 上段右 1～3）、唐津の鉄絵皿等（図 6 上段左 1，同右 4）が出土している。III b 期になると、織部が出土するようになる（図 6 中段 232，238）。磁器はまだ中国青花（図 6 中段 188）しか見られない。他には、引き続き唐津や笠原鉢、瀬戸・美濃（図 6 中段 256）と丹波の播鉢（図 6 の中段 252）や瀬戸・美濃の白天目を含む天目茶碗（図 6 中段 277）が出土している。

IV 期の出土遺物には、肥前磁器が登場する（図 6 の 7・8・18・19・56・57・60・62）。図 6 下段の遺物群は IV 期の前半と位置づけられている遺構から出土しており、初期伊万里の特徴を有するもので占められている。（遠藤）

## 6. 考察（表 1）

薬学部新館地点 SE67 の時代的メルクマールとなる遺物を再確認する。陶器はほとんどが瀬戸・美濃である。志野では、鉄絵具で体部内面に草花文を描いたものや、見込みに蘭竹文を描いた皿があり、織部では総織部の罍皿がある。笠原鉢の破片も出土している。播鉢は瀬戸・美濃と丹波がある。丹波のものは口縁が箱形を呈している。播目は瀬戸・美濃、丹波共に櫛引きである。かわらけはほとんどがロクロ成形だが、1 点だけ手づくねがある。焼塩壺は「三など久左衛門」と刻印されたロクロ成形のものが出土している。瓦は、前田家の家紋である梅鉢文の軒丸瓦が出土している。

次に、SE67 の出土遺物群の様相と丸の内、大坂城・城下、小田原城・城下のそれぞれの出土遺物の様相を比較してみる。

まず、52号と SE67 の出土遺物を比較すると、共に陶器は瀬戸・美濃が中心である。志野の草花文や蘭竹文が描かれた皿、織部の罍皿等が出土している。播鉢は、瀬戸・美濃と丹波がある。丹波には、52号では櫛引きと、それより古い一本引きのものが出土しているが、SE67 では櫛引きのものしか出土していない。口縁は 52号・SE67 共に箱形を呈する。焼塩壺は 52号では、小型の輪積み成形と手づくね成形で無刻印のものが報告されているのに対し、SE67 ではロクロ成形で「三など」系の刻印のあるものが 1 点のみ出土している。また国産磁器では 52号からは初期伊万里 1 点を含む肥前磁器が少量出土しているが、SE67 からは出土していない。以上総括すると、52号には肥前磁器などの新しい要素も認められるが、52号と SE67 には志野、織部があるなど共通の様相を呈する。

次に、大坂城・城下と SE67 を比較する。大坂では豊臣後期にはすでに志野と織部が出土

表 1 陶磁器出土状況

		志 野	織 部	肥 前 磁 器
丸の内三丁目52号土坑		○	○	○
大 坂	豊 臣 後 期	○	○ (茶器中心)	
	徳川初期①	○	○ (雑器中心)	
	徳川初期②	○	○	○
小 田 原	III a	○		
	III b	○	○	
	IV	○	○	○
薬学部新館地点 SE 67		○	○	

しているが、織部は元屋敷窯の製品に類似した茶陶が中心である。しかし、徳川初期①になると、SE67に見られるような織部の雑器類が、多く出土するようになる。徳川初期②になると肥前磁器が出土するようになる。SE67は、志野・織部の雑器類が出土し、肥前磁器の見られない徳川初期①と共通の様相を呈する。

最後に小田原城・城下と SE67を比較してみると、小田原編年のIII a 期には志野の碗・鉄絵皿や唐津の鉄絵皿が出土している。しかしまた織部は見られない。III b 期になると織部が出土するようになり、志野の蘭竹文を描いた皿、笠原鉢、丹波や瀬戸・美濃の搦鉢も出土している。磁器はまだ国産のものは見られない。IV期には肥前磁器が登場してくる。このように見てくると、SE67の出土遺物群には総織部が含まれているが(2点)、肥前磁器は出土していないなど、III b 期の出土遺物とほぼ同様の様相を呈する。

以上により、段階設定のメルクマールとなる遺物の出土状況をまとめたのが表1である。SE67と52号、徳川初期①、小田原編年III b 期の出土遺物は、共通の様相を呈することから、年代的にもほぼ同時期と言えよう。

以上のことを踏まえて SE67の年代について述べてみたい。52号の年代については明言されていないが、大坂では船場の魚市場遺跡 SX201を徳川初期①の指標とし、その年代は1614~1622年とされている。小田原編年III b 期は、前述のように1614~32年とされている。1614年は大久保氏が改易となる年であり、その改易に伴って、大久保氏の江戸藩邸であった本郷の地も召し上げられている。前田家が久保氏の後に拝領されたのは元和二

～三 (1616～17) 年であることは、文献上から確認できる。

以上のことから SE67の年代は前田家本郷邸拝領 (1616～17) 以降1620年代頃までと位置づけられよう (註4)。(佐藤・遠藤)

## おわりに

今回、SE67の年代的考察を行うにあたって、気づいた点について2、3触れてみたいと思う。

まず、江戸での肥前磁器の出現年代について考えたい。SE67は肥前磁器の出現する直前の遺物群と位置づけられ、廃絶年代を1616～20年代とした。大坂で肥前磁器が出現したとされる徳川初期②は1622年より新しく1650年以前と考えられている。小田原で肥前磁器が出現するのはIV期は1632年以降とされている。したがって、東西の流通格差も考慮に入れなければならないが、江戸に肥前磁器が出現するのは1630年代以降と推定される。

次に、唐津と瀬戸・美濃の天目茶碗、中国磁器の有無の問題がある。大坂では、豊臣後期から唐津の出土量が増し、徳川初期には施釉陶器の8割以上を占める。大坂の唐津については、東西流通の地域差と言えるかもしれない。しかし、小田原III b期、丸の内52号にも少ないながら唐津が見られる (註5)。また、瀬戸・美濃の天目茶碗や中国磁器についても、52号、大坂、小田原では出土しているが、SE67からの出土はない。SE67は出土遺物の量が少ないので資料としての限界性があることは否めない。

また、焼塩壺についても触れてみたい。52号から小型の輪積み成形と手づくね成形で無刻印のものが33点報告されており、一時期の様相を示すと思われる。SE67はロクロ成形で「三など」系の刻印のあるものが1点出土するのみなので単純に比較は出来ないが、SE67にはない肥前磁器が52号土坑から出土していることから、52号出土の焼塩壺の方が新しい時期が含まれる可能性がある。

今回別稿で取り上げた東大編年によると、東大構内出土資料でこれまでもっとも古く位置づけられた遺物群は御殿下記念館地点532号遺構出土遺物群であり、東大編年においてもII期の指標資料となっている。考察を行ったSE67出土資料は、前述したように不十分な要素が多い資料ではあるが、元和年間のはじめに前田家が本郷邸を拝領になって以降、532号遺構例の前に位置づけられる遺物群としてI b期の基準資料として考えたい。

本稿を草するにあたり、小川望氏 (小平市教育委員会)、諏訪間順氏、山口剛志氏 (小田原市教育委員会)、長佐古真也氏 (東京都埋蔵文化財センター)、森毅氏 (大阪市文化財協

会)の各氏には有意義な御助言・御指導をいただき、心より感謝いたします。

(佐藤・遠藤・堀内)

## 註

1. 遺物の番号は、報告書(『丸の内三丁目遺跡』)に記載されている番号をそのまま用いた。
2. 船場については、大坂の陣の経過から冬の陣の時の焼土層と考えられている。
3. 遺物の番号は、各報告書(『二の丸中堀Ⅰ・Ⅱ』、『欄干橋町遺跡』)に記載されている番号をそのまま用いた。
4. 年代的上限については、SE67から前田家の家紋である梅鉢文の瓦が出土していることから首肯できよう。
5. 丸の内52号土坑の出土の陶器104点中、唐津が4点含まれ、小田原の欄干橋町遺跡34号土坑出土の陶器220点中、唐津は4点含まれる。

## 参考文献

- 荒川豊蔵他 1989『志野 黄瀬戸 瀬戸黒』日本陶磁大系11 平凡社
- 有田町史編纂委員会 1988『有田町史』
- 大阪市文化財協会 1988『大坂城跡』Ⅲ
- 大阪市文化財協会 1992『難波宮址の研究』第9
- 小田原市教育委員会 1990『小田原城とその城下』
- 小田原市教育委員会 1993『小田原城三の丸 大久保雅楽介邸跡第Ⅱ地点』
- 小田原市教育委員会 1993『小田原城下 欄干橋町遺跡』
- 小田原市教育委員会 1994『史跡小田原城跡 二の丸中堀Ⅰ・Ⅱ』
- 小田原市 1995『小田原市史』別編 城郭
- 大橋康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 学習研究社 1995『小田原城』歴史群象 名城シリーズ8
- 東京都埋蔵文化財センター 1994『丸の内三丁目遺跡』
- 鈴木秀典 1991「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」『関西近世考古学研究』Ⅰ
- 諏訪問順 1995「小田原市郷土文化館研究報告書」『城下町小田原の考古学的調査』No.31(人文科学No.16)
- 塚田順正・諏訪問順・大島慎一・山口剛志 1991「小田原城及び城下について」『発掘された江戸』江戸遺跡研究会 第4回大会発表要旨
- 中里太郎右衛門 1989『唐津』日本陶磁大系13 平凡社
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』
- 藤岡了一 1989『織部』日本陶磁大系12 平凡社
- 堀内秀樹 1992「東京大学本郷構内の遺跡統一編年思案」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ 発表要旨』

松尾信裕 1993 「大坂出土の桃山陶磁」『大坂出土の桃山陶磁』(財)大阪市文化財協会

森毅 1991 「元和6・7年銘の木簡を出した魚市場遺跡の調査」『発掘された江戸時代』江戸遺跡研究会 第4回大会発表要旨

森毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究』第9(財)大阪市文化財協会

森毅 1993 「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」『ヒストリア』139号

森毅 1995 a 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」『ヒストリア』149号

森毅 1995 b 「城下町大坂出土の桃山陶」『桃山茶陶に関する諸問題』東洋陶磁器学会 第23回大会研究発表要旨





# 東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察

堀内 秀樹

## 1 はじめに

東京大学本郷構内は江戸時代にはその多くの部分を加賀前田家の上屋敷、またはその支藩（富山藩、大聖寺藩）の上屋敷であったことが知られるが、その他水戸徳川家、榊原家の中屋敷、旗本屋敷、御先手組などの存在が絵図面、文献史料によって判明している。

東京大学本郷構内の遺跡では1983年以降、山上会館・御殿下記念館地点、法学部4号館・文学部3号館地点、理学部7号館地点、医学部附属病院地点、農学部家畜病院地点、医学部附属病院外来診療棟地点などの調査が行われている。上記のうち医学部附属病院地点までは報告書の作成は終了している。現在、本遺跡は埋蔵文化財調査室が中心となって調査を行っているが、当初は遺跡調査室が各地点ごとに別組織で編成され、担当していた経緯があり、調査・整理等が統括的に行われている状態ではなかった。こうした状況は遺跡や個別の研究の方向性、広狭、深淺などに現れている。このような地点間の齟齬をなくすため、以前より屋敷の変遷からの区分、共通の時間軸設定の必要を感じていた。遺物については1992年の『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』のなかで「東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案」としてまとめた経緯があるが、その後の資料の増加、研究の進歩などによって、再編の必要が生まれた。本稿は以上の経緯より遺跡、遺物について年代的枠組みを再呈示するものである。

## 2 土地利用による段階設定

東京大学本郷構内遺跡の年代的枠組みを設定するにあたっては遺跡の大部分が支藩を含む前田家の屋敷であり、その変遷を中心にして行った。文献によると前田家が当該地を拝領する以前には大久保家の屋敷であったことが記されており、古い順に大久保時代、前田下屋敷時代、前田上屋敷時代前期、前田上屋敷時代後期とに区分した。各時代の画期には大火や大規模な増改築等があり、絵図面・文献史料や考古学的調査からも屋敷内の建築物や空き地の配置・主軸方位など土地利用のされかたに大きな変化が認められる（註1）。

(1) 大久保時代（ ～1614頃）

現在までに考古学的な発掘調査や絵図面等で大久保時代のものが確認されてはいない。しかし、『東邸沿革図譜』によれば大久保忠隣の屋敷であるとされており、大久保忠隣が慶長十六(1614)年の大久保長安に連座して改易になった後、大坂の陣が終わった元和二～三(1616～17)年ごろにその跡地を前田家に下賜されたとされている(宮崎1990)。

(2) 前田下屋敷時代(1616, 17～1682)

前田家に屋敷が拝領されたとされる元和二～三(1616～17)年から天和二(1682)年の大火によって本郷邸がほぼ全焼するまでの時期である。この時代を描いた絵図面は現在までに確認されていない。しかし、万治三(1660)年や天和二(1682)年と推定される焼土層中から、また、薬学部新館地点(仮称)でも元和年間後半から寛永年間前半のものとして推定される井戸出土の遺物群から前田家の定紋である「梅鉢」の軒丸瓦が確認されている。文献史料からも寛永六(1629)年に將軍徳川家光、大御所秀忠が相次いで御成を行っており、医学部附属病院地点からはその際の接待に使用されたと推定される遺物が認められている。このように屋敷の拝領年代や屋敷内の様子は文献上からも特定できないが、少なくとも寛永六(1629)年には御成御殿が完成し、將軍家等を接待していることからそれ以前に屋敷としての体裁を整えていたであろうと推定される。また、明暦三(1657)年七月には南側約二万坪を牛込邸の代替地として拝領しており、以降本郷邸のエリアはほぼ変化ない。幕末のデータでは上屋敷として本郷邸は10万3822坪(うち富山藩1万1088坪、大聖寺藩5762坪)を拝領している。

この間、本郷邸は下屋敷としての機能を与えられていたが、前述の將軍家の御成、当時上屋敷であった江戸城近くの辰口邸が寛永十(1633)年の火災の際に三代藩主利常の避難邸として利用されたこと、寛永十六(1639)年利常の致仕ののち隠居所としていることなどから「呼称は下屋敷であっても、相当な殿舎の構えがあり、藩士の長屋等も少なからず建ち並んでいたと考えた方がよいと思われる(宮崎1990)」と推定されている。

発掘調査では拝領された直後には、地形によって規制されているのか建物の主軸方位は複数混在し、各地点ごとに異なった様相を示している。年代が下り、天和二(1682)年や元禄十六(1703)の火災層直下の遺構群ではほぼ現在の春日通りに沿う軸に集約され、次第に屋敷としての体裁が整えられていった過程が窺える。

(3) 前田上屋敷時代前期 (1682～1730)

前期前田上屋敷時代は加賀藩が本郷邸を上屋敷に使用して以降、御殿空間内の主軸が詰人空間内と同一であった時代を称する。天和二(1682)年十二月の火災は、「・・・十二月二十八日江戸御屋敷上中下とも悉く焼失・・・」(『河瀬雜記』)と加賀藩の江戸藩邸全て罹災していることが文献史料によって確認できる。この火災を経緯に加賀藩にも大きな建て替えがあり、本郷邸はそれ以降、上屋敷として幕末まで機能することになる。現存する最古の本郷邸の絵図面は元禄元(1688)年の絵図であり、再建されつつある邸内の様子が描かれているが、御殿空間と詰人空間の配置など基本的な土地利用については既にこの段階には完成していることが理解できる。元禄期にはそれ以降に描かれたと思われる絵図がもう一枚現存し、これには御殿空間内にも建物が増加し、再建途中の屋敷の様子が看取できる。御殿空間の建物は主軸が詰人空間と同一方位に構築されている。絵図面はこのあと1730年代以降18世紀前半代のもので遺存しているが、ここに描かれた御殿空間の主軸方位が詰人空間のそれと異なっており、元禄期からおそらく享保期までの間に軸変更がされたと考えられる。契機となる事象として元禄十六(1703)年の火災、宝永五(1708)年將軍綱吉の養女松姫の降嫁による屋敷の改編、享保十五(1730)年の火災のいずれかが考えられるが現在までのところ推定の域をでない。発掘調査によっても古い段階の建物軸と新しい段階の建物軸が異なることは確認されている。

(4) 前田上屋敷時代後期 (1730～1867)

前述のように正確な御殿空間内の軸の変更の年代を与えることはできないが、少なくとも享保十五(1730)年を下ることはないであろう。御殿空間内の主軸が詰人空間内と異なる時期を前田上屋敷時代後期とする。終わりについては調査では確認されていないが、明治元(1868)年に本郷通り沿いを残し邸内の大部分を焼失し、続いて南西隅一万五千余坪を残して政府に返上した明治四(1871)年が該当するであろう。ここに江戸時代からの本郷邸の機能は終焉することとなる。

### 3 出土遺物による段階設定

筆者は東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点の報告の際に出土陶磁器を遺構単位に取り上げ、陶磁器群の様相差の把握及び階梯の構築を行った(成瀬・堀内1990)。また、1992年に行った「シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I」で、これまで地点ご

とに位置づけられていた東京大学本郷構内の遺跡の陶磁器の再編を行い、統一編年試案を提示した(堀内1992)。しかし、その後の研究の進展や東大構内の他地点の新たなる出土資料の増加から試案にそれらをふまえた上で、改めて東大編年を呈示するものである。

編年を構築する上での基本的な姿勢は、ほぼ医学部附属病院地点で呈示したものを踏襲している。東京大学本郷構内の遺跡の各地点で同一遺構中より出土した遺物群または同一層中から出土した遺物群について取り上げ、サンプルユニットとする。遺構内における器種組成、産地組成の把握を行うこと、年代的な判断材料を多く有することでその蓋然性を高めたいという二つの理由により、遺物が多く出土した遺構についてのみ分析の対象とした(医学部附属病院地点では底部片数100点以上出土した遺構を対象とした)。遺構一括遺物の年代的な分析を行うにあたっては次のような手順で行った。

- ① 出土した陶磁器・土器類全般にわたり胎土、施釉技法、成形技法、文様等の特徴で産地の、また主に器形的特徴で器種の分類を行なう。さらに細分可能な器種に関しては細分類を行い、その分類基準となった諸特徴を示す。
- ② 遺構一括遺物群における各分類の数量を推定個体数での呈示を行ない、以降の分析の基礎資料とする。
- ③ 陶磁器・土器群がほぼ同様の器種組成をするものについて同時期の廃棄ととらえるとともに、その組成が相対年代に位置づけるに際して共通の理解を得られるであろう最小単位の把握を行う。またその組成を明示する。
- ④ 各最小単位の相対的順序を把握する。遺跡における層序、遺構の切り合いから各期の組列の方向を推定し、段階の古い順にその様相をとらえていく。
- ⑤ 主な遺構の一括遺物群の年代的集中を知る手掛りとして時間的な分布状況を示す。これは遺物群のもつ年代幅が分析の妥当性そのものに影響を与えることが指摘されるからである。
- ⑥ 各期の実年代の推定を行う。推定は出土量も多く、文様・器形等の変化が顕著であり、生産地での研究も進んでいる肥前及び瀬戸・美濃系の磁器碗・皿を用いて行った。本分析において分類された器種について、生産地での研究および紀年銘資料、災害、土地利用の変遷など遺跡の状況とを判断材料とした。

今回呈示する内容は③④⑥に関することである。

(1) 各段階の様相

陶磁器による段階設定は当初屋敷の変遷を考慮した上で行ったが、陶磁器の変化が必ずしもそれと一致して変化しているとは限らないため、あえて大枠の年代区分の下位に設定せず、別体系で行った。前述した編年作業の方法に準拠し、江戸時代とそれに続く明治時代初期をⅠ期～Ⅸ期の九段階に設定した。以下古い段階から説明を加えたい。

Ⅰ期の様相

遺物群に肥前系磁器（JB群）の含まないものを本期とする。

屋敷の変遷では大久保時代と前田下屋敷時代が含まれ、前者をⅠa期、後者をⅠb期とする。Ⅰb期及びⅡ期は医学部附属病院地点（以下「病院地点」と略す）Ⅰ期に該当する。

Ⅰa期の様相

本郷構内では現在までに発掘調査によって大久保時代の遺構・遺物等は確認されていないが、同藩の国元である小田原では以前より継続的に調査が行われており、大久保忠隣が改易された慶長十九（1614）年以前は小田原での該期の様相が参考になるであろう。大久保時代は小田原編年のⅢa期が該当し、二の丸中堀住吉橋東部下遺構、障子堀B2類覆土上層、三の丸箱根口跡3号堀出土資料などが指標となっている。Ⅲa期は唐津、志野の出現をもって段階設定されており、前述の遺構中からは絵唐津、志野蘭竹文皿などが出土している。

Ⅰb期の様相

薬学部新館地点 SE67出土資料を指標とする。様相の詳細は別項（「東京大学本郷構内の遺跡 薬学部新館地点 SE67出土遺物の年代的考察」）を参照されたいが、Ⅰa期と異なるであろう点は織部の製品がみられることである。SE67からは瀬戸・美濃系陶器志野釉皿、志野釉蘭竹文皿、灰釉鏝皿、緑釉輪花皿、志野釉碗、柿釉灰釉流し碗、笠原鉢、志野釉徳利、錆釉播鉢、丹波系陶器播鉢のほか土製の火鉢、かわらけ、焼塩壺である。焼塩壺は「三など久左衛門」の刻印が押された、底部が厚いロクロ成形の製品が出土している。SE67出土の陶磁器類は他の時期と比較して資料数が少なく、該期の遺物群全体の様相は窺えなかった。年代的には別項記載のように屋敷の拝領以降1620年代がその中心となろう。また、

該期に比定される医学部附属病院地点の池は將軍御成の宴会に伴う廃棄と推定され、寛永六（1629）年銘の木簡や折敷、箸等の木製品と共にかわらけが大量に検出された。このかわらけは白色の胎土を有し、ほとんどが手づくねで作られており、在地のかわらけの系譜上には位置づけられない製品であろう。

## II期の様相

いわゆる初期伊万里（註2）と称される肥前系磁器（JB-1-a, JB-1-b, JB-2-a など）と輸入磁器（JA 群）とで構成されている遺物群を本期とし、御殿下記念館地点532号遺構を指標とする。

本期以降、本郷構内の遺跡においてもまとまった量の遺構内出土資料が認められる。病院地点のI期、御殿下記念館地点のI a 期に該当する。

### 磁器（JA 群・JB 群）

本期からは輸入磁器および肥前系磁器が確認されている。

輸入磁器（JA 群）の器種は小坏、碗、皿、鉢類がある。生産地別では中国がもっとも多く、朝鮮の白磁が散見される。中国製磁器は景德鎮窯系のものが多く、漳州窯系のものが若干含まれる。景德鎮窯系の製品は薄手の丸形の碗、端反形の小坏・碗、やや厚手の直線的に開く碗などで構成される。高台の削りは深く、断面が尖る全面施釉のものが多いが、高台無釉で蛇ノ目高台風のものもみられる。漳州窯系の磁器は皿、鉢のみである。皿は口縁部鏢状に開くものとそのまま内湾するものがある。上絵付しているものが多い。輸入磁器は資料数が少なく、器種、技法、文様とも全体の様相を把握できていない。

肥前系磁器（JB 群）の器種は碗、皿、小坏、鉢、香炉、瓶、蓋物などが出土しているが、もっとも多いのが碗・皿類である。碗は丸形が多いが、他に筒形、端反形も若干認められる。高台の削りはいずれも初期伊万里と称される製品の特徴がみられ、ラフで大きく「U」字状または箱形に削りだされている。皿は輪高台のものほかに、蛇ノ目高台のものがみられ、輪高台のものはいずれも口径に比べて底径が小さいもので占められる。高台の削りは碗と同様である。

### 陶器（TB 群・TC 群・TE 群・TG 群・TK 群）

肥前系陶器（TB 群）は量的には多くない。鉄釉の甕、内野山窯出土遺物に類似した砂目灰釉皿（TB-2-d）等が散見される。III期以降に中心的にみられる京焼風（TB-1-b, c）、呉器手タイプ（TB-1-a）、刷毛目（TB-1-d, e）の碗、銅緑釉輪割の皿（TB-2-a）等はま

だみられない。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は碗, 皿, 鉢, 香炉, 壺, 釉鉢などの器種が出土しているが, もっとも多いのは皿類である。碗は天目茶碗 (TC-1-a), 灰釉丸碗, 皿は菊皿 (TC-2-k, 1), 灰釉丸皿 (TC-2-a, b), 志野釉丸皿 (TC-2-c) などが多くみられる。

このほか陶器は, 備前系陶器 (TE 群), 常滑系陶器 (TG 群), 丹波系陶器 (TK 群) が出土している。これらは器種的に偏りがみられ, 備前系陶器は播鉢, 壺・甕類, 常滑系陶器は甕類, 丹波系陶器は播鉢が中心で, 他の器種はほとんどみられない。播鉢は堺系陶器 (TL 群) が17世紀末に出現するまで丹波系の製品が主体的な位置を占めている。この器種的に偏る傾向は必ずしも該期のみで顕在しているものではなく, 生産や流通の段階で器種の選択が行われている結果であると考えている。

#### 土 器 (DZ 群)

焼塩壺はすべて輪積成形の製品で占められる。刻印は「ミなど藤左衛門」(DZ-51-a) が押印されたもので占められている。火鉢類は角形, 丸形があり, その胎質は土師質のものと軟質瓦質の製品がみられる。かわらけは胎土, 器形, 技法にいくつかのバリエーションがある。本期で大部を占めるものはロクロ成形で, 体部は直線的または外反気味に立ち上がり, 右回転の糸切り離しの製品である。その他, 手づくねの製品がある。

### III期の様相

肥前系磁器碗・皿等の高台の断面形が三角形を呈するもの (JB-1-c, JB-2-b, JB-2-c) で構成される段階を本期とする。IV期の指標となる高台断面「U」字状を呈するもの (JB-1-d, JB-2-d) の混じる状況, 焼塩壺の様相差からIII a 期, III b 期の二段階に分けることができる。III a 期は御殿下記念館地点の678号遺構, III b 期は医学部附属病院地点の H32-5 が指標になる。III a 期は御殿下記念館地点の I b 期, III b 期は御殿下記念館地点の II 期, 病院地点ではIII a, III b 期とも II 期に該当する。

#### III a 期の様相

##### 磁 器 (JA 群, JB 群)

本期は輸入磁器と肥前系磁器が確認されているが, 前段階よりも肥前系磁器の割合が増加し, 主体的になる。

輸入磁器 (JA 群) は前段階のものとはほぼ同様の内容である。芙蓉手, 漳州窯系磁器大皿

など、内容的には1613年セントヘレナ島沖で沈没した「WITTE LEEUW」引き上げの製品との類似点が多くみられ、17世紀前半代の様相を示していると推定される。

肥前系磁器 (JB 群) は前段階がラフな高台作りをしていた製品がみられたのに対し、高台の断面形を三角形にシャープに削り出すような成形技法のもの (JB-1-c, JB-2-b, c) に変化している。このほかハリ支え、墨弾き、糸切り技法などの各技法の普及によって底径の大きな製品、変形皿などが本期からみられる。銘款はいわゆる角福や「誉」、[宣徳年製]、[宣明年製] 等がみられる。皿・鉢などの大型の製品も江戸期全体を通してもっとも多く出土しており、山辺田窯出土製品と類似する大鉢、古九谷様式や芙蓉手の大皿などがみられる。青磁の香炉、盤類は初期伊万里風の大型高台に脚が貼付されている。小坏類は体部が直立または口縁部が端反る器形の製品が主体的である。

#### 陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TK 群)

肥前系陶器 (TB 群) は本期より出土量が増加する。京焼風陶器碗 (TE-1-b, c), 呉器手の碗 (TB-1-a), 三島手の鉢 (TB-5-b) などが出土する。京焼風陶器碗は丸碗、平碗とも出土しており、銚絵や高台の調整は出土量が増加する17世紀末の製品と比して丁寧である。鉢類は後段階の製品と比して、①立ち上がりが浅い②高台断面が箱形である③見込みの溶着痕に白泥がみられる④焼成が良好である⑤胎土の色調が濃茶色であるなどの物徴を有する。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) の様相はII期とほぼ変化ない。碗、皿、鉢、香炉、壺、播鉢などの器種のうちもっとも多いのは皿類である。碗は天目茶碗 (TC-1-a), 灰釉丸碗, 皿は菊皿 (TC-2-k, 1), 灰釉丸皿 (TC-2-a, b), 志野釉丸皿 (TC-2-c) などが多くみられる。

このほか陶器は、京都・信楽系陶器 (TD 群), 備前系陶器 (TE 群), 志戸呂系陶器 (TF 群), 丹波系陶器 (TK 群) が出土している。京都・信楽系陶器は本期に初めて御室風の製品がみられる。備前系陶器は播鉢、壺・甕、徳利類, 常滑系陶器は甕類, 丹波系陶器は播鉢が前代同様多く出土している。備前系の製品は本期より塗土の痕跡が顕著に認められる。志戸呂系陶器は徳利がみられる。いわゆる吉右衛門徳利の系譜にあるものであろうが、この段階の製品は口唇部が外折し、やや長い頸部と丸い胴部を有する。

#### 土器 (DZ 群)

焼塩壺は輪積成形の「天下一堺ミなど藤左衛門」および底部栓筒形の「イ津ミツタ花塩屋」(DZ-51-q) の製品が認められる。この中で「天下一堺ミなど藤左衛門」は刻印の周囲



が二重椀 (DZ-51-c) と一重椀 (DZ-51-b) とがあり、二重椀の刻印が先行することが焼塩壺研究で確認されている。火鉢類は前代同様である。かわらけは前代に主体的だった製品に替わり、ロクロ成形で内湾気味あるいは直線的に開き、左回転の糸切り離しのものが大部を占める。ほうろくは丸底で、内耳を三単位有する土師質の製品がみられる。

### III b 期の様相

#### 磁器 (JA 群・JB 群)

輸入磁器 (JA 群) は出土している遺構が偏在し、様相も前代とほとんど変化ないため、本期出土の製品は17世紀前半からの伝世の可能性が高いと思われる。また、本期以降輸入磁器は激減する。

肥前系磁器 (JB 群) は前代同様高台の断面三角に削り出す碗・皿で構成されるが、一部上質の製品に、高台断面「U」字状の製品が認められる (JB-1-d, JB-2-d)。質的な優劣は前段階からみられるが、本期以降顕著になる。前段階の製品と比較して上質のものでは文様のパターン化など、いわゆる柿右衛門様式の製品がみられる。型紙摺りは白泥によるものがみられ、IV期に多く出土する呉須を用いた製品はみられない。銘款は角福、「誉」のほか「囿」、「圖」などがある。香炉や青磁の盤などは鉄泥を塗った蛇ノ目凹形高台に獣足などの脚が貼付されるようになる。小坏類は前段階までは口縁部が直立もしくは端反形の製品が多かったが、本期以降丸形のものが多くなる。

#### 陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TK 群)

肥前系陶器 (TB 群) は京焼風陶器碗 (TB-1-b, c)・鉢、呉器手の碗 (TB-1-a)、陶胎染付碗 (TB-1-f)、刷毛目・三島手の鉢 (TB-5-a・b)、銅緑釉輪剝皿 (TB-2-a) などがみられ、量的にも器種のバリエーションなども本期から次のIV a 期にピークがある。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は前代からの碗・皿類が器種の中心になっているが、いわゆる腰鍔碗 (TC-1-u)、腰鍔の仏花器、高田徳利と称される徳利の系譜にのる製品など18・19世紀代に多く出土する製品があらわれる。

その他、京都・信楽系陶器 (TD 群)、備前系陶器 (TE 群)、志戸呂系陶器 (TF 群)、丹波系陶器 (TK 群) などがみられる。京都・信楽系陶器は本期からIV b 期にかけて銕絵染付が量的にまとまってみられる。備前系陶器は徳利及び搦鉢が認められるが、前段階と比較して表面が平滑に調整され、いわゆる伊部手風の丁寧な仕上がりになっている。丹波系陶器はほとんどが搦鉢である。口縁部の形態はおおよそ平縁→三角縁→縁帯といった変化を

するが、Ⅲ期は三角縁のものが多い。

#### 土器 (DZ 群)

焼塩壺は輪積成形の「天下一御壺塩師塚見なと伊織」(DZ-51-d) および「御壺塩師塚湊伊織」(DZ-51-e)、板作り成形、底部を球状の粘土を用いて(以降「2ピース」と略す)内側から栓をしている「泉州麻生」が認められる。この中で「泉州麻生」の刻印には小杵(DZ-51-h)と大杵(DZ-51-i)とがあり、小杵の刻印が先行することが確認されており、この小杵の製品は前出「天下一御壺塩師塚見なと伊織」と、大杵の製品は「御壺塩師塚湊伊織」とそれぞれ共伴している。火鉢類、ほうろくはほぼ前代同様である。かわらけはロクロ成形、内湾気味の口縁でいわゆる「折り返し技法」をもつ製品が出現する。

#### IV期の様相

IV期は肥前系磁器碗の高台高が高く、断面「U」字状に作られる碗(JB-1-d)で構成される段階を本期とする。この碗はやや大振りで高台径が広いタイプと、やや小振りで高台径が狭いタイプとに分類でき、前後関係が認められる。前者で構成される段階をIV a 期、後者で構成される段階をIV b 期とする。指標となる遺構はIV a 期が病院地点 F34-11、IV b 期が農学部家畜病院地点 SK09である。IV a 期は御殿下記念館地点のⅢ a～c 期、病院地点ではⅢ期に、Ⅲ b 期はそれぞれV a 期、IV期に該当する。

#### IV a 期の様相

##### 磁器 (JA 群・JB 群)

輸入磁器は本期以降ほとんど出土しない。

肥前系磁器(JB 群)は、碗が高台高が高く、断面「U」字状に作られる碗(JB-1-d)のみで構成され、皿は高台の断面「U」字状の製品(JB-2-d, JB-2-e)になる。本期よりコンニャク判、呉須による型紙摺りによって絵付された製品があらわれる。特に型紙摺りは本期からIV b 期にかけてみられるが、IV b 期には激減するため、年代的考察を行う際には注意すべき技法の一つである。また、本期以降、同一器種中の細分化、質的な格差の拡大等が指摘できる。

##### 陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TK 群)

肥前系陶器(TB 群)は本期がもっとも多く出土している。器種構成は前段階のものと同様、京焼風陶器碗(TB-1-b, c)・鉢、呉器手の碗(TB-1-a)、陶胎染付碗(TB-1-f)、刷

毛目・三島手の鉢 (TB-5-a, b), 銅緑釉輪剝皿 (TB-2-a) などである。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) はこの段階に大きな画期がみられる。前段階まで主体的であった天目茶碗 (TC-1-a), 灰釉皿, 菊皿 (TC-2-k, l) など碗・皿類の比率が減少し, 灰釉丸碗 (TC-1-c), 摺絵の鬢水入れ (TC-25), 半菊状のしのぎの入った香炉 (TC-9-d), 徳利などの新器種が多くみられるようになる。

その他, 京都・信楽系陶器 (TD 群), 備前系陶器 (TE 群), 志戸呂系陶器 (TF 群), 丹波系陶器 (TK 群) などがみられる。京都・信楽系陶器は御室風の「清水」や「清閑寺」などの銘款が押された碗が多い。備前系陶器は播鉢, 徳利等がみられるがほぼ全てが表面平滑な伊部手風に変化している。志戸呂系陶器は徳利のほか壺, 油受け皿などがみられる。陶製の油受け皿は本期以降出現しているが, その嚙矢が志戸呂系陶器であることは注目される。丹波系陶器の播鉢は緑帯を有する製品が多くなる。

#### 土 器 (DZ 群)

焼塩壺は輪積成形の製品がなくなり, 板作り成形の製品で占められる。2 ピースの大椀「泉州麻生」(DZ-51-i) と底部を輪状の粘土と球状の粘土を用いて (以降「3 ピース」と略す) 内側から栓をしている「御壺塩師堺湊伊織」(DZ-51-f) がみられる。火鉢類は本期で軟質の瓦質製品がほぼみられなくなる。かわらけは前代と同様で以降顕著な変化はみられなくなる。ほうろくは内耳を有する製品が少なくなる。

#### IV b 期の様相

##### 磁 器 (JB 群)

本期は肥前系磁器のみである。前段階の碗は高台高が高く, 断面「U」字状に作られる碗 (JB-1-d) はやや小型化し, 底径も小さくなる。これには施文法として器面にコンニャク判が, 銘款は「大明年製」が多用される。また, 新しい器種として上手の高台高が低い丸碗 (JB-1-e), 薄手の半球形碗 (JB-1-f) などがあらわれる。これらは基本的にコンニャク判は付されず, 特に薄手の半球形碗には早い段階に銘が付く例が多い。皿は前段階の製品より深いものが多くなり, 見込み中央には五弁花が多用される。蛇ノ目釉剝ぎの皿 (JB-2-k) は本期までは基本的に底部無釉である。

##### 陶 器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TK 群・TL 群)

肥前系陶器 (TB 群) の基本的な器種構成は前段階と変化はないが, 器種の中での変化は窺える。京焼風陶器碗 (TB-1-b) では器形が腰張形になり, 小型化する。また, 平碗 (TB

-1-c) を含めて絵付はラフになる。刷毛目碗は前段階までは茶褐色系の胎土に横方向の刷毛目が施されていたのに対し、黒褐色系の胎土に波状や打刷毛と称される刷毛目が施されるものに変化している。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は、碗では灰釉丸碗 (TC-1-c), 腰鍔碗 (TC-1-u), 御室碗 (TC-1-d), 皿では直重ね灰釉丸皿 (TC-2-b)。その他、香炉, 鬚水入れ, 徳利, 片口鉢, 播鉢, 壺・甕類等が多く出土している。

その他, 京都・信楽系陶器 (TD 群), 備前系陶器 (TE 群), 志戸呂系陶器 (TF 群), 丹波系陶器 (TK 群), 堺系陶器 (TL 群) などが認められる。京都・信楽系陶器は前段階同様, 銕絵染付や色絵の御室風の製品が多い。備前系陶器は播鉢, 徳利等がみられる。播鉢は本期以降みられなくなる。前段階までは高台裏に刻印が押されているが, 本期では注口部に刻印が押されている例がある。志戸呂系陶器は徳利のほか壺, 油受け皿などがみられる。丹波系陶器はほぼ本期を最後に姿を消す。播鉢は縁帯を有する。堺系陶器 (播鉢) は本期から出現する。初現期の製品は刻印を底部に押す例がみられる。見込み中央の播目はクロスパターンである。

#### 土 器 (DZ 群)

焼塩壺は板作り成形の製品で占められる。2 ピースおよび 3 ピースの「御壺塩師堺湊伊織」(DZ-51-f), 2 ピースの大椀「泉州麻生」(DZ-51-i), やや器高が高く, 底部内外面から押圧して栓をしている 3 ピースの「摂州大坂」(DZ-51-p) がみられる。火鉢類は土師質の製品のみで構成される。かわらけ, ほうろくは前代同様である。本期より土師質の油受け皿がみられる (註 3)。

#### V 期の様相

V 期は肥前系磁器にいわゆるくらわんかと称する下手の製品 (JB-1-g, JB-2-g) が出現する段階を本期とする。このうち筒形碗 (JB-1-l), 青磁染付, 蛇ノ目凹形高台の低いタイプ (JB-2-j) などの古手の製品を伴わない段階と伴う段階がある。伴わない段階を V a 期, 伴う段階を V b 期とする。また, V a 期はこれに前段階にみられた小型化し, 底径もやや小さくなる断面「U」字状に作られる碗 (JB-1-d) が伴う資料が新宿区の遺跡 (南町遺跡など) で確認されており, ここで V a 期の指標にあげている F33-3 はこれを伴っていない。様相的には F33-3 より先行することが指摘でき, 将来的に二分される可能性がある。指標となる遺構は V a 期が病院地点 F33-3, V b 期が病院地点 L34-1 である。V a, b 期と

も御殿下記念館地点では該当時期はなく、病院地点ではV期に該当する。

## V a 期の様相

### 磁器 (JB 群)

本期は肥前系磁器 (JB 群) のみである。いわゆるくらかわんかと称される下手の製品 (JB-1-g) のうちもっともポピュラーな梅樹文が描かれた碗の出現をメルクマールとする。このほか上手の丸碗で断面「U」字状に作られ、高台が低いタイプ (JB-1-e) や薄手の半球形碗 (JB-1-f) などがある。これらに施文されている文様はコンニャク判は残っているものの、前段階でよくみられた型紙摺りはみられない。皿は小振りになり、比較的上手の深いタイプのもの (JB-2-e) と、粗製のやや浅いもの (JB-2-g) とがみられる。また本期から蛇ノ目釉剥ぎの皿は高台裏が無釉のもの (JB-2-k) から施釉されている製品 (JB-2-l, m) に変化している。見込み中央には五弁花が施されている例が多い。その他長頸瓶、大皿など大型の製品がみられなくなる。

### 陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TL 群)

肥前系陶器 (TB 群) は量的に減少する。京焼風陶器碗 (TB-1-b, c) の器形や法量の変化、絵付の簡略化などはいっそう顕著になる。刷毛目碗 (TB-1-d, e) も黒褐色系の胎土のもののみになる。三島手、刷毛目の砂・胎土目積みの鉢 (TB-5-a, b) は畳付外周が明瞭に面取りされている。また、蛇ノ目釉剥ぎの刷毛目片口鉢 (TB-23-b) も本期からみられる。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は、碗では灰釉丸碗 (TC-1-c)、腰鍔碗 (TC-1-u)、御室碗 (TC-1-d) のほか半筒形の製品 (TC-1-l) もあらわれる。皿では御深井風の摺絵皿 (TC-2-e) が本期から出土してくる。その他、香炉、摺絵の鬢水入れ、徳利、片口鉢、播鉢、壺・甕類、輪剝の鉢等が出土している。

その他、京都・信楽系陶器 (TD 群)、備前系陶器 (TE 群)、志戸呂系陶器 (TF 群)、堺系陶器 (TL 群) が出土している。京都・信楽系陶器は御室風の製品が多い。本期からいわゆる小杉茶碗 (TD-1-d) がみられる。備前系陶器は油壺、志戸呂系陶器は徳利がみられる。堺系陶器は播鉢のみみられる。見込みの播目はクロスパターンで、刻印が押印されるのは前段階からこの段階の製品に限定される。播鉢は本期以降ほぼ瀬戸・美濃系陶器と堺系陶器のみで構成される。

### 土器 (DZ 群)

焼塩壺は板作り成形の製品で占められる。2ピースおよび3ピースの大枠「泉州麻生」(DZ-51-i), 3ピースの「泉川麻玉」(DZ-51-m), 「御壺塩師難波浄因」(DZ-51-n), 「難波浄因」(DZ-51-o), 2ピースで外側より押圧痕を有する「泉湊伊織」(DZ-51-g), 2ピースの「サカイ 泉州磨生 御塩所」(DZ-51-k) がみられる。火鉢類は土師質の製品のみで構成される。かわらけ, ほうろくは前代同様である。油受け皿は脚付, 脚無がみられる。

#### V b 期の様相

##### 磁器 (JB 群)

本期は肥前系磁器 (JB 群) のみである。下手の製品 (JB-1-g) とともに初現的な筒形碗 (JB-1-l), 蛇ノ目凹形高台の低いタイプの皿 (JB-2-j) などが伴う段階を本期とする。筒形碗の古手の製品は①直立している (以後のものはやや内傾している) ②見込み中央の文様が五弁花以外である③高台脇にも施文されている製品が多いなどの特徴を有する。蛇ノ目凹形高台の低いタイプの古手の製品は①底部裏の蛇ノ目部の幅が狭い②皿では深めの製品が多い③青磁染付であることが多い等の特徴を有する。このほか前段階からみられる高台断面「U」字状の丸碗 (JB-1-e) や半球形碗 (JB-1-f) などがある。皿は小振りになり, 比較的上手の深いタイプのもの (JB-2-e) は少なくなり, 粗製のやや浅いもの (JB-2-g) が多くみられる。蛇ノ目釉剥ぎの皿は高台径が小さい斜格子文 (JB-2-l), 高台径が大きい梅花 (唐草?) 繫ぎ文 (JB-2-m) などの定形的な製品に集約される。

##### 陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TE 群・TF 群・TL 群・TZ 群)

肥前系陶器 (TB 群) は量的に激減する。京焼風陶器碗 (TB-1-b, c), 陶胎染付碗 (TB-1-f), 銅緑釉輪剥皿 (TB-2-a) などは小法量化, 絵付の簡略化が前代より顕著になる。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は, 碗のバリエーションが多くなる。天目茶碗 (TC-1-a), 灰釉丸碗 (TC-1-c), 腰鑄碗 (TC-1-u), 御室碗 (TC-1-d), 半筒形の製品 (TC-1-l), 刷毛目碗 (TC-1-s), 拳骨茶碗 (TC-1-p), 横位や波状の沈線の入る鑄釉半筒碗 (TC-1-q) などがみられる。皿では御深井風の摺絵皿 (TC-2-e), その他, 香炉, 徳利, 片口鉢, 播鉢, 壺・甕類, 輪剥鉢, 半胴甕, 澆瓶, 油徳利, 仏飯器, 花生, 餌入れ等が出土している。

京都・信楽系陶器 (TD 群) は出土量が増加する。半球形の碗 (TD-1-b), 平碗形 (TD-1-h), 半筒形碗 (TD-1-i) 等の碗のほか, 香炉, 合子, 花器, 柄杓, 鬢水入れなど器種的にも多くみられる。これらの製品の胎土はやや軟質で卵黄色から黄白色のものが多く, 本期まではほぼ京都で焼成されたものであろうと推定している。

その他、備前系陶器 (TE 群)、志戸呂系陶器 (TF 群)、堺系陶器 (TL 群)、生産地不明の陶器 (TZ 群) が出土している。備前系陶器は油壺、ミニチュアがみられる。志戸呂系陶器は徳利、蓋物、灯明皿がみられる。堺系陶器は見込みの播目がクロスパターンの播鉢がみられる。生産地不明の陶器は土瓶 (TZ-34)、爛鍋 (TZ-33-b) がみられる。この段階の土瓶・爛鍋などの製品に関しては胎土、施文法、釉調等の特徴から京焼系と推定されるが、後代一特に19世紀代には一複数の生産地で極めて類似した製品が焼成され、生産地が限定できない。

#### 土 器 (DZ 群)

焼塩壺は板作り成形の製品で占められる。2 ピースで内外から押圧痕の残る「泉湊伊織」、2 ピースの大杵「泉州麻生」(DZ-51-i)、2 ピースの「サカイ泉州磨生御塩所」(DZ-51-k) がみられる。このうち「泉湊伊織」(DZ-51-g) は小型化し、口唇部の蓋受けも退化している。火鉢類は土師質の製品に加え、硬質の瓦質製品がみられるようになる。これはやや小型の丸火鉢で、横線によって区画された中に文様や磨きなどが施されるものが多い。かわらけ、ほうろくは前代同様である。油受け皿は脚付、脚無がみられる。また、植木鉢もしくは植木鉢に転用されたと推定される小型の鉢形土製品やひょうそくなどの灯明具もみられる。

#### VI期の様相

VI期は肥前系磁器 (JB 群) に青磁染付が伴う段階を本期とする。青磁染付は初期伊万里には多く生産されている。またそれ以降も少量ながら施文法として確認できるが、18世紀以降日常的な雑器として普及するのは本期であろう。VI期は小広東碗 (JB-1-i) の有無によって、小広東碗のない段階をVI a 期、存在する段階をVI b 期とする。指標となる遺構はVI a 期が外来地点 SK152、VI b 期が病院地点 E22-1、Y34-4である。VI a 期は御殿下記念館地点ではIV期、病院地点ではV期に、VI b 期は御殿下記念館地点では該当する段階はなく、病院地点ではVI期に該当する。

#### VI a 期の様相

##### 磁 器 (JB 群)

本期は肥前系磁器 (JB 群) のみである。碗では前段階からの下手の丸碗 (JB-1-g)、半球形碗 (JB-1-f) に定形化した筒形碗 (JB-1-l)、腰張形碗 (JB-1-h) が加わる。皿は前

段階とほぼ同様で、粗製のやや浅いもの (JB-2-g), 斜格子文や梅花 (唐草?) 繋ぎ文の蛇ノ目釉剥ぎの皿 (JB-2-l, m) などがみられるが蛇ノ目釉剥ぎの製品を中心に文様の簡略化の傾向が窺える。

#### 陶器 (TB群・TC群・TD群・TF群・TL群・TZ群)

肥前系陶器 (TB群) は京焼風陶器碗 (TB-1-b, c), 銅緑釉輪剥皿 (TB-2-a), 三島手鉢などが少量みられるのみとなる。

瀬戸・美濃系陶器 (TC群) は、碗では前段階にみられた製品に加えて、体部に沈線が二条入った灰釉鉄釉流しの碗 (TC-1-f), 鉄絵が施される半球形の碗 (TC-1-m) などがみられる。皿では御深井の摺絵皿 (TC-2-e), その他前段階からの片口鉢, 壺類, 仏飯器, 仏花器, 香炉, 鬢水入れに本期からこね鉢, 灯明皿がみられる。播鉢は本期でほぼ出土しなくなる。

京都・信楽系陶器 (TD群) は碗では平碗 (TD-1-h) が少なくなり, 半球形の碗 (TD-1-b), 半筒形の碗 (TD-1-i) が多くみられるようになる。

その他志戸呂系陶器 (TF群), 堺系陶器 (TL群), 生産地不明の陶器 (TZ群) が出土している。志戸呂系陶器は徳利, 蓋物, 灯明皿がみられるが灯明皿は本期以降減少する。堺系陶器は前代同様見込みの播目がクロスパターンの播鉢がみられる。生産地不明の陶器は土瓶 (TZ-34), 爛鍋 (TZ-33-b) がみられる。

#### 土器 (DZ群)

焼塩壺は前代からの2ピースで内外から押圧痕の残る「泉湊伊織」(DZ-51-g), 2ピースの大椀「泉州麻生」(DZ-51-i), ロクロ作りの「大極上壺塩」(DZ-51-v) がみられる。火鉢類, かわらけ, 灯明具は前代同様である。ほうろくは次第に口縁部が低くなり, 内傾してくる。

### VIb期の様相

#### 磁器 (JB群)

本期は肥前系磁器 (JB群) のみである。碗では前段階からの下手の丸碗 (JB-1-g), 半球形碗 (JB-1-f), 筒形碗 (JB-1-l), 腰張形碗 (JB-1-h) に小広東碗 (JB-1-i), 蓋付で腰が張り, 高台が「八」の字状に開く碗 (JB-1-q) が加わる。本期の小広東碗は連鎖文や暦文や捻花文など広東碗と共通の文様は描かれない。皿は粗製のやや浅いもの (JB-2-g), 斜格子文や梅花 (唐草?) 繋ぎ文の蛇ノ目釉剥ぎの皿 (JB-2-l, m), 蛇ノ目凹形高台の高



台高の低いタイプの皿 (JB-2-j) などがみられる。

#### 陶器 (TB群・TC群・TD群・TF群・TL群・TZ群)

肥前系陶器 (TB群) は、ほぼ本期でみられなくなる。極めてラフな絵付をされた京焼風陶器碗 (TB-1-c)、銅緑釉輪剝皿 (TB-2-a) 等がみられる。

瀬戸・美濃系陶器 (TC群) はそれぞれの出土量は多くないが、灰釉丸碗 (TC-1-c)、腰錆碗 (TC-1-u)、半筒形の碗 (TC-1-l)、刷毛目碗 (TC-1-s)、半球形の碗 (TC-1-m)、横位や波状の沈線の入る錆釉半筒碗 (TC-1-q)、体部に沈線が二条入った灰釉鉄釉流しの碗 (TC-1-f)、見込みに銕絵染付の文様を描く平碗 (TC-1-n) などがみられる。その他片口鉢、香炉、徳利、灯明具、半胴甕、餌入れ、こね鉢などがあるがひょうそく等の器種が加わる。

京都・信楽系陶器 (TD群) はやや量的に減少する。碗では半球形の丸碗 (TD-1-b)、平碗 (TD-1-h)、半筒形碗 (TD-1-i)、筒形碗 (TD-1-j)、小杉茶碗 (TD-1-d) がみられる。前段階より①半球形の碗は口縁部内傾する②平碗は文様が施されない③半筒形の碗は腰部の開きが急になる④小杉茶碗は小型化し、文様が簡略化してくる等の変化が認められる。

その他志戸呂系陶器 (TF群)、堺系陶器 (TL群)、生産地不明の陶器 (TZ群) が出土している。志戸呂系陶器はほぼ徳利のみになる。堺系陶器播鉢は見込みの播目がクロスパターンの製品に加え三角パターンのものが出現する。生産地不明の陶器は鉄釉の土瓶 (TZ-34-e) がみられる。

#### 土器 (DZ群)

焼塩壺は2ピースで内外から押圧痕の残る「泉湊伊織」(DZ-51-g)、2ピースの大椀「泉州麻生」(DZ-51-i)、ロクロ作りの「大極上壺塩」(DZ-51-v)、「播磨大極上」(DZ-51-u) がみられる。また無印のロクロ作りの製品 (DZ-51-w) も増加する。火鉢類、ほうろく、かわらけは前代同様である。灯明具は本期より施釉製品が出現する。

### VII期の様相

VII期は肥前系磁器 (JB群) に広東碗 (JB-1-m) が伴う段階を本期とし、法文地点 E7-3号土坑、E8-5号土坑、病院地点 AE34-3、AE35-3などを指標とする。御殿下記念館地点VII期、病院地点VII期に該当する。

#### 磁器 (JA群・JB群)

本期は輸入磁器、肥前系磁器がある。

輸入磁器 (JA 群) は図示されていないが、端反形の青花や粉彩の小坏類が多い。青花には仙芝祝寿文や唐花文などの文様が描かれている。

肥前系磁器 (JB 群) は本期のメルクマールの広東碗 (JB-1-m) が出現するが、本期の広東碗は①高台裏に銘款が施されているものが多い②見込みは口縁部圏線、見込み圏線、中央ワンポイントのパターンになっているなどの特徴を有している。その他前代からの半球形碗 (JB-1-f)、筒形碗 (JB-1-l)、腰張形碗 (JB-1-h)、小広東碗 (JB-1-i)、蓋付きで腰が張り、高台が「八」の字状に開く碗 (JB-1-q) などがみられる。粗製の丸碗 (JB-1-g) は減少する。皿は蛇ノ目釉剥ぎの製品が減少し、ほぼ粗製のやや浅いもの (JB-2-g)、蛇ノ目凹形高台の高台高の低いタイプの皿 (JB-2-j) となる。本期から蛇ノ目凹形高台の高台高の高いタイプの皿 (JB-2-i) が出現してくる。また、そば猪口などにも蛇ノ目凹形高台のもの (JB-7-a) が含まれるようになる。

陶器 (TB 群・TC 群・TD 群・TF 群・TL 群・TZ 群)

肥前系陶器 (TB 群) は三島手の鉢が少量みられるのみである。

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は、灰釉丸碗 (TC-1-c)、腰鍔碗 (TC-1-u)、半筒形の碗 (TC-1-l)、刷毛目碗 (TC-1-s)、横位や波状の沈線の入る鍔釉半筒碗 (TC-1-q)、体部に沈線が二条入った灰釉鉄釉流しの碗 (TC-1-f) の他に鎧茶碗 (TC-1-r)、柳茶碗 (TC-1-g) などが新たにみられる。その他本期から火入れ、植木鉢などがみられる。植木鉢はV 段階に半胴甕の底を穿孔して植木鉢に転用した例がみられ、これ以降こうした例が増加する。生産段階から穿孔した製品がみられるのは本期からである。

京都・信楽系陶器 (TD 群) は激減する。碗では半球形の丸碗 (TD-1-b)、平碗 (TD-1-h)、半筒碗 (TD-1-i)、筒形碗 (TD-1-j) 等はなく小杉茶碗 (TD-1-d)、端反の小碗 (TD-1-g) がみられる。

その他志戸呂系陶器 (TF 群)、堺系陶器 (TL 群)、生産地不明の陶器 (TZ 群) が出土している。志戸呂系陶器は徳利のみで、量的にも本期を最後に以降激減する。堺系陶器播鉢は見込みの播目が三角パターンのもので構成される。生産地不明の陶器は土瓶・鍋類が量的に多くみられるようになる。土瓶は主に鉄釉のものと灰釉のものがある。注口部は前段階までは現代の真鍮製やかんのような「S」字状を呈していたが、本期の製品はほとんどが直線的にのびるいわゆる鉄砲口になっている。また、蓋も落とし蓋タイプのもので出現する。鍋は柿釉把手付鍋 (TZ-33-a) である。

## 土器 (DZ 群)

焼塩壺はロクロ製品のみになる。無印のもの (DZ-51-w) がほとんどで、「播磨大極上」(DZ-51-u) がみられるのみである。その他の製品はほぼ前代同様である。

## VIII期の様相

VIII期は瀬戸・美濃系の磁器 (JC 群) が伴う段階を本期とする。瀬戸・美濃系磁器の碗・皿類の共伴状況からVIII a～VIII dの四段階に区分できる。VIII a期は瀬戸・美濃系磁器碗が肥前系磁器広東碗 (JB-1-m) と共伴する段階, VIII b期は瀬戸・美濃系磁器端反碗 (JC-1-d) に湯呑形碗 (JC-1-e) が伴う段階, VIII c期は薄手の小坏 (JC-6-d) や前述の端反碗, 湯呑形碗の高台が幅広に成形されるものが伴う段階, VIII d期は寿文皿などの木型打込皿や篆書文の端反碗などが伴う段階である。VIII a期は病院地点 AJ35-1, VIII b期は病院地点 H21-1, H21-2, 外来地点 SK81, VIII c期は外来地点 SK392, VIII d期は病院地点 H23-3をそれぞれ指標とする。御殿下記念館地点では東大編年VIII a期はVIII期, VIII b～d期はIX期, 病院地点では東大編年VIII a～d期をVIII期にそれぞれ該当する。

## VIII a期の様相

### 磁器 (JA 群・JB 群・JC 群)

輸入磁器 (JA 群) はおもに仙芝福寿文や花唐草の青花および粉彩の小坏類がみられる。

肥前系磁器 (JB 群) は、碗では前代からの広東碗 (JB-1-m), 薄手の半球碗 (JB-1-f), 小丸碗 (JB-1-j), 粗製の碗 (JB-1-g), 高台が「八」の字状に開く碗 (JB-1-q) のほか端反碗 (JB-1-n) がみられる。小広東碗 (JB-1-i) はほぼなくなる。皿では中央に五弁花を付した粗製の皿 (JB-2-g) は激減し, 中皿はほぼ蛇ノ目凹形高台 (低いタイプ) の製品 (JB-2-j) によって占められる。

瀬戸・美濃系磁器 (JC 群) は本期よりあらわれる。器種のバリエーションは量に比べて極めて少なく, 端反碗 (JC-1-d) が大部を占める。本期の端反碗は全体に薄作りで, 高台が鋭角に尖る。また, 銘款が施されている例が多いなどの特徴を有する。

### 陶器 (TC 群・TD 群・TH 群・TL 群・TZ 群)

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は碗・皿類を中心とした飲食具は減少する。最も量的に多いのはいわゆる貧乏徳利で, 瀬戸・美濃系陶器の半数以上を占めている。碗はV期以降増加した器種のバリエーションは減少し, 磁器生産にシフトしたことを窺わせる。底径が小さ

くなり、口縁部内傾する様な最も新しい段階の特徴がみられる灰釉丸碗 (TC-1-c)、横位や波状の沈線の入る錆釉半筒碗 (TC-1-q)、刷毛目碗 (TC-1-s) などが少量残る。灯明皿も本期以降減少する。

京都・信楽系陶器 (TD 群) は量的には少なく、小杉茶碗 (TD-1-d) を除いて規格性を持つ製品がみられない。また、本期から灯明皿がみられる。

その他萩系陶器 (TH 群)、堺系陶器 (TL 群)、生産地不明の陶器 (TZ 群) が出土している。萩系陶器は土灰釉開口小碗 (TH-1-a) があらわれる。堺系陶器播鉢は見込みの播目が三角パターンのものと、放射状のものとの構成される。放射状の製品は明石産の播鉢の可能性が指摘されているものである。生産地不明の陶器は前代同様土瓶・鍋類が多くみられる。土瓶は鉄釉のものや灰釉のものの中に銅緑釉の製品が混じる。鍋は手付の行平鍋が少量混じるが、主体を占めるのは柿釉把手付鍋 (TZ-33-a) である。

#### 土器 (DZ 群)

焼塩壺は無銘のロクロ製品 (DZ-51-w) のみである。その他の製品はほぼ前代同様である。本期から当初より穿孔された植木鉢がみられるようになる。

### VIII b 期の様相

#### 磁器 (JA 群・JB 群・JC 群)

輸入磁器 (JA 群) は前段階同様である。

肥前系磁器 (JB 群) は、碗では広東碗 (JB-1-m)、小丸碗 (JB-1-j) などはほとんどみられなくなる。丸碗 (JB-1-e)、薄手の半球碗 (JB-1-f)、端反碗 (JB-1-n) がみられる。皿では前代主体的であった低い蛇ノ目凹形高台 (JB-2-j) は高いタイプ (JB-2-i) の製品へと変化している。普及品を中心に呉須の色調が青く鮮明なものが多くなる。

瀬戸・美濃系磁器 (JC 群) はやはり碗が大部を占めるが、小皿、水滴、小坏など器種のバリエーションが増加している。碗では前代からの端反碗 (JC-1-d) に加えて、湯呑形碗 (JC-1-e) が加わる。

#### 陶器 (TC 群・TD 群・TH 群・TL 群・TZ 群)

瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は貯蔵具、調理具などが中心である。徳利、鉢、片口鉢、植木鉢などが多い。徳利は本期においても半数以上を占める。ひょうそくなどの灯明皿以外の灯明具が出現する。

その他陶器は京都・信楽系陶器 (TD 群)、萩系陶器 (TH 群)、堺系陶器 (TL 群)、生

産地不明の陶器 (TZ 群) がみられる。京都・信楽系陶器は前代からの小杉茶碗 (TD-1-d) のほか無釉の平碗 (TD-1-h)、端反碗 (TD-1-g) がみられる。萩系陶器は土灰釉開口小碗 (TH-1-a)、ピラ掛けの碗 (TH-1-b) がみられる。堺系陶器播鉢は前代同様見込みの播目が三角パターンのもので放射状のもので構成される。生産地不明の陶器は土瓶、鍋、行平鍋の他に急須がみられるようになる。土瓶は灰釉、鉄釉のものに替わり銅緑釉の製品が主流になるが、緑、黄、鉄絵の具等を用いて絵付をする製品があらわれる。鍋は行平鍋と柿釉把手付鍋 (TZ-33-a) がある。

#### 土器 (DZ 群)

焼塩壺は無銘のロクロ製品 (DZ-51-w) のみである。植木鉢は多量にみられるようになる。ほうろくは口唇部玉縁状になり口縁部はさらに短く、強く内傾するように変化している。その他の製品はほぼ前代同様である。また、煎茶の普及に伴うと推定されるが、涼炉 (DZ-48-c) が多くみられるようになる。

#### VIII c 期の様相

本期は良好な一括資料がなく、内容は断片的な資料を用いて行わざるを得なかった。磁器は瀬戸・美濃系磁器 (JC 群) の器種のバリエーションが増えている。碗・皿類には幅広高台の製品や型皿など出現する。薄手の小坏類も多くみられ、装飾法は前代までは染付か色絵のみであったのが白玉を用いて細密な文様を書くようになる。陶器は瀬戸・美濃系陶器 (TC 群) は植木鉢、徳利、甕・壺などを中心に、京都・信楽系陶器 (TD 群) は小碗、灯明皿を中心に、また、生産地不明の陶器 (TZ 群) は山水土瓶 (TZ-34-c)、急須、鍋、爛徳利、行平鍋などがみられる。土器は無銘の焼塩壺 (DZ-51-w)、植木鉢、涼炉等が多くみられる。

#### VIII d 期の様相

本期は良好な一括資料がなく、内容は断片的な資料を用いて行わざるを得なかった。瀬戸・美濃系磁器 (JC 群) は木型打込の皿、篆書文や細い線書の文様などが施された碗などがみられる。

#### IX 期の様相

IX 期は肥前系磁器 (JB 群)、瀬戸・美濃系磁器 (JC 群) の染付顔料に西洋コバルトやク

ロームなどを用いる製品が伴う段階を本期とする。このうち型紙摺り、銅版転写、吹絵、ゴム判、統制陶器など（註4）をメルクマールとして将来的には段階設定できると考えているが、様相を呈示できるような資料に恵まれていないため今回は細分は行わない。ここでは江戸時代の終末と比較する意味で型紙摺りが伴わない段階の資料をあげたい。病院地点のAL37-1を指標とする。病院地点ではIX期が該当する。

AL37-1は飲食に関係する器種が多く、一般的な器種構成を示していない可能性は指摘できるが、遺物群の持つ時間幅は短く、時間軸を検討する際に用いる資料としては不適当とは言えないであろう。磁器では前段階までは肥前系磁器が瀬戸・美濃系磁器を大きく凌駕していたが、瀬戸・美濃系磁器の器種のバリエーション、数量とも増加し、本期ではほぼ同数になっている。陶器では瀬戸・美濃系陶器（TC群）、京都・信楽系陶器（TD群）、万古系陶器（TI群）、生産地不明の陶器（TZ群）などがみられるが、土瓶や鍋のうち多くが笠間・益子系陶器（TM群）であろうと推定される。器種的には碗・皿・小坏・急須・土瓶などが目立つが、前代多くみられた徳利が少なくなっていることは注意したい。

ここで設定された段階は最も量的に多い（＝使用頻度が多い）磁器のなかの碗、皿を中心とした器種をメルクマールに、その変化によって構築した。これらの器種を選択した理由は以下の点からこうした分析を行う際に、より有効であると考えたからである。

- ・文様、器形など個体に対する属性が多いこと。
- ・使用頻度が多い（＝破損頻度が高い）器種は購入から廃棄までのサイクルが短く、かつ、量が多く、その偏差に着眼することによって使用年代のピークが推定できること。
- ・全国的な流通がみられる器種である（＝広域な対比が可能である）。
- ・食生活などの変化に伴って使用頻度の多い器種の組成が変化する可能性が大きい。言い換えれば我々にこういった変化を認識させるのに有効な器種である。

この段階設定は年代的指標となる複数の器種の存在・不存在といったいわば様式的な方法を採用している。このほか一つの器種を取り上げ、その変化によって時間軸を構築する方法もあるが、双方にメリット・デメリットがあると考えている。様式・組成的な方法で最大のデメリットは母集団の少ないユニットでは判断できないことであろうが、江戸遺跡は時間的にも空間的にも多量の遺物が出土する遺跡であり、このデメリットはクリアできると考えている。

## (2) 他遺跡との対比

以上東京大学本郷構内の遺跡出土資料を用いて段階設定とその内容を概説したが、江戸遺跡を中心として当該地以外の遺跡についても磁器を中心とした様相の変化の内容は類似しており、同様の基準での編年が可能であると考えている。また、消費遺跡において必要な、ある程度精緻な段階設定ができ得たと考えている。しかし、17世紀前半、19世紀の中葉段階については東大構内のなかにおいて良好な一括資料がなく、その様相を明らかにできなかった。ここでは該期を他遺跡の資料を用いて補足説明したい。

### I 期

江戸遺跡ではこれまで天正～慶長期に入ると考えられる良好な資料は検出されていない。元和～寛永期では丸の内三丁目遺跡52号土坑出土遺物が唯一の例であろう。内容は肥前系磁器が数点存在するが主体を占める碗・皿類は輸入磁器及び瀬戸・美濃系陶器の織部、志野釉が施された製品であり、東大編年のI b期と近似している。調査状況からは年代が特定できないため遺物からの判断によらざるを得ないが、小田原城下などの出土状況と対比すると元和～寛永期前半の中には含まれることは間違いないだろう。

### VIII c～VIII d 期

江戸遺跡全体を俯瞰しても該期の良好な資料は少ないが、VIII c期は豊島区巣鴨遺跡中野組ビル地区16号土坑、VIII d期は新宿区南町遺跡49号遺構などの資料があげられよう。巣鴨遺跡では瀬戸・美濃系磁器窓絵草花文の端反碗、幅広高台小碗、型作りの小皿などVIII c期の、また、南町遺跡では瀬戸・美濃系磁器木型打込の皿（寿文皿など）、篆書文の端反碗などVIII d期のメルクマールとなる製品が出土している。

## (3) 実年代の推定

I期は良好な一括遺物が少なく、遺物から年代を推定することは困難である。歴史的な事象、屋敷の変遷等より判断するならば、I a期は徳川家康が関東に国替えされる天正十八（1590）年から大久保忠隣が改易になる慶長十九（1614）年まで、I b期は別稿のように前田家が拝領した元和二～三（1616～17）年から1620年代を中心とする年代に求められよう。

II期はそれに含まれる肥前系磁器高台無釉碗や蛇ノ目高台皿などの様相が、有田で行なわれた寛永十四（1637）年窯場整理・統合前後の窯の製品と類似することから1630～40年代を中心とする年代が与えられよう。

III期の下限は天和二（1682）年の火災に求められる。先述のように遺物群の様相差から前後二段階に分かれるが、III a 期には初期伊万里はほとんど含まず、高台の断面形が三角を呈する製品のみで構成され、成形の特徴、銘款等も肥前の長吉谷窯、楠木谷窯出土の製品と類似していることから1650～60年代を中心とする年代が、また、III b 期はそれに加えて上質のものを中心にそれより後出する柿右衛門様式の製品が含まれ、1670年代を中心に天和二（1682）年までとなる。

IV期はその下限を元禄十六（1703）年の火災に求められる。IV期も遺物群の様相から前後二段階に分けられるがIII期の下限が天和二（1682）年であることからIV a 期は天和二年よりほぼ1680年代を中心とした年代。IV b 期の下限は元禄十六（1703）年であるが、遺跡の発掘状況より埋没が宝永四（1707）年以前であることが確かめられている豊島区巢鴨遺跡中野組ビル地区1号溝の出土遺物群との様相差は認められないことから、後段階の様相的な下限は元禄十六（1703）年よりやや下げて考えた方がよいかも知れない。

V期からVI期は東大構内のみならず江戸遺跡全体においても年代的定点となるような良好な資料がみあたらず、VII期の上限が後述のように1780年代ならば（註5）V期からVI期を1710～70年代の間に置くことができるだろう。その中で該期の年代的手がかりを探すなら、大分県府内城三ノ丸遺跡のSK14・15出土の資料、千代田区尾張藩麴町邸跡SK317出土資料あたりを参考にできるだろう。府内城三ノ丸SK14・15は寛保三（1743）年の火災による廃棄であることが調査成果として報告されているものである。遺物は17世紀後半の肥前系磁器が大部を占めるが、初現的な蛇ノ目凹形高台の皿や「サカイ 泉州磨生 御塩所」銘の焼塩壺などが出土しており、これらのものを含む東大編年のV b 期は1740年代を含む時期であると考えられる。また、麴町邸跡SK317は明和六（1769）年の墨書を持つ資料があり、遺物群の内容はやや遡る要素も認められるが東大編年のVI b 期に近い。したがってやや後出的な要素を含むVI b 期は1770年代を中心とした時期であることが推定される。これらのことよりV a 期は1710～20年代、V b 期は1730～40年代、VI a 期は1750～60年代、VI b 期は1770年代を中心とした時期になると推定している。

VII期の下限は享和二（1802）年、梅之御殿造営に伴う屋敷改編を下限とし、上限は広東碗の出現時期を持って推し量れるであろう。天明二（1782）年埋め立ての旧芝離宮庭園堀内出土資料などより1780年代には生産を開始していたことが判っていることなどから、VII期は1780年代から1802年までに求められる。

VIII期は瀬戸で磁器焼成が始まったとされる享和元（1801）年以降幕末までを含める。該



期で年代的定点となる資料は少ないが、文政六（1823）年の火災による廃棄と推定される千代田区和泉伯太藩上屋敷跡1号遺構出土資料や嘉永期に付されるとされる「楽」銘を持つ玩具類を含む新宿区南町遺跡49号遺構出土資料などが参考となろう。前述の伯太藩1号遺構例は瀬戸・美濃系の磁器が出土しているものの、湯呑形の碗や肥前蛇ノ目凹形高台の高台高の高いタイプのような東大編年Ⅷb期の指標となる遺物が出土していないことなどから東大編年Ⅷa期に近い様相を示している。しかし、碗形などにやや後出的な要素も認められる。また新宿区南町49号遺構からはⅧd期の指標となる寿文皿などの木型打込皿や篆書文の端反碗などが出土している。これらのことからⅧa期は1800～10年代、Ⅷb期は1820～30年代、Ⅷc期は1830～40年代、Ⅷd期は1850～60年代を中心とした年代であると考えている。

Ⅸ期は西洋コバルトを顔料とした磁器が多く、型紙摺りがみられない。瀬戸・美濃で酸化コバルトを使用したのは明治四・五（1871・2）年で、型紙摺りが伝わったのは明治十五（1882）年とされている。このことからⅨ期はほぼ1870年代を中心とした年代を考えてよからう。ただ、Ⅸ期の指標としてあげた病院地点AL37-1は、土地利用の変遷から桐野利秋邸に関連する遺構の可能性が強く、その下限を明治十一（1878）年におくことができると考えている（註6）。

## 註

- 1 文献からみた加賀藩の江戸諸屋敷及び本郷邸内の変遷については、既刊の『山上会館・御殿下記念館地点』第3分冊第3部考察編「文献・絵図史料から見た加賀藩本郷邸」に詳しい。
- 2 初期伊万里とは磁器焼成に成功した初期の製品をさし、生掛けであること、皿の高台径が小さいこと、ラフに作られていることなどの特徴を有する。
- 3 本期以前にⅢb期に比定される医学部附属病院地点F31-1（遺物群が焼成を受けており、天和二（1682）年による一括廃棄が想定されている）から油受け皿が出土しているが、江戸遺跡の他地点において17世紀第3四半期に遡るような資料が出土していない。技法等からはⅣb期以降にみられる資料との類似性は薄く、年代的に遡りうる資料であろう。
- 4 近代の絵付技法や使用する顔料は、これまでの研究によって大まかな年代が押さえられている。仲野泰裕氏の研究によると瀬戸および美濃では酸化コバルトは明治四・五年頃、酸化クロームは明治八年、型紙摺りは明治十五年頃、銅版転写は明治二十年、吹絵は明治二十七年、ゴム判は大正末から昭和初期頃とされている。
- 5 広東碗の出現時期。
- 6 桐野利秋は薩摩出身で戊辰戦争後、明治初期に陸軍少将になっている。西郷隆盛が征韓論政争に破れ、

下野した後は共に薩摩に帰り、明治十(1877)年におこった西南戦争では西郷麿下の戦争指導者の一人として従軍した。9月に西郷と共に自刃するが、屋敷も少なくともこの時点で収公されていると考えられる。明治十一(1878)年のはじめには屋敷の東半が岩崎弥太郎の屋敷として購入されていることから首肯できよう。また、明治十一(1878)年の『大日本改正東京全図』をみると、AL37-1の存在する地域は小分割され、三百四十二坪の屋敷の一部となっている。遺物の数量、狭い時間幅、ヨーロッパ陶器などが出土している質的な高さ等を考慮すると、桐野利秋邸に伴うものと判断される。

## 引用・参考文献

- 有田町史編纂委員会 1988『有田町史 古窯編』
- 有田町教育委員会 1992『楠木谷・天神町窯・外尾山窯』
- 江戸陶磁土器研究グループ 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I』
- 大分県教育委員会 1993『府内城三ノ丸遺跡』
- 小田原市教育委員会 1990『小田原城とその城下』
- 小田原市教育委員会 1992『小田原城三の丸 箱根口跡』
- 小田原市教育委員会 1994『二の丸中堀 II』
- 紀尾井町6-18遺跡調査会 1994『東京都千代田区 尾張藩麴町邸跡』
- 旧芝離宮庭園調査団 1988『旧芝離宮庭園』
- 小林謙一・両角まり 1992「江戸における近世土師質焼塩壺の研究」『東京考古』10 東京考古談話会
- 新宿区南町遺跡調査団 1993『東京都新宿区南町遺跡』
- 地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1993『和泉伯太藩上屋敷跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 1994『東京都千代田区 丸の内三丁目遺跡』
- 豊島区教育委員会 1994『巣鴨 I』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990『山上会館・御殿下記念館地点』
- 長佐古真也 1993「『受付き灯明皿』にみる生産と流通—受皿の形式分類と量的把握を通して—」  
『研究論集』XII 東京都埋蔵文化財センター
- 中野泰裕 1994「19世紀の窯業—伝統と西欧技術の受容—」『化学史研究』67 化学史学会
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—」『医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室
- 堀内秀樹 1992a「『備前系焼締め播鉢』の系譜—17世紀以降の備前播鉢および堺播鉢について—」  
『東京考古』10 東京考古談話会
- 堀内秀樹 1992b「東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題 I』江戸陶磁土器研究グループ
- 堀内秀樹・坂野貞子 1996「江戸遺跡出土の18・19世紀の輸入陶磁器」『東京考古』14 東京考古談話会
- 宮崎 勝美 1990「加賀藩本郷邸とその周辺」『山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 両角まり 1996「近世における土器の形式と系統—土師質塩壺類の胎土分析—」『東京考古』14  
東京考古談話会

東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察

	年代	御殿下記念館	病院	法文	理学部7号館	外来地点・他	他遺跡	代表的な器種・文様	病院	御殿下
大久保	a							肥前磁器なし 志野	—	—
	I		(池)			SE67(薬)	52(丸の内)	肥前磁器なし 織部	I	—
前田	II	532			2号土坑			初期伊万里		I a
	III	270, 617, 618 678, 802			1号井戸 1号土坑	SK57(小石川)		断面三角形碗・皿 長吉谷窯	II	I b
下屋敷	a	276, 255a, 391	H29-1, H32-5 L32-1	F8-3号遺構				二重園線 柿石衛門B窯		II
	b									II
前田上屋敷前期	a		F34-11			SK27(小石川)		JB-1-d コンニャク判 型紙摺り	III	III a~c
	IV	537	E35-4, K30-1	C7-2号土坑 C7-3号土坑 E8-2号土坑		SK09(家畜) SK139(外来)	1(菓鴨) 1(飯倉分館)	JB-1-d 小	IV	V a
前田上屋敷後期	a		F33-3, G20-2 D32-1, E24-1 L34-2, Z35-5			SK18(外来)		くらわんか		—
	V				4号地下式土坑	SK290(外来) SK137(外来)		蛇ノ目凹型高台 青磁染付 筒形碗	V	—
前田上屋敷後期	a		L34-1			SK152(外来) SK174(外来)		小丸碗 「八」の字		IV
	VI		E22-1, E34-1 Y34-4					小広東碗	VI	—
後期	VII	233, 245	AE34-3 AE35-3 AE39-1	E7-3号土坑 E 8-5号土坑				広東碗	VII	VII
	a		AJ35-1					瀬戸・美濃磁器 端反碗		VIII
後期	b		H21-1, H21-2			SK81(外来)		湯呑碗		VIII
	VIII		C26-1, F23-2 H21-8			SK392(外来)	16(菓鴨)	幅広高台 瀬戸・美濃磁器型皿		IX
明治	c		H23-2				49(南町)	木型打込 箆書文 小坏		IX
	d									IX
明治	IX		AL37-1					コバルト クロム	IX	—

表1 東京大学本郷構内の遺跡編年表



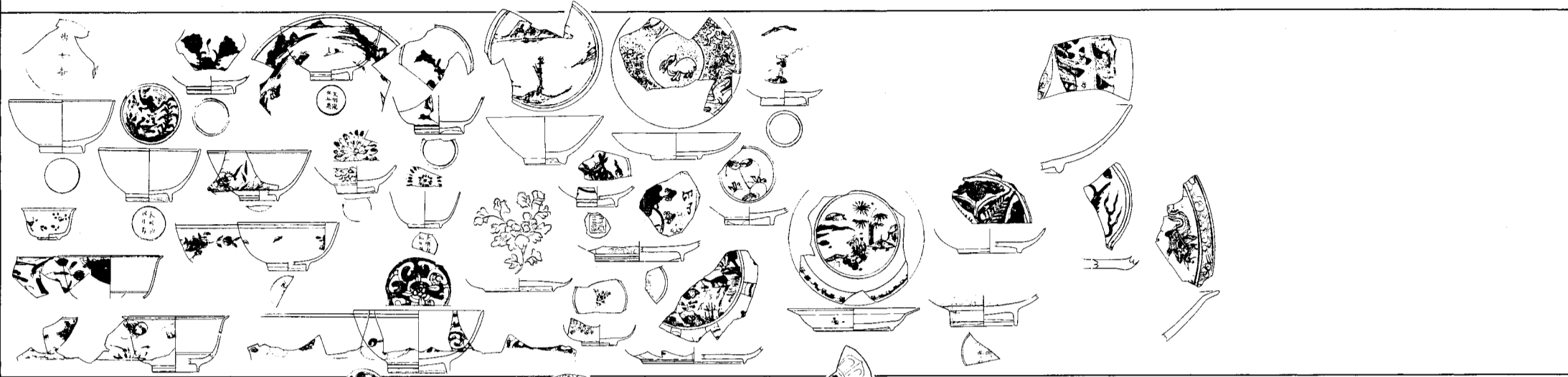
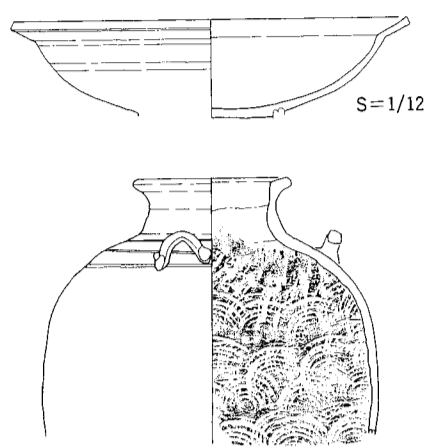
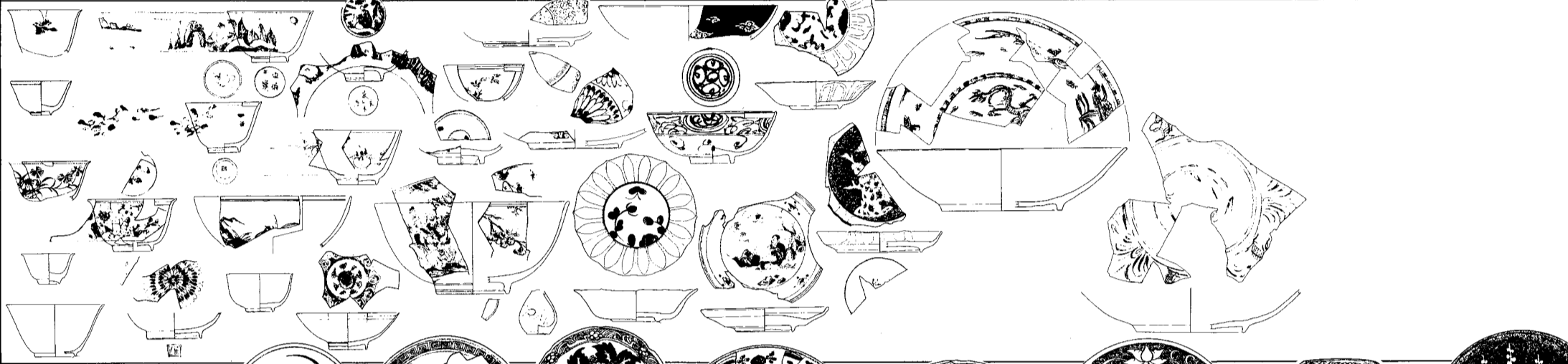
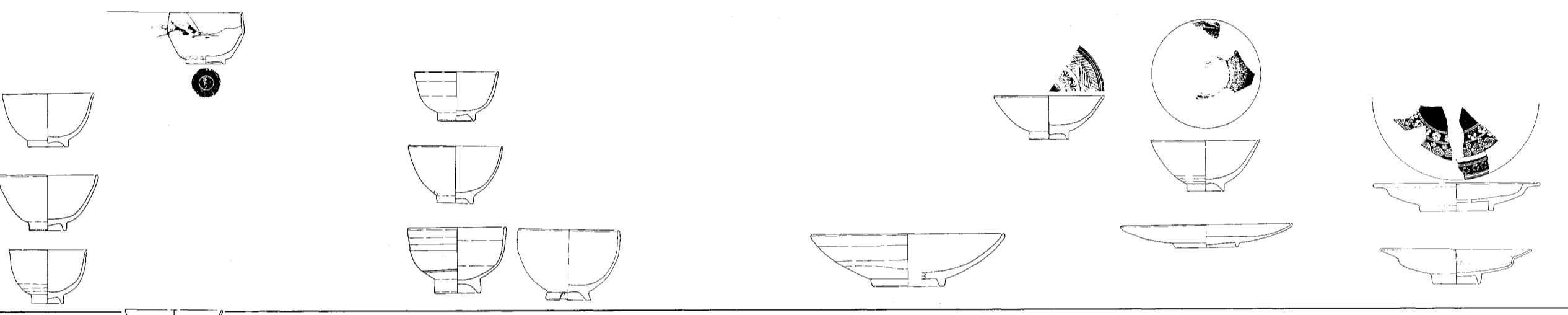
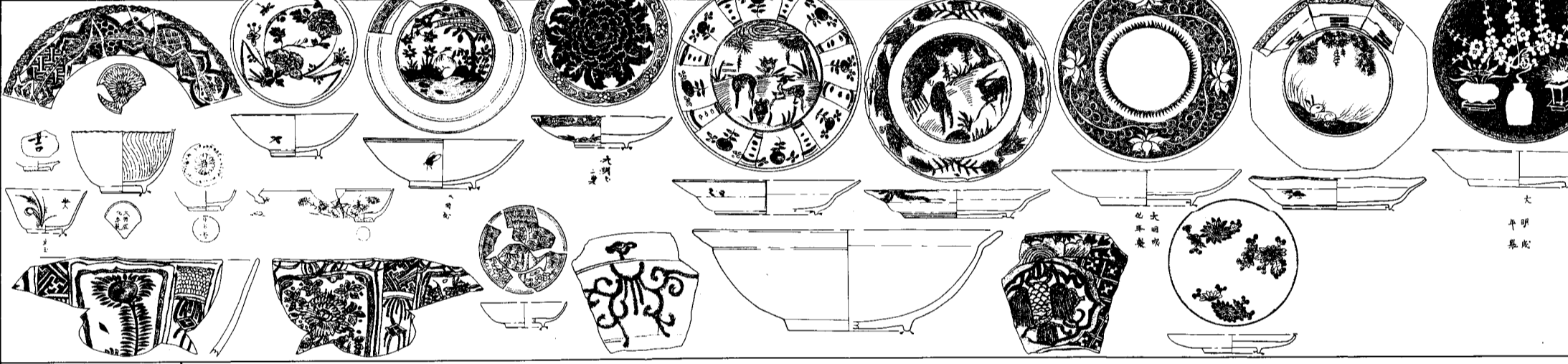
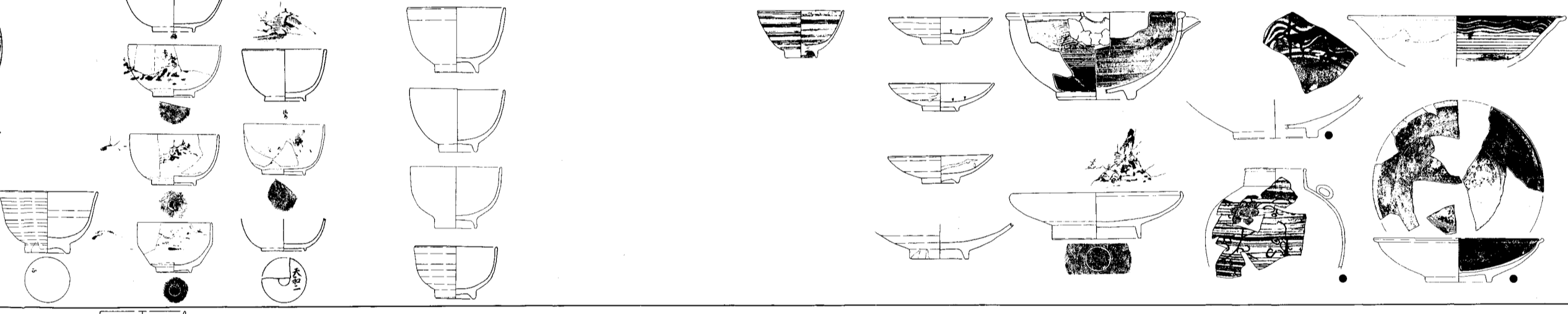
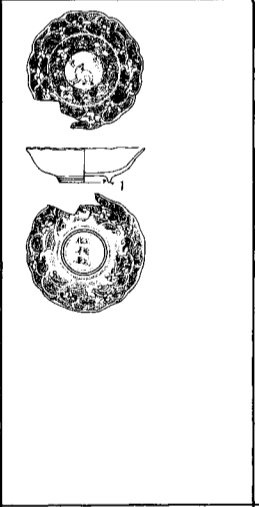
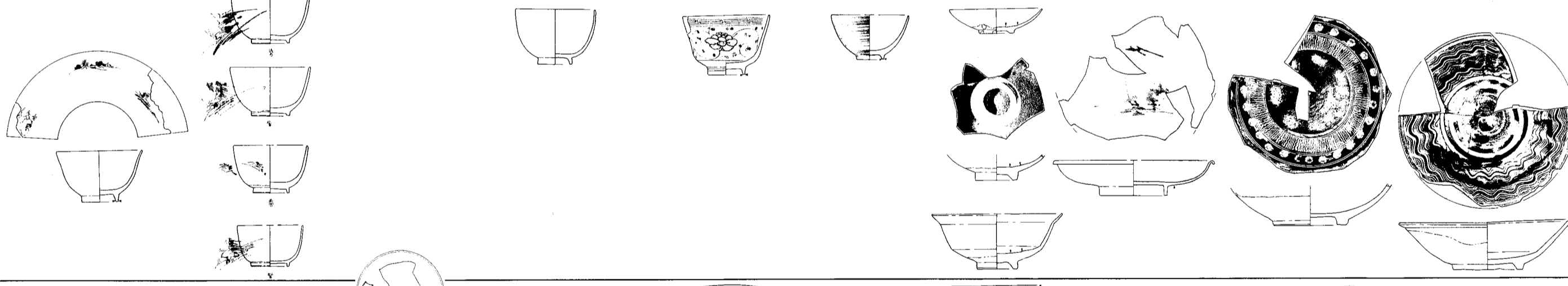
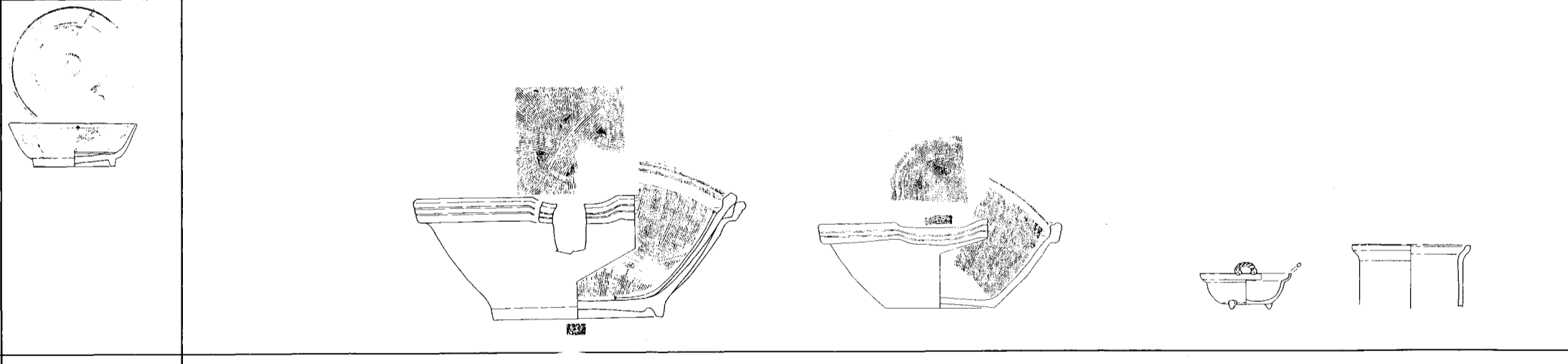
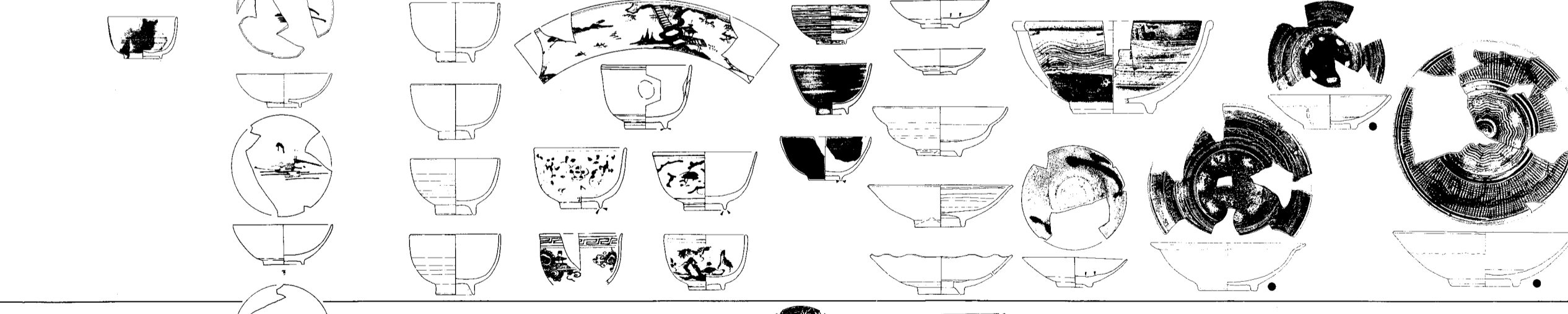
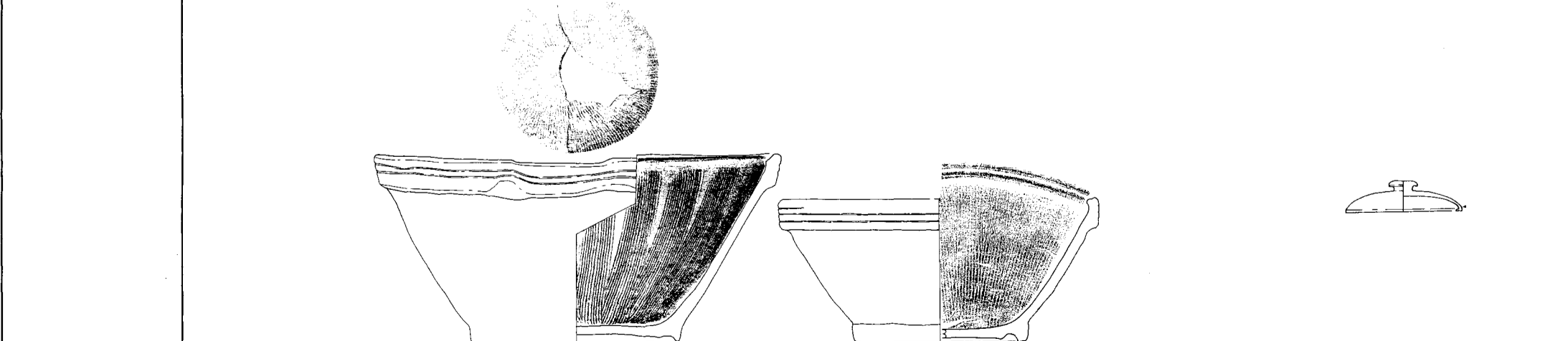
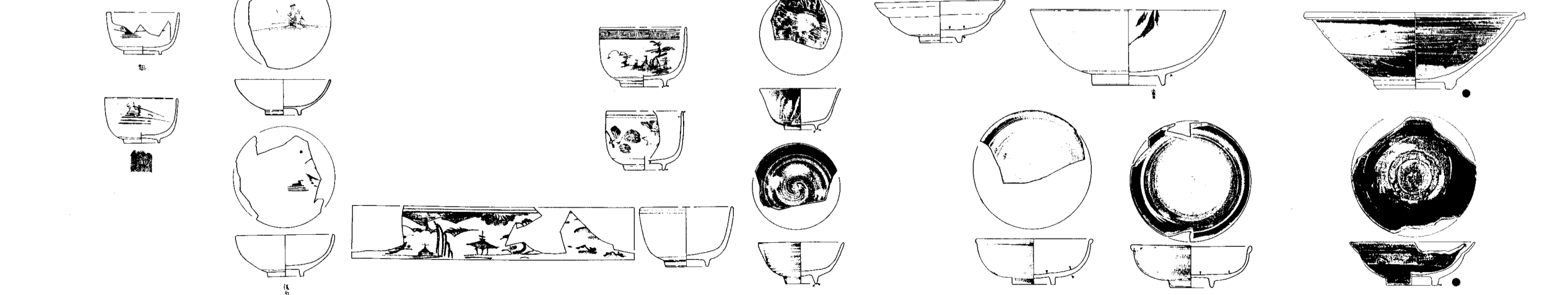
肥 前 系 磁 器

I	a	
	b	
II	a	
	b	
III	a	
	b	
IV	a	
	b	
V	a	
	b	



肥 前 系 磁 器

I	a	
	b	
II		
III	a	
	b	
IV	a	
	b	
V	a	

		輸入陶磁器	肥前系陶器
I	a		
	b		
II			
III	a		
	b		
IV	a		
	b		
V	a		



		瀬戸・美濃系陶器				京都・信楽系陶器	備前系陶器	志戸呂系陶器	丹波系陶器	
I	a									
	b									
II	a									
	b									
III	a									
	b									
IV	a									
	b									
V	a									
	b									

東京大学本郷構内の遺跡 陶磁器・土器編年表(4)





肥 前 系 磁 器

V	
VI	
VI	
VII	
VIII	
VIII	
VIII	
VIII	
IX	



肥前系磁器

V	b		
VI	a		
VI	b		
VII			
VIII	a		
VIII	b		
VIII	c		
VIII	d		
IX			

瀬戸・美濃系磁器

		堺系陶器		肥前系陶器	
V	b				
	a				
VI	b				
	a				
VII	b				
	a				
VIII	b				
	c				
	d				
	a				
IX	b				
	a				



	瀬戸・美濃系陶器	京都・信楽系陶器	備前系陶器	志戸呂系陶器
V				
VI	a			
	b			
VII	a			
	b			
VIII	a			
	b			
	c			
	d			
IX				

東京大学本郷構内の遺跡 陶磁器・土器編年表(9)

		土 器											
V	b												
	a												
VI	b												
	a												
VII	b												
	a												
VIII	b												
	c												
	d												
	a												
IX	b												
	a												

東京大学本郷構内の遺跡 陶磁器・土器編年表(10)

(S=1/6, 火鉢類は1/12)

## 江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷—文様、銘款を中心に—

成瀬晃司

### はじめに

武家地を中心とした江戸遺跡の調査事例は、止まることを知らず、当然のことながらそれに伴い多量の陶磁器が遺構覆土中や、盛土中より出土している。1遺跡内においても、100個体以上の陶磁器が廃棄された遺構が少なくとも1基は存在すると言っても過言ではない。廃棄土坑には、もともとゴミ穴を目的として掘削されたものを始め、廃絶された地下室、井戸などを転用したもの、採土坑の付加利用なども数多く含まれている。またそれらの遺構に対する遺物の廃棄にも日常のごみ捨てから、災害による整理、土地利用の変化、住人の移動など様々な要因が係わり合っていると見えよう。こういった廃棄要因、また廃棄土坑の規模などにより、その遺構のゴミ穴としての使用期間が左右され、当然のことながらそこに廃棄された遺物の年代幅（まとまり）にも影響を及ぼすことになる。

さて、我々がそのタイムスパンを考じるにあたり、骨格として位置付けてきたのは言うまでもなく、生産地での編年研究である。各生産地で段階設定された製品の、器種、焼成・成形技法、文様などの消長の組み合わせによって、遺構内の遺物組成の年代幅やその中心を導き出すことが可能となる。こうした作業をするにあたっては、層位的組成など遺物の出土状況、遺構の重複による遺物の混入など、調査時点での扱いに十分な配慮が必要であるのと同時に、分析においても小破片をも含めた、器種の存否の確認、さらに個々の数量のカウントによる組成比の検討が必要となる。

本稿では、東京大学本郷構内の遺跡出土資料の中で、前述した条件を満たす医学部附属病院地区（病院地点・外来診療棟地点）、農学部家畜病院地点の資料をもとに、他の江戸遺跡出土資料の中で良好な一括資料として扱った資料を加え（江戸陶磁土器研究グループ1996）、その組成、個々の器種の変遷を概説することを目的とするが、特に、江戸において出土量が激増する18世紀以降の肥前製品に主眼を置き、そのなかでも比較的、階層、地理に左右されることなく出土する、量産品の碗、皿による段階設定を文様を中心に試み、そのモデルとなった高級磁器との比較からその流れを捉えていきたい。

器種分類に関しては病院地点の報告で行った分類（文末、付表参照）を用い（成瀬・堀内1990）、時間軸として東大統一編年による時期区分を用いる（堀内1997）。また組成表は、

病院地区・家畜病院地点の遺構に関しては、全破片からのデータを提示しているが、それ以外は報告書に掲載された遺物のみを対象にしており、客観的なデータとして提示していないことをお断りしたい。

### 磁器碗の変遷 (図1～4)

江戸遺跡内の出土例としては、II期からの出土が認められる。

II期：本段階に属する資料には、御殿下記念館地点(以下、御殿下と略す)532号遺構がある(東京大学埋蔵文化財調査室1990)。組成としては、JB-1-aが主体を占めているが、寛永14(1637)年の窯場統合以降に生産が開始されたJB-1-bを含む資料である。JB-1-bには高台無釉部に鉄錆を施した例や、青磁染付(b-2)が含まれる。またJB-1-aには新しい様相として、「大明」銘が認められる製品も存在する。

III a期：本段階に属する遺構には、千代田区 紀尾井町遺跡SR35(千代田区紀尾井町遺跡調査会1988)、御殿下617, 678, 802号遺構がある。本段階を特徴付けるものにJB-1-cの出現と、高台内あるいは見込みに銘款を持つものがみられるようになることがある。上段に提示した碗は、紀尾井町SR35の資料である。見込みに荒磯文が描かれた製品が認められるが(c-3)、他のIII a期の資料と比較してJB-1-a, bが含まれる率が高く、前段階の組成に近い様相を呈し、銘款のバリエーションも「大明」「製」など少ない。それに対し御殿下の資料は、JB-1-cが主体で、銘款のバリエーションは「大明成化年製」「宣徳年製」「角福」などと多く、両者の様相には段階差が存在すると考えられる。

III b期：本段階は、JB-1-cの高台内に二重圈線を施した製品が出現する段階である(c-9～12)。これらは器形、文様ともに非常に丁寧に作られており、肥前磁器の技術の到達点を見ることができ、JB-1-eに受け継がれているものと考えられる。銘款には小坏にも多く用いられる「宣徳年製」「宣明年製」「大明成化年製」がみられる。またc-13のような白泥の型紙摺りによる雨降り文がみられ、次段階に出現する呉須による型紙摺り(d-4)に先行するものと考えられる。

本段階の下限は本郷邸が焼亡した天和2(1682)年にあるが、その火災一括資料に医学部附属病院病棟地点のC2層出土資料がある(成瀬1996b)。この一括資料は柿右衛門窯、



南川原窯ノ辻窯など有田の最先端，最高級磁器が主体である。この中に底部片であるが JB-1-e のプロトタイプと考えられる製品が含まれる。これは，高台断面がほぼ U 字状を呈し，高台内には二重圏線，見込みには二重圏線内に手描き五弁花が描かれている。この製品により 1680 年代初頭における五弁花の存在を知ることができる（成瀬 1996 a）。

IV a 期：本段階は，肥前磁器にとって画期となる時期である。生産地ではこの頃より国内向けの生産にシフトしつつあり，コンニャク判，型紙摺りといった印刷技法による施文方法を用いた JB-1-d が出現する。そのうち本段階に位置付けた d-1～4 は，筆者が 14 a 類とした大振りの碗で（成瀬 1993），波佐見の高雄窯物原第 6 層中より同様の製品が出土している（波佐見町教育委員会 1996）。遺構では理学部附属植物園・研究温室地点の SK27，東大病院地点（以下，病院と略す）の F34-11 が属するが（東京大学遺跡調査室 1990），1680 年代前半を下限と推定している SK27（成瀬・堀内・両角 1994）から出土した 14 a 類の文様は，全て手描きによるものである。それに対し F34-11 では，SK27 と比較して量的な違いもあるが，そこにはコンニャク判，型紙摺りによって施文された製品が多量に含まれている。この 2 例だけで論を進めるのは危険であるが，大量生産に向けた 14 a 類の生産の中で，印刷技法が誕生していた可能性が考えられる（註 1）。銘款には 17 世紀中葉に一時認められた「大明年製」が一重圏線内に書かれている例がある（写真 4）。

IV b 期：本段階に位置付けられる JB-1-d は，前段階の製品に対し，高台径が一まわり小さく全体的にやや小振りになる（d-5～8）。器形，文様などの共通性から JB-1-d のバリエーションとして位置付け，前出の拙稿では 14 b 類とした。本段階は，この 14 b 類と，JB-1-e，JB-1-f の出現期として位置付けることができる。14 b 類には 14 a 類同様一重圏線内に「大明年製」の銘款が書かれる場合が多い（写真 5）。主文様には様々なコンニャク判が盛んに用いられている。それに対し JB-1-e，JB-1-f の主文様は手描きによる製品が中心で，唐草文，松竹梅文などが描かれている。銘款には「大明成化年製」「大明年製」（写真 2），二重角枠内に「渦福」銘（写真 3）がみられる。また JB-1-e には見込みに五弁花を描く例も多い。本段階に属する遺構には，宝永の火山灰層を含む遺構と遺構間接合をした巢鴨遺跡中野組ビル地区の 1 号遺構（巢鴨遺跡中野組ビル地区埋蔵文化財発掘調査団 1994），元禄 16（1703）年の火災に下限を求められる病院の K30-1，御殿下の 537 号遺構などがあり，元禄年間後半頃の様相と考えられる。

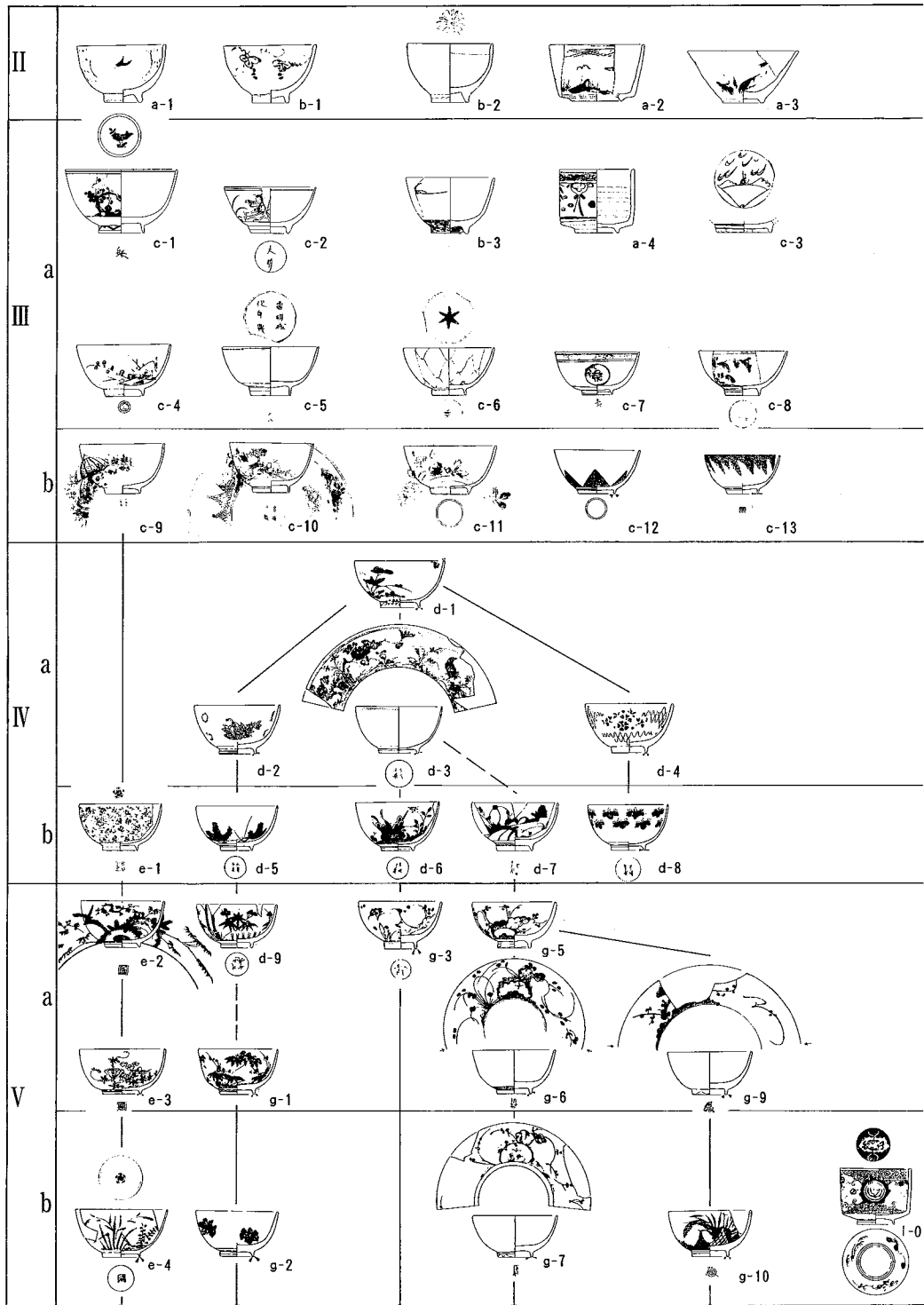


図1 江戸遺跡出土磁器碗の変遷(1) (S=1/8)

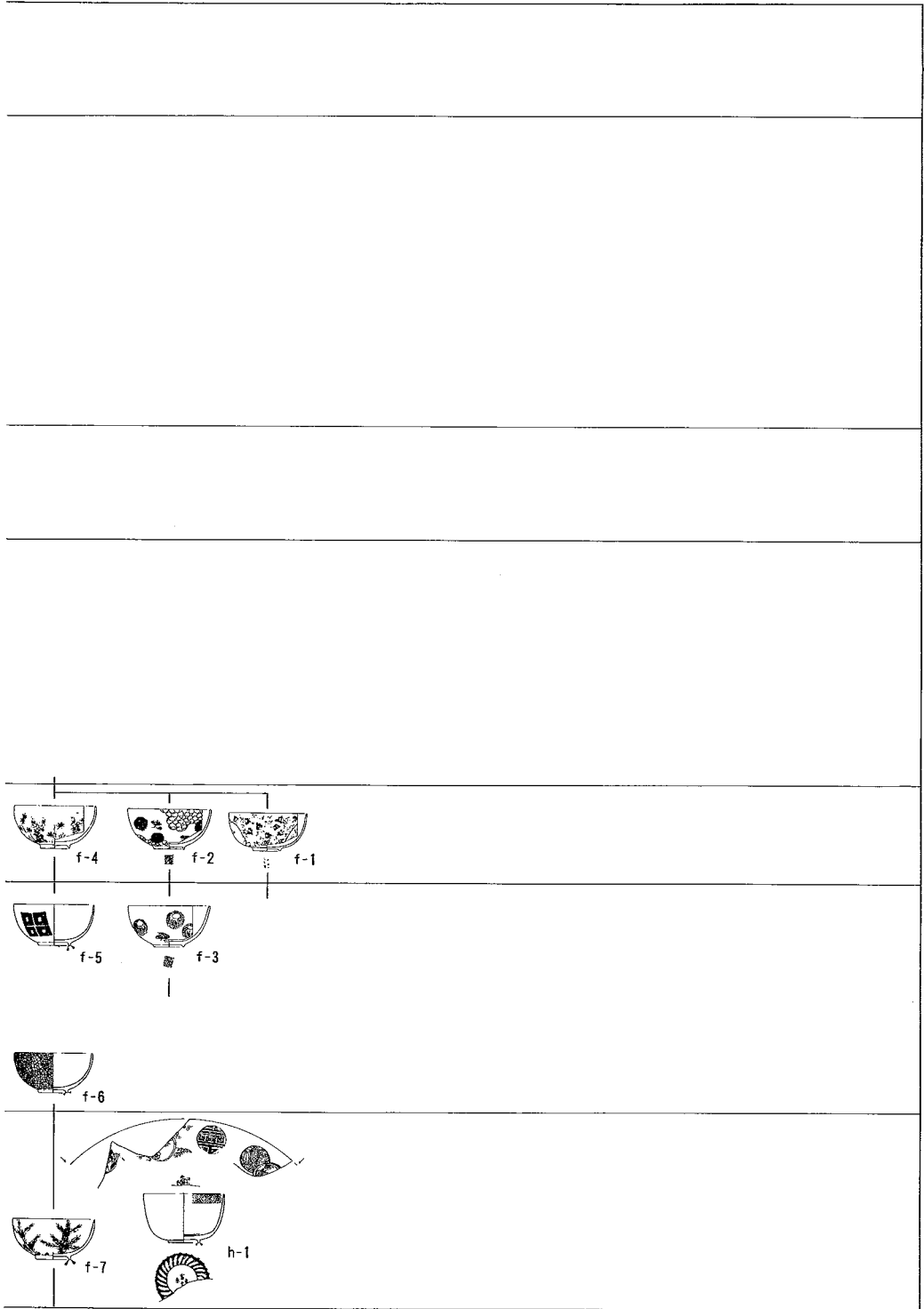


図2 江戸遺跡出土磁器碗の変遷(2) (S=1/8)

V a 期：本段階を特徴付ける製品として JB-1-g がある。その文様例には g-3 にみられる雪輪梅樹文、二重網目文などがある。これは e-2 にみられる雪輪松竹梅文を模した可能性がある。JB-1-g は、コンニャク判による施文方法の使用、高台内の「大明年製」銘など JB-1-d (14b 類) から変化してきた製品と考えられるが、漸移的に変化しているためどちらの分類に属するか明確に判断できない製品も含まれる。

本段階における銘款の特徴は、JB-1-e では二重角枠内に「渦福」(写真1)、JB-1-d (14b 類) では引き続き一重圏線内に「大明年製」、JB-1-g では「大明年製」で圏線を持たないものが主体、JB-1-f では年号の銘款はほとんど姿を消す。また JB-1-d (14b 類) と JB-1-g の銘款を比較した場合、圏線の有無以外にも字体に相異が認められる。JB-1-d (14b 類) の「大明年製」はやや崩れながらも一文字一文字が独立して書かれているが、JB-1-g では「大明」「年製」が各々続け字になり、個体の判読も困難なものが多い。これは皿にもいえることで、本稿では「崩れ大明年製」と仮称したい(写真6)。JB-1-g には「崩れ大明年製」の他「渦福」も認められるが、これは JB-1-g の初現期の組成と考えられる新宿区南町遺跡96号遺構には認められず(新宿区南町遺跡調査団1994)、享保年間頃の組成と考えられる病院 F33-3 段階に出現期を求めたい。改めて言うまでもないが、JB-1-e の「渦福」とは二重角枠の有無という点で大きく異なる(写真7)。JB-1-f では二重角枠内に「渦福」が主体となる組成(南町96号遺構)、二重角枠内の「渦福」銘も減少し銘款を持たない製品が主体となる組成(病院 F33-3)との様相差が認められ、IV b 期からの本段階にかけての銘款の変遷を整理すると、年号銘・「渦福」→「渦福」→無文といった変遷を示している。

V b 期：本段階では、V a 期の碗組成に加え、新たに JB-1-l とした筒形碗、JB-1-h とした腰張り碗の出現をみる。本段階の JB-1-l には VI 期以降に顕在化してくるそれと比較すると、大振りで体部はほぼ直立する製品が含まれる。成形、文様なども丁寧な作りで、高台脇に文様帯を有し、見込みには丸文など五弁花以外の文様を描く例が多い(1-0)。JB-1-h は VI a 期に出現する JB-1-j と比較すると、大振り、体部から口縁にかけてやや外傾して立ち上がっており、蓋付き碗になる可能性が高い。しかし製品によっては JB-1-j と区別が付け難いものも存在し、改めて分類基準を再考する機会を持ちたい。これらには色絵製品も多く見受けられ、ほぼ本段階に限定して生産された製品と考えたい。JB-1-e の銘款には二重角枠内「渦福」、JB-1-g では「崩れ大明年製」と枠なし「渦福」が併存する。JB-1-f

では菊花文が描かれた製品が出現する。また本段階より JB-1-e, f などの上質の製品を中心に青磁染付による製品が出現するが、医学部附属病院外来診療棟地点（以下、外来と略す）（藤本・寺島・成瀬1992）SK137では、JB-1-g, 1に青磁染付が認められ、V b 期に位置付けた一括資料の中でも新しい段階に置くことができよう。またこの JB-1-g には「筒江」銘が認められ、江戸遺跡出土資料の中で初現期に位置付けられる製品のの一つである。

VI a 期：本段階は、JB-1-j, q, 現在分類を設定していないが、大橋康二によって B 類碗とされた高台脇に稜を有し、体部がハの字状に開く碗（大橋1986）が出現する段階である。JB-1-g の銘款には「崩れ大明年製」粹なし「渦福」が併存する。青磁染付は雑器にも盛んに施されるようになり、大橋分類の A-3 類 (g-16) に比定される JB-1-g や JB-1-l に、口縁部内側四方禪文、見込みコンニャク判五弁花との組み合わせが多く用いられる。JB-1-l には青磁染付の他に染付製品も多く認められるが、外来 SK152では VII 期以降 JB-1-i, m に盛んに描かれる「暦文」が染付された製品が出土している。JB-1-j は主文様に矢羽文などが、見込みに手描き五弁花、火焰宝珠文などが染付された製品が認められる。

VI b 期：本段階を特徴付ける製品には JB-1-i があり、遺構一括資料には病院 E22-1, Y 34-4 が位置付けられる。JB-1-i の文様は、見込み二重圏線内に昆虫文、寿字文などのワンポイントを、口縁内側に一重もしくは二重の圏線を巡らす特徴がある。

小広東碗は広瀬向窯（大橋1986）において物原 4 層からの出土がみられるが、6 層出土資料で大橋が丸碗と分類している製品（報告書 Fig.11—34, 35）は、体部にやや丸味を有するものの形態的には JB-1-i に分類されるものと考えられ、4 層の広東碗出現前段階にその上限を求めることができる。E22-1 出土資料は体部にやや丸味を有し、見込みには五弁花 (i-1)、高台内には「大明年製」銘が書かれている。また、口縁内側の圏線はなく、本類でも初現期の製品に位置付けられよう。JB-1-g では「崩れ大明年製」がほとんどみられなくなり、粹なしの「渦福」主体となる。この「渦福」も前段階までの銘款と比較すると、文字の退化が著しく、特に偏において顕著で「しめすへん」がほぼ直線に近く退化している (g-12, 写真 8)。

VII 期：本段階は、JB-1-m が出現する段階である。JB-1-i の主文様には虫かご文 (i-2) や、連鎖文 (i-4) などの広東碗と共通する文様がみられるようになる。見込み文様ではコ

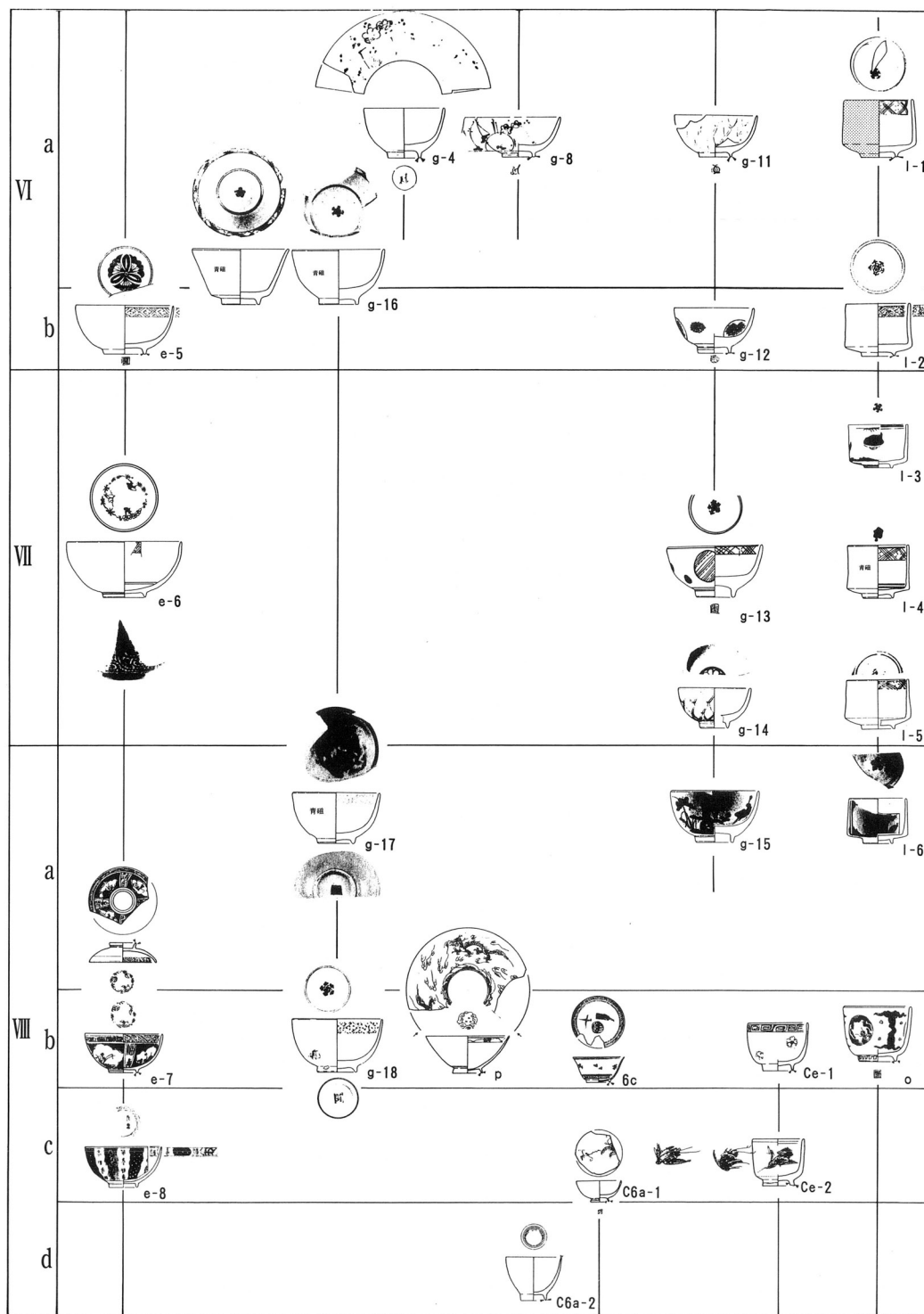


図3 江戸遺跡出土磁器碗の変遷(3) (S=1/8)

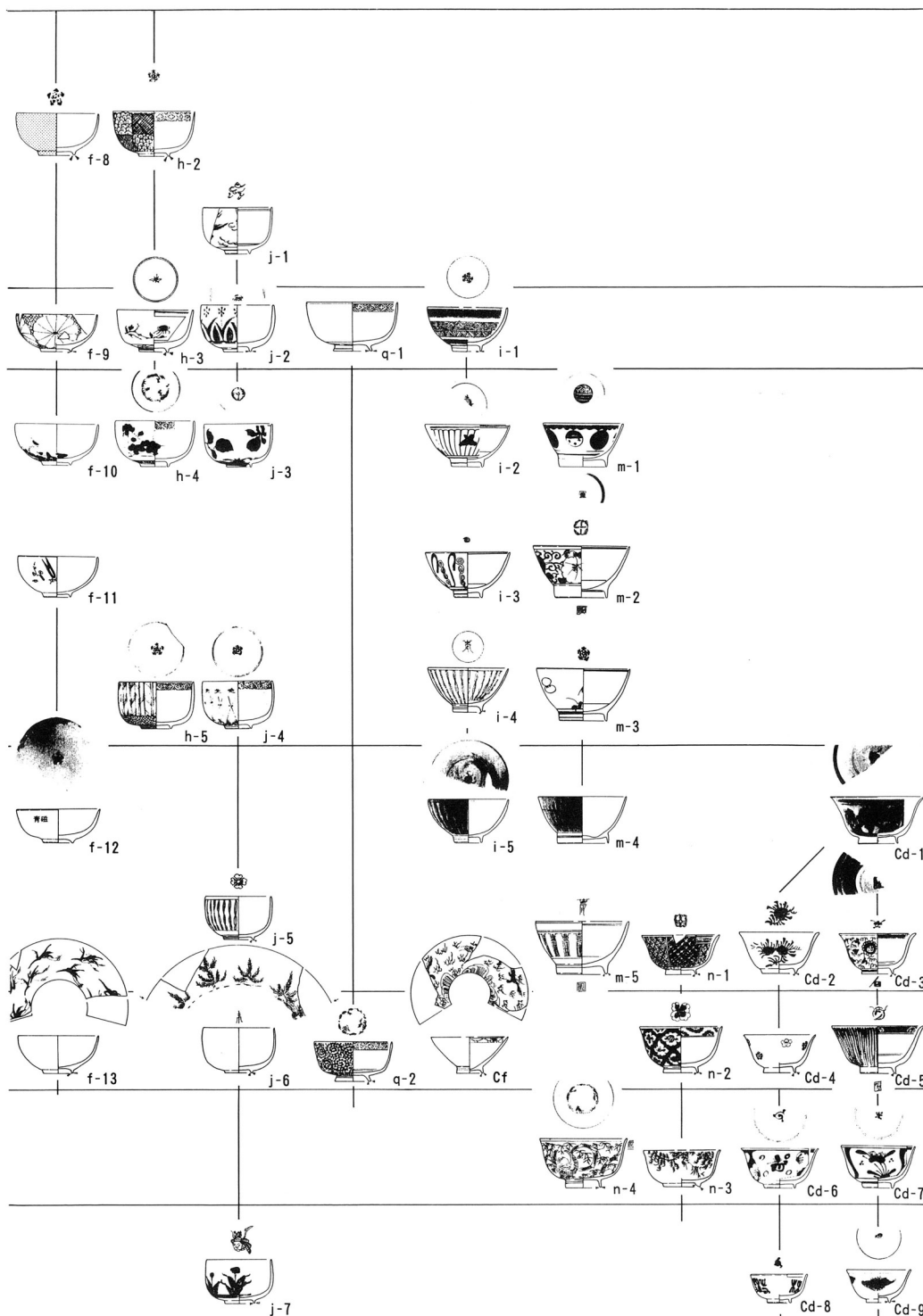


図4 江戸遺跡出土磁器碗の変遷(4) (S=1/8)

ンニャク判五弁花はJB-1-g, JB-1-lなどの雑器に認められ, JB-1-e, JB-1-h, JB-1-qには環状松竹梅文が認められるようになる。またJB-1-i, JB-1-j, JB-1-mには, 昆虫文, 寿字文, 宝珠文などが盛んに用いられている。銘款ではJB-1-gに枠なし「渦福」がほとんどみられなくなり, 換わって清朝を意識したと考えられる二重角枠内に異形字を書いた銘款が出現する (g-13, 写真9)。JB-1-mの銘款も二重角枠内に異形字が書かれた例が多い。また二重角枠内に「子膽」銘が書かれた例が, JB-1-j, JB-1-m (m-2) に認められる。

VIII a 期: 本段階は, 瀬戸・美濃産の磁器碗 (JC-1-c, JC-1-d) やJB-1-nが出現する段階である。JB-1-gは青磁染付と, 染付が認められるが, 染付製品に関しては, 本段階ではほぼ姿を消すものとする。本段階が下限と考えられるものには, JB-1-l, JB-1-iもある。JB-1-i, JB-1-mの主文様は前段階に比し連鎖文, 暦文, 寿字文が描かれた製品が多く, そのピークに位置付けられると考える。暦文は, 巢鴨遺跡つつじ苑地区18号遺構から端反碗に描かれた製品の存在が報告されているが, VII期から本段階にそのピークが存在することを示す資料である。(伊藤・梶原1996) JC-1-dは, 薄手で口縁部の湾曲が顕著な初期の形態を呈し, 文様には山水文, 花文, 氷裂文などが, 口縁部内面には墨弾きによる文様を配した帯文が, 高台内には二重角枠内に異形字を書いた銘款が多く用いられている (写真10)。

VIII b 期: 本段階は, JB-1-o, JB-1-p, JC-1-eが出現する段階である。JC-1-dはVIII a 期と比較し, 厚手で口縁部の湾曲が緩やかになる製品が主体的になる。主文様には前段階にみられた山水文, 唐草文, 草花文のほか, 区画内草花文, 仙芝祝寿文, 毛彫りを用いた文様などがある。これらの製品にはほとんど銘款は書かれていない。また色絵が施された瀬戸・美濃製品が認められる (Ce-1)。JB-1-eは口径に対し器高が低くなったJB-1-fにやや類似した形態の蓋付き碗が出現する。主文様には寿字文が, 見込みには環状松竹梅文が描かれた製品が認められる (e-7)。また文様には飛龍文 (JB-1-p), 飛鶴文 (JB-1-f) などを描いた製品が認められるようになる。小坏ではJB-6-cとした薄手の端反小坏が出現するが, 染付製品の他, 見込みに金彩による上絵付けを施した製品も認められる。

VIII c 期: 本段階では, 瀬戸・美濃においても薄手の小坏が生産されるようになるが (JC-6-a), C6a-1のような見込みに呉須を混入した白玉ガラスによる上絵付けを施した薄手の



小坏が出現する。JB-1-nには畳付けの幅が広い、蛇ノ目状の高台が加わる。JC-1-dは前段階と比較し、口縁部の湾曲の緩やかさが顕著で、器高も低くなる。文様は、Cd-6、7のような、捻花状の区画内に草花文を描いた例が多くみられる。

VIII d 期：本段階は、C6a-2の白磁小坏に示したような、木型打ち込みによる円形寿字文が瀬戸・美濃において生産されるようになる。JC-1-dでは引き続き器高の低下傾向がみられ、Cd-8のような篆書体と考えられる異形字の文様を描いた製品が出現する。

### 皿の変遷 (図5～9)

I b 期：本段階に属する遺構には、丸の内三丁目遺跡の52号遺構がある（東京都埋蔵文化財センター1994）。本遺構からは吹墨による文様を描いたJB-2-aの存在が報告されているが、小破片が1点出土しているにすぎず、出土状況など検討の余地を残す。

II 期：本段階に属する遺構には、御殿下の532号遺構がある。本遺構からは、JB-2-a、JB-2-h、JB-2-bが出土している。JB-2-aが組成の中心ではあるが、「角福」の銘款を有すJB-2-bや、JB-4-aなど新たな要素を持つ製品が含まれる。

III a 期：本段階は、JB-2-aは減少し、JB-2-cが組成の中心になる段階である。高台内にはハリ支え痕が認められるようになり、銘款は二重角枠内に「角福」、「宣徳年製」、「大明成化年製」などバリエーションが増加する。現段階ではJB-2-kの初現を本段階に位置付けたいと考えている。

III b 期：本段階は、JB-2-cが主体となる段階であるが、その下限ではJB-2-dの出現期にあたりと考えている。JB-2-cにはc-3～7にみられるように前段階同様、様々な銘款のバリエーションが存在する(写真11, 12)。主文様にはc-6の墨弾き、c-4の型押しによる浮文なども多く認められる。裏文様では一本線による蔓草(c-6)や、花唐草文、二本線による梅花唐草文(c-7)などがある。次段階以降に増加するJB-2-dには、二本線による如意頭唐草文がみられる(d-2)。この裏文様の描写方法の差には段階差を認めることができる。この差は、銘款にも現れている。二本線による唐草文が描かれた製品は、二重角枠内に「渦福」や変形字(c-7)を書いた例が多い。「渦福」は一本線に蔓草を描いた製品にも存在す

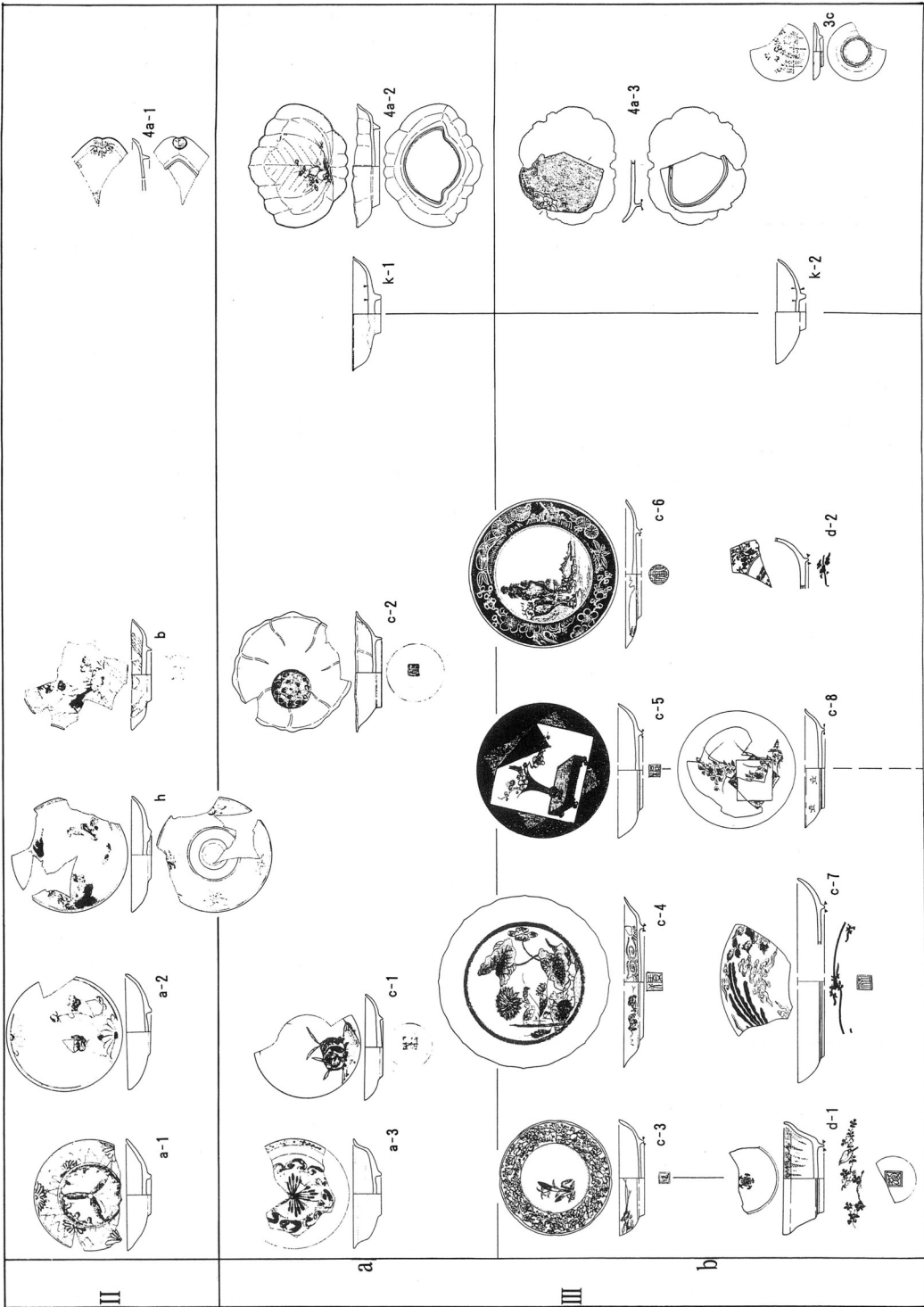


図5 江戸遺跡出土磁器皿の変遷(1) (S=1/8)

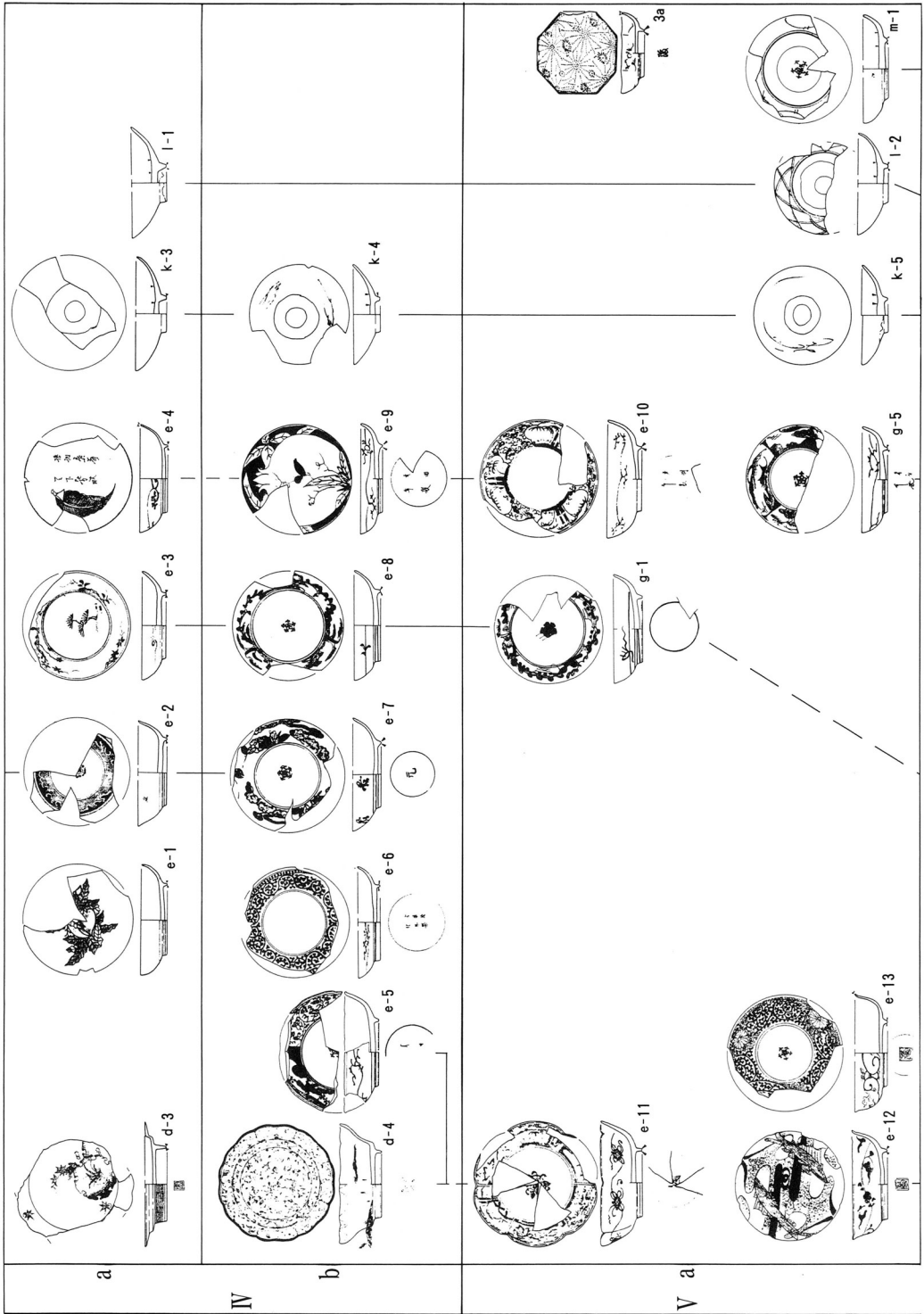


図6 江戸遺跡出土磁器皿の変遷(2) (S=1/8)

るが(c-3)、隣の田の字にあたる渦が楕円形に近く、巻き込みが少ない(写真13)。それに対し、二本線による唐草文が描かれた製品の「渦福」は、円形で巻き込みが多い(写真14)。図示したd-1は、病棟C2層から出土した製品で、別個体に二本線による如意頭唐草文が描かれた製品があり、同様の「渦福」が書かれている。また本製品は、見込みに手描きによる五弁花文が描かれており、先述した見込みに五弁花を施した碗とともに、その初現を知り得る資料と位置付けられる。

御殿下391号遺構からは、呉須による型紙摺りの小皿(3c)が出土しており、その初現が本段階に求められる可能性を提示している。

**IV a 期**：本段階は、JB-2-d、JB-2-eが組成の主体となり、JB-2-1の初現期と考えられる時期である。本段階の中皿はd-3など南川原窯ノ辻窯クラスの「高級磁器」を除くと、e-1~4といった浅めの中皿である。これらの文様には、型紙摺り、コンニャク判を用いたもの(e-1)が出現し、見込みを圏線で区画し五弁花などのワンポイントを施した製品のほか、一枚絵のもの(e-1, 4)がある。裏文様には無文、二本線による如意頭唐草文、前段階から続く抽象文(e-2)などや、本段階から出現すると考えている茎を圏線で表現した唐草文(e-3)がある。これらの皿は、南川原窯ノ辻窯の製品を指標としたJB-2-dを除いた高台断面U字状の皿とした分類基準に包括されているが、後述するV a 期段階から普及する口縁が輪花を形成する深めの皿と一線を画すものである。おそらくは有田やその周辺の雑器窯で生産された製品であろう(註2)。

**IV b 期**：本段階は、前段階同様JB-2-eが主体となる時期である。JB-2-eは、先述したとおりe-5例にみられる口縁部に輪花を形成する深めの中皿と、前段階から引き続く浅めの中皿に分化される。見込み文様は、e-7, 8のように側面に文様を巡らし、中央はコンニャク判による五弁花のワンポイントのみの構成が多くみられる。側面の文様帯には、波頭文や、捻花状の細かい区画を墨弾きによって描いた例もみられる。銘款には「大明年製」「大明成化年製」などが多い(写真19, 20)。裏文様にはJB-2-dに施された如意頭唐草文もみられるが、それと比較すると如意頭部が太線による輪郭のみで表現され、蔓部分も縁取りを有さない太線のみで表現されるなど簡略されている(e-5, 9)。

**V a 期**：本段階では、JB-2-eのうち深めの中皿とした製品の銘款に二重角枠内に「渦福」

が多くみられる（写真15）。また浅めの中皿は減少し，それから変化したと考えられる JB-2-g が出現する。これは，JB-2-e と比較し全体的に厚手の作りになっており，畳付けの幅も広い。銘款には碗同様「崩れ大明年製」が書かれている（写真21）。裏文様は，太線によるラフな唐草文が描かれている。JB-2-m は本段階から出現すると考えられる。JB-2-l の主文様は本段階から斜格子文が一般化するようである。

**V b 期：**本段階は，JB-2-j の出現する段階である。これは，窯詰め技法にみられる差異を除けば，JB-2-e の深めの中皿と共通したプロポーションで，その系統上にあるものと考えられる。本段階における JB-2-j には青磁染付が認められ，碗同様「上級器種」に青磁染付という施釉方法が出現する段階と位置付けられる。深めの JB-2-e の文様は，見込み側面に唐草，中央に手描き五弁花のワンポイント，裏文様に太線による如意頭唐草文，銘款に二重角枠内に「渦福」といったパターンが定着してきている。また如意頭の表現は簡略化され，輪郭のみを楕円形状に描き，グミをかけていない例がほとんどである。JB-2-j の見込み文様には，五弁花文のワンポイントのほか環状松竹梅文を描いたものがある(j-1)。JB-2-g は前段階から大きな変化はなく，見込みにはコンニャク判五弁花のワンポイント，銘款は「崩れ大明年製」の構成が主体である。g-2の裏文様は，茎を圏線で表現した唐草文でIV期を中心に用いられた表現であるが，器厚，畳付け幅など形態的にそれとは異なり，本段階で模倣した可能性を考えたい。JB-2-m では外来 SK290出土例にコンニャク判五弁花と唐草文を主文様とした製品があり，次段階以降顕在化していくと考えられる。JB-2-k の主文様として多く用いられてきた折れ松葉文は，著しく退化し一本線のみで表現されている(k-6)。本器種はVI期以降にはほとんどみられず本段階を下限と考えている。

**VI a 期：**本段階では，JB-2-g の銘款に変化がみられる段階である。図の上段に並べた製品は，外来 SK152出土資料である。g-8, 9は類似した主文様が描かれている。それに対し，銘款はg-8では「崩れ大明年製」，g-9では「枠なし渦福」である（写真22）。碗の変遷でも触れたように雑器の銘款は，「崩れ大明年製」から「枠なし渦福」へV期に移行している。それと同様の流れが皿にも存在しているといえる。但し，碗の状況から皿においてもV a 期段階に移行期が設定できる可能性が高い。下段の左3点は千代田区 尾張藩麴町邸跡 SK317出土資料である（紀尾井町6-18遺跡調査会1994）。JB-2-g の見込み文様はコンニャク判五弁花と扇面文が描かれ，銘款は「枠なし渦福」である(g-10)。この文様パターンは

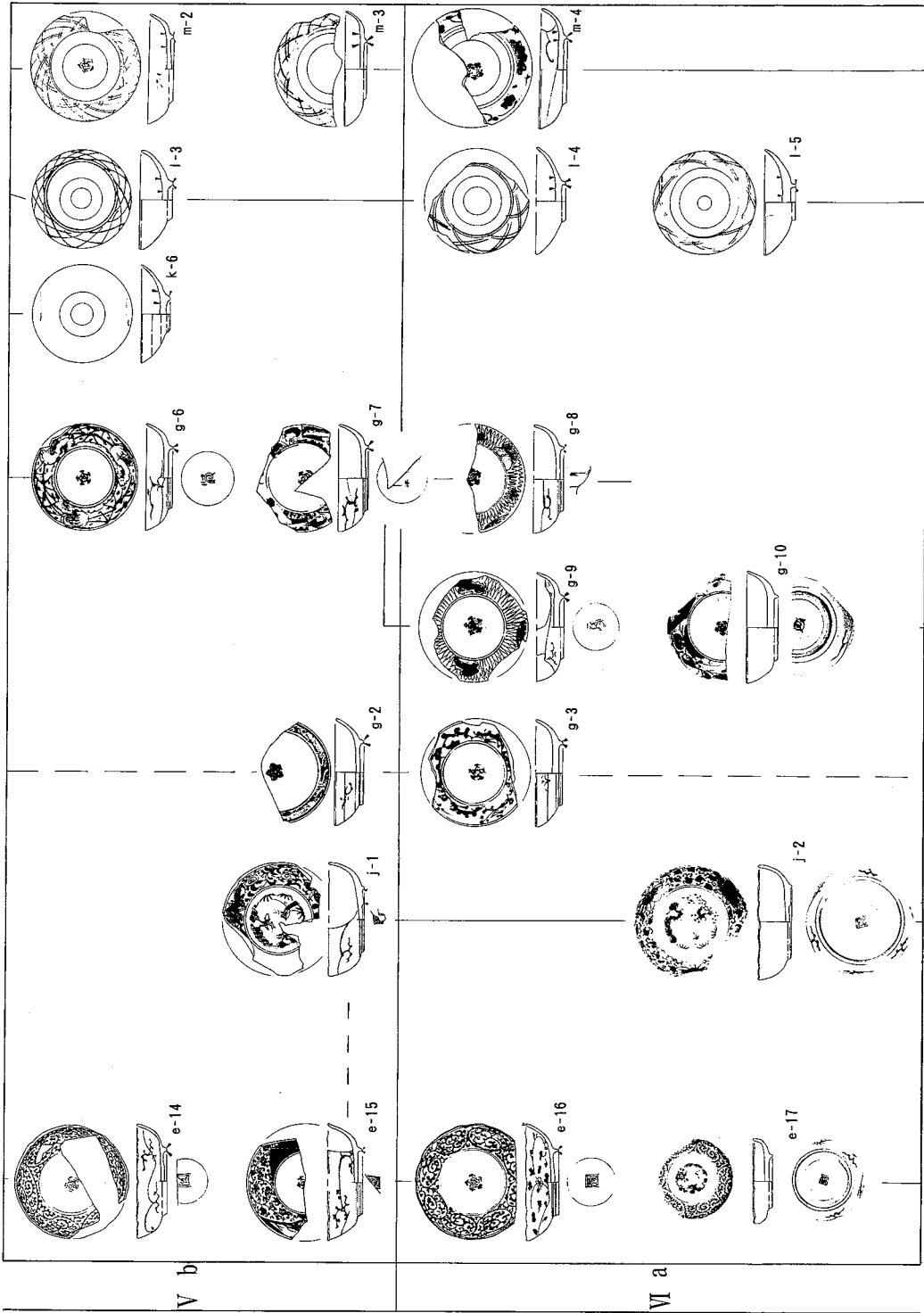


図7 江戸遺跡出土磁器皿の変遷(3) (S=1/8)

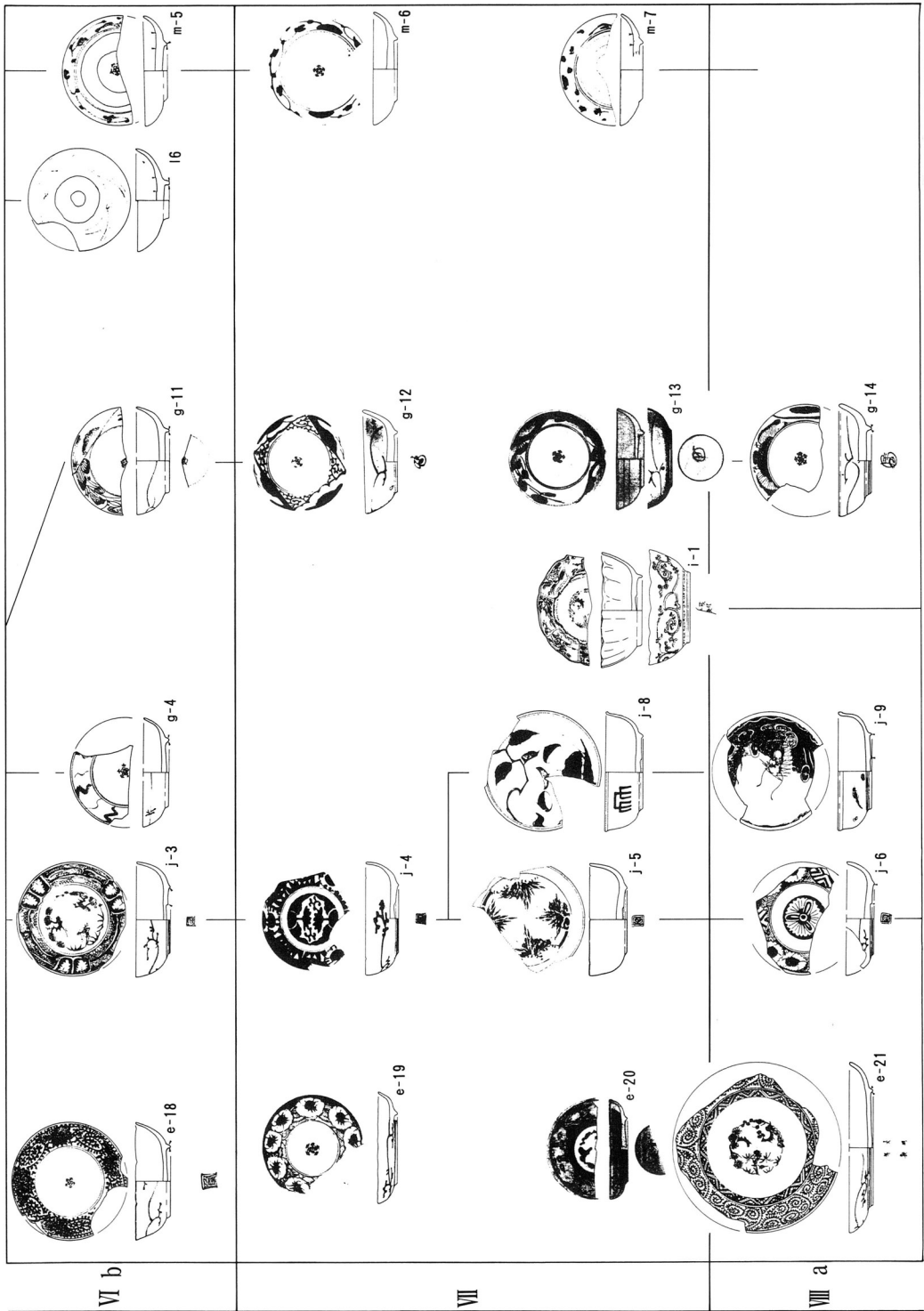


図8 江戸遺跡出土磁器皿の変遷(4) (S=1/8)

JB-2-g の下限とみなされるVIII a 期まで主的に生産されている。さらにこの渦福は「しめすへん」が一本線または、偏も渦に取り込まれた描かれ方をしている(写真23)。これを「枠なし崩れ渦福」と仮称する。本段階は深めの中皿が、JB-2-e から JB-2-j に移行する段階と位置付けられ、JB-2-e には新たに腰の張る浅めの中皿が出現する (e-17)。見込み文様には JB-2-j と同様に環状松竹梅文や手描き五弁花文などが描かれている。JB-2-e, JB-2-j の銘款には二重角枠内に「渦福」の他に、二重角枠内に「筒江」が認められる。

VI b 期：本段階は、ほぼVI a 期の様相と同様である。病院Y34-4から出土した深めの JB-2-e は(e-18)、今回対象にした一括資料の中で下限に位置付けられる資料であるが、その銘款の二重角枠内に「渦福」は、「しめすへん」が簡略化され、直線的に描かれている(写真16)。JB-2-g と同様に偏における退化がVI期段階で生じてきた資料と考える。

VII期：本段階には、切り合い関係を持つ法学部4号館地点のE7-3号土坑、E8-5号土坑が含まれる(東京大学遺跡調査室1990)。両遺構から出土した遺物には段階差が認められ、上段にE7-3号土坑、下段にE8-5号土坑の出土遺物を中心に提示した。上段では、深めの中皿がJB-2-e から JB-2-j にシフトし、JB-2-j と JB-2-g が組成の中心を成す。JB-2-j の銘款には二重角枠内に「渦福」「筒江」が認められる。「渦福」は前段階の e-18同様、偏が退化した「崩れ渦福」になっている。

下段では JB-2-i の出現がある。但し、本段階はあくまでも初現期といった位置付けで、一般的に流通してくるのは次段階になる(成瀬1994)。この頃より再び年号銘が書かれる傾向にある。JB-2-j は口縁部が玉縁状に成形された j-8 が出現する。これは現在のところ本段階とVIII a 期にのみ認められ、時間的に限定される製品と考えられる。文様構成は、主文様に一枚絵、裏文様には幾何学文などを複数箇所配し描かれ、他の JB-2-j とは様相が異なる。

VIII a 期：本段階では、JB-2-e の主文様、即ち唐草文・鋸歯状の文様が巡る帯文・環状松竹梅文による構成が定型化してくる。銘款には「太明年製」「太明成化年製」などの年号銘が用いられる(写真17)。これは JB-2-e に限らず JB-2-i にも認められ、二重角枠内に「渦福」は JB-2-j に認められる程度である。JB-2-g の「枠なし崩れ渦福」は本段階でさらに変形し、傍の上部の「一・口」が複数の横線で書かれる例が多い (g-14)。これは本段階に限定



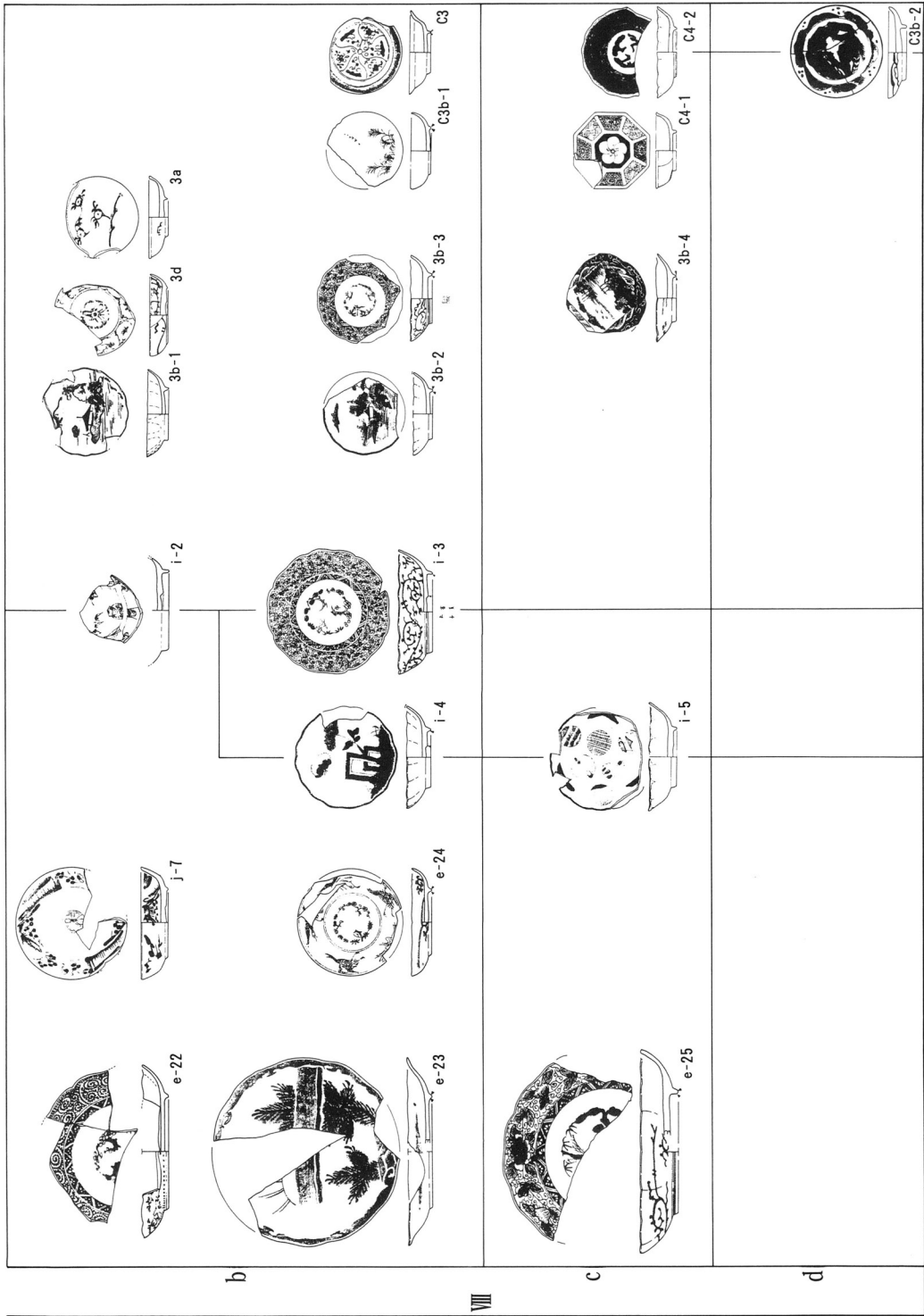


図9 江戸遺跡出土磁器皿の変遷(5) (S=1/8)

された書き方と考えられ、その形態から「馬字状渦福」と仮称したい(写真24)。また JB-2-g は次段階以降では、ほとんど認められなくなる。

**VIII b 期**：本段階では、志田西山1号窯(大橋1991)の製品とされる e-23が流通する。JB-2-i は文様構成が大きく2系統に分化される。一つには、前段階からの文様構成で主文様を区画する製品で、これには裏文様に唐草文が描かれ、年号銘による銘款が書かれている(i-3, 写真18)。もう一つは、主文様を海浜図など一枚の絵で描く製品で、口唇部に口銹を施し、裏文様は無文である。銘款も認められない(i-4)。この文様構成は、JB-3-bの小皿にも認められる(3b-1~3)。JB-3-bの器形を呈する小皿には、一枚絵の周縁が墨弾きを用いた文様帯につながり、そのダミが口唇部に至る描写方法が認められる。3aの小皿は玉縁状口縁のJB-2-jをモデルにしたものであり、文様構成もそれを写している。C3b-1, C3は瀬戸・美濃産の小皿で、本段階より出現するものと考えられる。なおC3b-1は色絵である。

**VIII c 期**：本段階では、肥前産の製品は前段階の組成同様 JB-2-e, JB-2-i, JB-3-b を中心としている。瀬戸・美濃産の小皿には型打ちによって文様を構成し、その上にダミをかけその濃淡によって文様を表出する技法が出現する(註3)。C4-1は陽刻, C4-2は陰刻である。

**VIII d 期**：本段階に属する資料は、ほとんど確認されていないのが現状である。JC-3においてロクロ成形後に、木型打ち込みによる印刻を見込みに施す技法が出現する(C3b-2)。施文技法としては前段階の型打ち成形による文様表現の系統上にあるものと考えられる。図示はしていないが、同様の施文技法に小坏にもみられる寿字文を印刻した白磁皿がある。

### 18世紀を中心にした肥前磁器碗・皿の推移

江戸遺跡における磁器製品の普及は、元禄年間頃に一つの画期を設定することが可能で、碗、皿などの饗膳具を中心に階層差、経済格差を超え、浸透していく傾向を窺い知ることができる。その背景には生産地(肥前)において、国内需要に目を向けた生産の転換による普及品の生産、即ちコンニャク判などの印刷技法を取り入れた同一器種の大量生産による低コスト化による要因が大きな位置を占めているといえよう。

本節では、普及品を中心に、前節で述べた各段階の特徴の推移を再整理してみることに

する。

印刷技法を用いた製品は、IV期段階に出現期を求めることができ、碗 JB-1-d (14a, 14 b)、皿 JB-2-e (浅) がそれにあたる。共伴する製品には、碗 JB-1-e, JB-1-f, 皿 JB-2-d, JB-2-e (深) が認められるが、それらにはコンニャク判による製品はほとんど認められないことも合わせ、製品のランクによる差異を想定することができる。

次段階 (V期) には碗 JB-1-g, 皿 JB-2-g が認められるようになる。これらの製品は灰色を帯びた胎土、肥厚した器厚といった点に他の製品との差異が認められるが、器形、法量、コンニャク判による施文技法、年号銘を用いた銘款との共通点から JB-1-d, JB-2-e の系統上に位置付けられる普及品と考える。

IV期段階の銘款には JB-2-d を除けば「大明年製」などの年号銘が書かれた製品が多い。JB-1-f は次段階にかけて年号銘から「渦福」へと推移していく傾向が窺えるが、この傾向は JB-1-g, JB-2-g にも認められる。また碗では青磁染付が出現する V b 期に、清朝の影響と考えられる銘が認められるようになるが、普及品に青磁染付が認められる VI a 期の JB-1-g にやはり同様の銘款が認められる。

V期以降の皿は、口縁で外反し、輪花を形成する JB-2-e (深) と、JB-2-g の共伴が、JB-2-j が出現する V b 期を境に、VI a 期には JB-2-e (深) が、JB-2-j へ、JB-2-g の銘款は、年号銘から「渦福」へと変化している。JB-2-j 自体も前段階の製品と比較して文様の表現がラフに描かれた製品が増加する傾向が認められる。その後、JB-2-j はVII期に出現する高台高の高い JB-2-i にVIII b 期以降主力の座を奪われるが、JB-2-i の普及はVIII b 期に出現する一枚絵による製品によるところが大きい。また JB-2-g に関しても、VIII b 期以降ほとんど認められなくなり、江戸で消費された肥前産の中皿は、JB-2-i に一元化されていく傾向が看取される。

このように肥前製品は、青磁染付、蛇ノ目凹形高台などの新たな技法による新商品が、時間を大きく隔てることなく普及品として量産され、最大市場である江戸に繰り返しもたらされている。この背景には、生産地における弛まない商品研究、市場戦略があることはもちろん、消費者の生活様式、嗜好、流行に対する指向力と、それを実現するための基盤となる経済力の向上があったと推察される。

## おわりに

以上、病院地点報告での磁器碗、皿分類をもとに、新たな細分の提示、銘款を中心とした文様の消長を取り上げ、概説した。前述したとおり、報告書掲載資料のみによるところが大きく、個々の分類の上、下限、または銘款の変遷の位置付けなど流動する要素を抱いていることは否めない。そこで展望を含めおわりにとしたい。

肥前磁器の編年研究において多大な成果を上げた17世紀を中心とした編年に対し、18世紀以降は、窯や物原利用の長期化、有田と近隣諸地域を含む窯場の多様化など複雑な状況がからみ合い、研究の進展に少なからず影響を及ぼしている。

村上の指摘にあるように、単純に肥前磁器として包括して扱うことには限界があり、窯場単位で生産、流通を考察していく必要がある(村上1996)。これは消費地においても当てはまることで、個々の型式が、どのような系統のもとに推移していったのかを考える必要がある。そのためには廃棄要因、廃棄状態を含む遺構一括資料の詳細な分析はもちろん、報告書に掲載されない破片資料に関しても、数量分析などを試み、資料の様相を提示しなければならぬ。そうした手続きを踏まえ、個々の型式の変遷、消長を分析することにより、その系統や、他型式との相互影響を理解することができる。これは単に編年研究という枠にとどまるものではなく、江戸遺跡における肥前磁器の流通、消費の再構成、即ち居住者(使用者)の階層、嗜好を含む生活様式の復原にまで高めていかなくてはならないものである。

## 【註】

- (1) 1994年4月から1996年6月にかけて調査を行った医学部附属病院病棟地点において天和2(1682)年の火災後に盛土造成された整地面から掘り込まれた採土坑(SK03)内より多量のJB-1-dが出土している。ほとんどが手描きによる製品であるが、印刷技法によって施文された製品のうち、型紙摺りによる製品が主体を占める特徴を有す。本遺構の埋没年代は、覆土中に大量に含まれた鈿屑を中心とした建築廃材の存在から、御殿造営時期に位置付けられる。御殿の造営は、加賀藩邸の場合貞亨2(1685)年に着工し、貞亨4(1687)年に竣工している。本遺構出土の建築廃材を加賀藩邸からの搬入と断定することは現段階ではできないが、大聖寺藩邸においても近似した時期に建築が行われていたことは想像に難しくない。これより本遺構の埋没年代を1680年代中葉と位置付けたい。この推定埋没年代を前提に、小石川植物園・研究温室地点SK27出土資料との比較から、1680年代中葉に印刷技法の初現を位置付けたい。
- (2) 有田ではムクロ谷窯8、9層から(有田町教育委員会1991)、波佐見では高尾窯III層より、裏文様に圈線唐草文を施した同形態の皿が出土している。
- (3) 陽刻による型打ち成形の小皿は、外来SK81に青磁製品で1点出土例がある。本遺構は天保3(1832)、

- 4 (1833) 年の紀年銘資料を含む遺構であり、それに近い年代に初現期を置くことができよう。

### 【参考文献】

- 有田町教育委員会 1991『向ノ原窯・天神山窯・ムクロ谷窯・黒牟田新窯』  
飯田町遺跡調査会 1995『飯田町遺跡』  
伊藤末子・梶原 勝 1996「『暦文』の施された肥前産端反碗について」『東京の遺跡』No. 53  
大橋康二 1986『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』  
大橋康二 1991『塩田町志田西山1号窯跡』  
大橋康二・尾崎葉子 1988『有田町史 古窯編』  
紀尾井町6-18遺跡調査会 1994『尾張藩麴町邸跡』  
新宿区南町遺跡調査団 1994『南町遺跡』  
巣鴨遺跡中野組ビル地区埋蔵文化財発掘調査団 1994『巣鴨Ⅰ』  
地下鉄7号線溜池・駒込間遺跡調査会 1994『和泉伯太藩上屋敷跡』  
千代田区紀尾井町遺跡調査会 1988『紀尾井町遺跡調査報告書』  
千代田区教育委員会 1995『江戸城跡 和田倉遺跡』  
東京都埋蔵文化財センター 1994『丸の内三丁目遺跡』  
東京大学遺跡調査室 1989『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』  
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』  
東京大学遺跡調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』  
東京大学埋蔵文化財調査室 1990『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』  
成瀬晃司 1992「磁器碗・皿類の分類」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅰ 発表要旨  
成瀬晃司 1993「17世紀後半代の肥前磁器碗の展開」『江戸陶磁器研究会会報』第11号  
成瀬晃司 1994「肥前産蛇ノ目凹形高台皿(高)の初現について—東大構内 法学部4号館地点出土資料を例に—」『東京考古』12  
成瀬晃司 1996a「東京における肥前陶磁」『考古学ジャーナル』No. 410  
成瀬晃司 1996b「東京大学本郷構内の遺跡—加賀三藩江戸屋敷跡の発掘調査—」『シンポジウム「掘り出された都市」資料集』東京都江戸東京博物館  
成瀬晃司 1996c「江戸遺跡出土磁器碗・皿の変遷一文様、銘款を中心に一」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題』Ⅱ 発表要旨  
成瀬晃司・堀内秀樹 1990「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』  
成瀬晃司・堀内秀樹・両角まり 1994「東京大学理学部附属植物園内の遺跡 研究温室地点—SK27出土の一括資料—」『東京考古』12  
波佐見町教育委員会 1996『Ⅰ高尾窯跡 Ⅱ岳辺田郷圃場整備に伴う確認調査』  
藤本強・寺島孝一・成瀬晃司 1992「東京大学本郷構内の遺跡—医学部附属病院外来棟地点—」『東京都・遺跡調査研究発表会17』発表要旨

第IV部 東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要1

堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡統一編年試案」『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題』

II 発表要旨

堀内秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学埋蔵文化財調査室研究紀要』1

真砂遺跡調査会 1987『真砂遺跡』

村上伸之 1996「生産地における肥前陶磁」『考古学ジャーナル』No. 410

## 付表：磁器の分類（抜粋）

### ◎ JB 群—肥前系磁器

#### ○1—碗

- ・ JB-1-a (高台断面「U」字状, いわゆる初期伊万里)
- ・ b (高台無釉碗)
- ・ c (高台断面三角形の製品, 長吉谷窯指標)
- ・ d (高台断面「U」字状で, 高台高の高い製品)
- ・ e (高台断面「U」字状で, 高台高の低い製品, 内山系)
- ・ f (高台径が小さい半球形の薄手碗)
- ・ g (胎土, 呉須の発色が悪く, 有田内山系でないと考えられる量産碗)
- ・ h (高台径が小さい腰の張る碗)
- ・ i (高台径は小さく, 体部が直線的に開く碗, いわゆる小広東碗)
- ・ j (高台径が小さい腰の張る碗, 小丸碗, 大橋分類小丸碗 A-1類)
- ・ k (大振りの筒形碗, いわゆる初期伊万里)
- ・ l (小振りの筒形碗)
- ・ m (高台高が高く, 体部が直線的に開く碗, 広東碗)
- ・ n (口縁部が外反している碗, 端反碗)
- ・ o (小振りの腰が張る碗, 湯呑み碗, 大橋分類小丸碗 B類)
- ・ p (体部が「八」の字状に直線的に開く薄手の碗, 飯碗)
- ・ q (高台が「八」の字状に開き, 大振りで腰が張る碗)

#### ○2—皿

- ・ JB-2-a (高台断面「U」字状, いわゆる初期伊万里)
- ・ b (高台断面三角形で高台径は小さい, ダンバギリ窯指標)
- ・ c (高台断面三角形で高台径は大きい, 長吉谷窯など指標)
- ・ d (高台断面「U」字状で上質の製品, 南川原窯ノ辻窯など指標)
- ・ e (高台断面「U」字状)
- ・ g (絵付け, 作りが粗雑, 外山系の量産品)
- ・ h (蛇ノ目高台, 初期伊万里)
- ・ i (蛇ノ目凹形高台で高台高が高い)
- ・ j (蛇ノ目凹形高台で高台高が低い)
- ・ k (見込み蛇ノ目釉剥ぎで高台無釉)
- ・ l (見込み蛇ノ目釉剥ぎで, 高台径が小さい)
- ・ m (見込み蛇ノ目釉剥ぎで, 高台径が大きい)
- ・ n (鍋島)

#### ○3—小皿

- ・ JB-3-a (高台高が低い)
- ・ b (輪花)
- ・ c (高台断面三角形)
- ・ d (蛇ノ目凹形高台)

#### ○4—型皿

- ・ JB-4-a (糸切り細工の貼付け高台)
- ・ b (型作り)

#### ○6—小坏

- ・ JB-6-a (丸形)
- ・ b (端反形)
- ・ c (極めて薄手の端反形)
- ・ d (腰折れ直立形)
- ・ e (型作り)

### ◎ JC 群—瀬戸・美濃系磁器

#### ○1—碗

- ・ JC-1-a (丸碗)
- ・ b (小振りの筒形碗)
- ・ c (広東碗)
- ・ d (端反碗)
- ・ e (小振りの腰が張る碗, 湯呑み碗)
- ・ f (体部が直線的に開く薄手の碗, 飯碗)

#### ○2—皿

- ・ JC-2-a (蛇ノ目凹形高台)
- ・ b (輪高台)
- ・ c (蛇ノ目高台)

#### ○3—小皿

- ・ JC-3-a (折縁皿, 木型打ち込み)
- ・ b (丸皿)

#### ○4—型皿

#### ○6—小坏

- ・ JC-6-a (丸碗形)
- ・ b (端反形)
- ・ c (筒形)
- ・ d (極めて薄手)





東大編年	遺構	J B																	J C						J B																	J C				備考
		1																	1						2																	2		3	4	
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	a	b	c	d	e	f	a	b	c	d	e	g	h	i	j	k	l	m	a	c	a							
I a																																														
I b	丸の内 52																							○																JB-2-a見込み吹墨						
II	御532	○	○																					○	○					○										JB-1-b高台無釉碗、青磁染付、JB-1-a「大明」、JB-2-b「角福」、JB-2-h蛇ノ目高台						
III a	紀尾井町SR35	○	○	○																				○																JB-1-a「大明」、JB-1-cに荒磯文、「製」						
	御617			○																				○	○															高台断面三角形の碗 (JB-1-c)、皿 (JB-2-c) 主体、ハリ支え、銘のパリエーション多い角福、「宣徳年製」など						
	御678	○	○	○																				○	○							○								碗はJB-1-c主体、銘のパリエーション多い、「太明年製」「大明」、JB-2-c「角福」、「写真11」など						
	御802			○																				○	○	○														JB-1-c「角福」、JB-2-c「角福」など						
III b	病L32-1			○																				○	○	○														JB-2-c主体、銘のパリエーション多い、「角福」、「渦福 (二重円)」「大明嘉靖年製」「大明成化年製」「宣明年製」「宣徳年製」「写真11」など、主文様に墨弾き、裏文様に蔓草、梅花唐草文、JB-2-d高台に鋸歯状文「写真12」銘、色絵は「古九谷様式」中心						
	御276			○																				○	○	○														JB-1-c高台内二重圏線、「宣徳年製」「化年製」						
	御255a			○																				○	○															JB-1-c高台内二重圏線、「宣明年製」						
	御391			○																				○	○															JB-1-c高台内二重圏線、「大明成化年製」小皿 (JB-3-c) の見込みに型紙摺り						
	病H32-5	○	○	○																				○	○					○		○								JB-1-c白泥型紙摺り、JB-2-c裏文様異形字、梅花唐草文 (縁取り)						
	病棟C <sub>2</sub> 層			○	○																			○	○	○														JB-1-d見込み手描き五弁花、高台内二重圏線、JB-2-dが增加、「渦福」「写真12」銘が主体、見込み中央に五弁花文、裏文様に如意頭唐草文、色絵は「柿右衛門様式」中心						
IV a	小石川SK27			○																								○												高台断面「U」字状の碗 (JB-1-d)、皿 (JB-2-e)、皿は中皿浅め						
	病F34-11	○	○	○	○		△																	○	○	○	○					○	○							JB-1-d (大振り) 型紙摺り、コンニャク判、「大明年製」、JB-2-e (浅) 五弁花、コンニャク判主文、墨弾き、裏文様唐草文、圏線唐草文、異形字文						
IV b	巢鴨 I 1号遺構			○	○	○	○	△																		○	○	○				○								JB-1-d (小振り) コンニャク判、型紙摺り「大明年製」、JB-1-e見込み五弁花、「渦福」、JB-1-f主文様草花、唐草、松竹梅多い。「大明成化年製」「大明年製」「渦福」、JB-2-e (浅) コンニャク判五弁花、裏文様如意頭 (輪郭) 唐草文、圏線唐草文、「太明年製」、JB-2-e (深) 輪花、見込み五弁花、裏文様如意頭 (輪郭) 唐草文「大明年製」、JB-2-k折り枝松葉文						
	病K30-1			○	○	○																		○		○	○													JB-1-d (小振り) コンニャク判、型紙摺り「大明年製」銘、JB-2-e (浅) コンニャク判五弁花、裏文様圏線唐草文						
	御537			○	○																					○	○													JB-2-e (浅) 裏文様如意頭 (輪郭) 唐草文、圏線唐草文、五弁花、コンニャク判五弁花、JB-2-e (深) 輪花、五弁花、如意頭 (輪郭) 唐草文、「大明年製」銘						
	VMC SK09			○	○	○	○																	○	○	○	○													JB-1-d (小振り) コンニャク判、型紙摺り「大明年製」、JB-1-f草花、「大明年製」「大明成化年製」、錦手小坏 (JB-6-e)「富貴長春」、JB-2-e (浅) 圏線唐草文						

江戸遺跡主要遺構出土磁器碗・皿の組成(1)

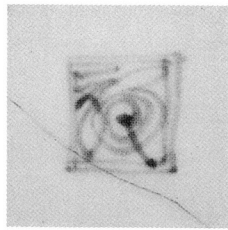




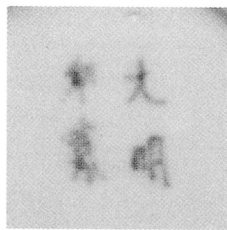




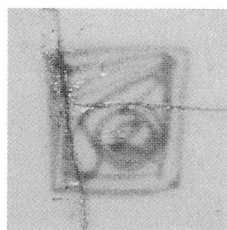




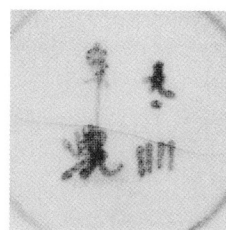
1



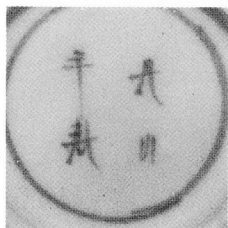
2



3



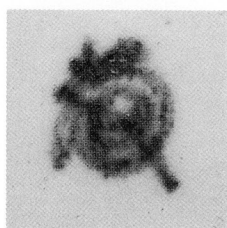
4



5



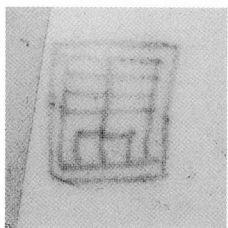
6



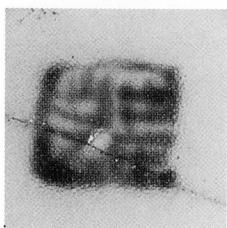
7



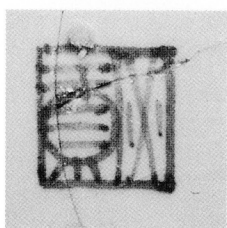
8



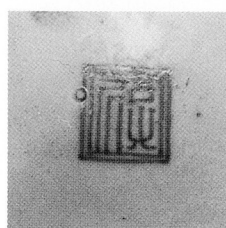
9



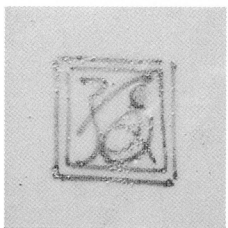
10



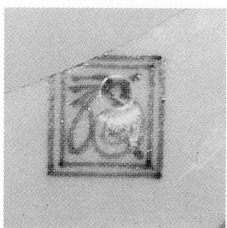
11



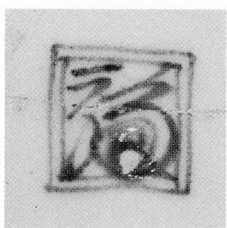
12



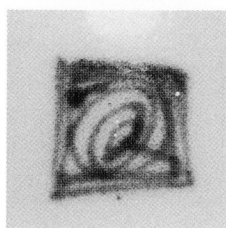
13



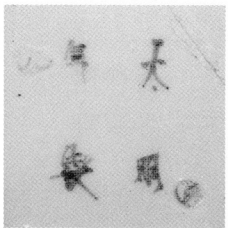
14



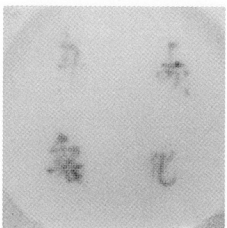
15



16



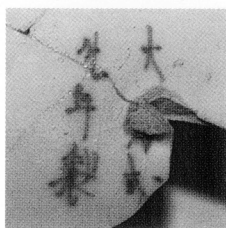
17



18



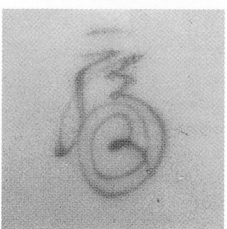
19



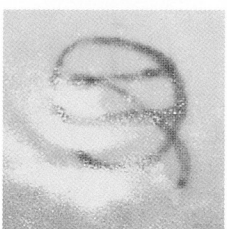
20



21



22



23



24

PL.1 磁器碗・皿の銘款





東京大学構内遺跡調査研究年報 1

1996 年度

1997 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場 4-6-1

印 刷 よしみ工産株式会社  
北九州市戸畑区天神 1-13-5